

「こんな不吉な趣向は、アトレでなければ、テイエストにふさはしい。」  
「これはクレビヨンの『アトレ』の中の文句だ。」

(アトレとテイエストは兄弟だが、テイエストがアトレの妻を奪つたので、アトレはその復讐にテイエストの二人の息子を殺してその肉を彼に饗應した——譯者)

— 終 —

## メエルストロウム

神の御業は「攝理」の世界に在りてはもとより、「自然」に於てもまた 吾等人間の工と異なる。神の御業は、その餘りに廣大無邊にして探るを許さざる吾等人間の之に擬へて作り得べくもあらず。洵、神の御業は「デモクリタスの井戸」よりも彌深し。

シヨセフ・グランビル

私達は漸く、空に懸るその斷崖の上に迹り着いた。老人は始め暫の間、黙つてゐた。彼は餘りに疲れてゐるやうに見えた。然しややあつて彼は口を開いた。

「これが三四年前なら、私は、自分の末つ子と同じ位の元氣で貴方を此處に御案内する事が出来たでせう。だが今から約三年ほど前に、凡そ人間には到底起るべきでない事——いやよし起つたとしても生き残つてその話を語ると云ふやうな事の全く有り得ない——そのやうな事件がこの私の身に起つて來たのです。その時私が経験した死にも増る恐怖の六時間の爲に私の軀も、精神もすつかり壞れてしまひました。あなたは私を大變年寄と思ふでせうが、實際は、さうではないのです。漆黒の髪を白髪にし、手足を曲げ、神経を狂はせるのに、もの一日とかかりませんでした。私は一寸とした事にもすぐ昂奮して五體が慄へます。僅かな物の影にも怖えます。たかゞこれしきの崖縁でも下を見ますと



「向うの遠い島は」と老人は再び言葉の穂をついだ。「ありや諸威人がヴェルと呼んでゐるところのもので。真中にあるのがモスケエです。北方一哩の所にバアレンがあります。向ふにはイスレーゼン、ホトホルム、カアイルドヘルム、シユアルベン、ブックホルム等があります。更に遠く、モスケエとヴェルの間に、オッタホルム、フィルメン、ストックホルム、があると言ふ譯、此等はみんなどれもこれも眞實の地名ですが、何故こんな名前を附けるのが必要であるのかは私やあなたの理解できない所です。さて何か聞えますか、水流の變化がわかりますか。」

吾等は、ヘルセゲンにロホテン島の内側から登つて來たのであつて、頂上に達するまでは海の片影すら見えなかつたが、頂に迷りつくと海の眺望がいきなり展開して來た。吾らはかうして十分間ほど坐つてゐたが老人に訊かれた時、私はまるでアメリカの牧場の牛の夥しい群が咆哮するやうな、漸層的に高まつて行く響を耳にしたのである。同時に、此處の海特有の、水夫たちの所謂『逆流』が忽ち湖流となつて東の方へ進み始めるのに氣がついた。それは見る見る中に凄じい速さを加へて今にも前のめりに崩れるかと思はれるほど性急に突進するのであつた。五分間の内にヴェルの邊まで全海一面どうすることも出来ない怒りに沸騰するに到つた。然し最も中心的に猛り立つてゐるのはモスケエと海岸との間である。此處では茫漠たる水の寢所が今や裂かれ、刻まれ、抉られ、無數の相剋する水流と變じて猛り哭き、犇めき、遂には巨大な、數知れぬ渦卷となつて、直下する急湍以外何處にも見られぬ速さで東方へまつしぐらに旋轉して行くのであつた。

更に數分經過すると、またもや全景が根本的に變つた、海面全體がいくらか風ぎはじめた。渦卷が一つ一つ消えて行つた。然し、今まで全く見たこともない巨大な泡の斑紋があらはれ始めその斑紋が遠く遠く擴がつて互に相結び、一旦靜まつた渦卷の旋回的運動を再び引繼で、更に一層大きなものを生み出さうとするやうに見えた。突然、——實に突然——これは全く明瞭な決定的な形を示すに至つた。それは直徑一哩以上の一個の圓であつた。この渦卷の周邊は煌く水煙の幅廣な帯に依つて描き出されてあつた。然しこの帯は何の部分も全くこの恐しい漏斗形の口の内側までは迂り込んでゐなかつた。その内側は、目の計り得るかぎりでは、滑々とした、光澤のある、黒玉のやうな眞黒な水の壁であつて約四十四度の傾斜をなして、熱氣を發する恐しい速さで目眩しく廻轉してゐた。爲に風を生じて、悲叫とも怒號ともつかぬ、凄まじい唸が聞えてゐた。ナイヤガラの大瀑布といへど、これほどの苦悶の呻を天空に向つて揚げはしないであらう。

全山は根こそぎに揺ぶられた。巖は巖と共に激しあつた。私はうつぶせになつたまま神経がすつかり惑亂して地面の乏しい草に懸命にしがみついてゐた。

「これが例のメエルストロウムの大渦卷なんだ。さうでせう？」私はやつと老人に訊いて見た。「ええ。ある場合には、さうも言ひます。吾々諸威人は、しかしあの真中にあるモスケエ島から取つてモスケエストロウムと言ひますよ」と老人は答へた。

一般に流布してゐるこの大渦卷に關する記事は私がいま眼の邊り見るところのものに取つては何の



参考にもならなかつた。デヨナスラムスの記事は、群書中おそらく最も丁寧なものであらうけれど、この情景の莊嚴や、恐怖や見る者の度膽を抜く奇觀の無氣味な、惑亂する感じに就いてはほんの微な概念すら示すことが出来ないのである。ラムスカどう言ふ位置から、また如何なる時に、これを觀測したのか私は判斷に苦しむのであるが、とにかく彼が見たのはこのヘルセンゲンの頂からでもなく、また渦亂の起つてる最中でもないことは確である。しかしその詳細な部分を知るために數章此處に引用しておかう。勿論その描く所は現状の印象を傳へるべく極めて薄弱なものであるが。

「ロホテンとモスケエ兩島間ニ於ケル水深ハ三十六尋乃至四十尋ナリ。サレドヴエ島ニ近ツクニ從ツテ水深著シク減ジ最モ靜穩ノ日ト雖モ坐礁ノ危險アリテ船舶ノ航行容易ナラズ。滿潮ニ際シテハロホデン、モスケエ間ニ水流一時ニ奔溢シ來ル、マタ退潮時ノ天地ドヨメク波濤ノ叫號ニ到リテハ豪壯誇ルベキ急湍飛瀑ノ鳴動モ言フニ足ラザルベシ。ソノ般々タル咆哮ハ十數哩ヲ距テ、ナホ聞クヲ得ベク渦淵ノ深クシテ廣キコト、一舟ノソノ引力圈内ニ來ルトキハソノママズルズルト吸引サレ海底ニ運ビ去ラルルヲ常トス。而シテ海底ノ岩礁ニ衝撃シテ千々ニ引裂カレシソノ姿ハ流水ノ一時和グトキ再ビ海面ニ浮ビ上ゲラルルニヨリテコレヲ知ルベシ。カク流水ノ平靜ニ歸スル時間ハ干満ノ交代時ニ於テ僅ニコレヲミルノミ。而天候順良ノ日ニカギリ、コノ平靜狀態ハ僅ニ十五分ヲ持續スルニスギズ。カクテ再ビソノ狂奔ニ歸スルナリ。潮流最モ激昂シ、更ニ天候險惡ニシテ一層猛威ヲ振フ時ハ(諾威風ノ里程ニシテ)一湮内ニ入ルヲ危險トス。一湮内ニ來ラザル中ニ早クコレ

ニ對應ヘルトコロナキ時ハ小船快走艇ハ無論、汽船ト雖、次第ニ吸引サルルニ到ルベシ。鯨魚ノ類コノ潮流ニ觸レソノ狂激ナル水勢ニ壓倒サルルコト尠カラズ。彼等ノ逃レントシテ得ザルトキノ叫喚、怒號ハ洵ニ筆舌ノツクスベキニアラズ。嘗ツテ一匹ノ熊、ロホテンヨリモスケエニ泳ギ渡ラントシテ偶々コノ潮流ニ囚ハレ押流サレユクソノ咆哮ハ遠ク陸地ニ聞エ來タリテ聞クモノノ心膽ヲ寒カラシメタリ。

橢、松等ノ大樹、潮流ニ捲キ込マレシ後、挫ケ干切レテ漂流シ來タルコトアリ、此等ハソノ樹肌一面ニ刺毛ノ密生シ居ルガ如ク見ユルマデ散々ニ苛ナマレ來レルモノナリ。カクノ如キハ總テ渦卷ノ底ガ峨々タル岩礁ヨリナルコトヲ明示スルモノト言フベシ。コノ潮流ハ六時間毎ニ交代スル海水ノ干満ニヨリテ規則的ニ支配サルルモノナリ。紀元一六四五年大齋前第二主日ノ朝未明ニ、潮流ノ狂瀾怒號殊ニ激シク海邊ノ人家ノ瓦石爲ニ崩落スルニ到レリ。」私は渦卷を作つてゐるその區域に就いて、直接の深さを確知する方法を全く知らないのである。「六寸」と稱するのは、モスケエ或はロホデンの陸地に近い部分にのみあて嵌るのであらう。このモスケエストロウムの中心部に到つては洵に量り知るべからざる深さを有するに違ひない。ヘルセゲンの最も高い懸崖からこの渦卷の深淵を斜に覗き込んだだけでこの事實を十分に知り得るのである。この尖端から見る時は、最大級の戰艦ですらこの渦卷の死力的な吸引力の影響範圍内に這入るや否や狂風の中の羽毛のやうに全く無力になつて忽ち波間に没して仕舞と云ふ事實を自然に首肯しなればなら



なくなるのである。

渦巻の現象を説明せんとする諸種の企——讀んである時は尤もらしく思はれるものもあるにはあるが——は今や全く見當外れの不満足な點を持つてある事がわかつた。一般に信じられてある考はかうである。——此處の渦巻もかのフロエ諸島中のより小さな渦巻と同様に「滿潮、並ニ干潮時ニ於テ暗礁岩層等ノ隆起部ニ對スル波濤ノ衝突ガソノ原因ニ外ナラヌノデアアル。コノ隆起部ガ水勢ヲ阻止スル爲ニ遂ニハ溢レテ飛瀑トナツテ奔逸スルノデアアル。カクテ滿潮ノ上昇ガ高ケレバ高イホド干潮ノ下降モソレダケ深イモノトナル。コレヲ原因ニ依ツテ必然的ニ渦巻ガ生ズルニ到ルノデアアル。カクノ如キ渦流ノ吸引カノ絶大ナルコトハ、小サナ渦巻ニツイテ實驗シテモ充分ニ判ルコトデアアル。」以上は大英百科全書から引用して見たのである。キルチャ其他はメエルストロウムの潮流の中央には地球を貫通する深い穴が開いてゐてその一端は非常に遠く例へばバルチック海の北方ボスニア灣邊の——海底に出てゐるのではないかと考へてゐる。この議論は其自身として根據のないものであるが、私もそれを見た時は或は然うではないかと想せられたところの議論であつた。そこで私は案内者にさう言ふ考を話して見たのであるがその種の考は諸威人の殆ど總てが抱いてゐるけれど、併し彼の自説は全く異つてゐると聞いて私は一層驚いた。前述のやうな考を彼は全く理解し兼ねると告白した。何故ならば紙上に於て如何にかゝる考が決定的であるにしても、現實にメエルストロウムの動哭の唯中に在る時に、全くそれらの議論は理解し難い、むしろ荒唐無稽なものと變つてしま

ふからである。——私も此の點彼に承服したのである。

「これであつたもあの渦巻をすつかり見ることが出来たから、さあこれからこの斷崖を廻つて風下に出ませう。其處で私はあなたにお話をしあげますが、その話を聞くとなるほどメエルストロウムに就いてならこの私が多少知つてゐてもいい筈だと思ひになるでせう。」

私は彼が言ふままにした。で、彼は語り始めた。

「昔私と私の二人の兄弟とで約七十噸積のスクーナー型の漁船を一艘持つてゐました。それを出してはよくモスケエの向ふ、ヴェルに寄つた島々の間で漁をしてゐました。少々大膽にやつてのける氣さへあれば激しい浪が小渦を巻いてゐる邊を狙ふと必ず良い漁が出来るのです。然しロホテン全島の漁師中この邊に出て魚を取るのを毎日の仕事にしてゐるのはこの私等三人だけでした。漁區は廣くて遠く南の方まで延てゐました。魚が何時行つても大した面倒なしに取れる場所は目星をつけて置きます。かう言ふ取置き場所は岩だらけの間にありますが、魚は素晴しく種類が多く、量が比較にならぬ程豊富でした。だから私たちは外の氣の小さい連中が、一週間か、つても取り蓄められないだけのものを、ほんの一日で取つて仕舞ふことは始終でした。實際私達はこれを命がけの運否天賦の仕事にしてゐました。骨折りの代りに、命を資本の代りに勇氣を賭してやつてゐました。」

「私たちは舟を此處から五哩ばかり上へ行つた海岸の入江に繫いで置きました。さうして晴れた日には、いつもモスケエストロウムの主流を例の十五分の滯潮を利用してその渦巻の中心を避けつつ乗



切つてゆき、それからオッタホルムかサンドフレゼン邊まで行つて——そのあたりが他の場所ほど小渦が激くないので、錨を下すことにしてありました。私たちは其處に次の滞潮が再びやつて来るまで止つてゐます。その滞潮を見計らつて家路につくと云ふ風にしてゐました。私たちは行くにしても歸るにしても、確實な横風がないと見た時には決して舟を出しませんでした。——私たちが確信した時は歸りつくまで殆ど大丈夫でした。——私たちのこの點に就いての觀測は滅多に失敗するやうなことはなかつたのです。ただ六年間に二回、歎息ほどの風もない爲に、海の上で夜明したことがありません。そんな事はこの界限の海ぢや全く珍らしいことなのです。それから一度は、私たちがいつもの漁場に着くと間もなく吹き出した強風の爲に、海峡が途方もなく荒れてしまつて一週間と云ふものは飲まず食はず死ぬばかりになつて、其處に残つてゐなければなりません。あの時などは、どんなに骨折つて見たとこでせう。(なにしろ渦巻く水勢でぐる／＼廻されて錨は纏らかるし、どうにも手の出しやうがなかつたので) 外海へ押流されてしまつたに相違なかつたのですが、いい鹽梅に無數に入亂れてゐる逆潮の一つに乗り入れて、今日は此處明日は彼處と云ふ具合に漂流しながらも、フリメンの風下まで運ばれ来ました。で幸ひ其處に船を着けることが出来ました。

「いや、全く、漁場で味つた難儀を、せい／＼二十分の一程でもおしらせ出来るといひんですが、とにかく私達の漁場と來たら、どんなに好い御天氣の日でも洵に無氣味な場所でした。然しどうにかかうにか大した怪我もなしに、モスケエストロウムの鼻面で、きはどい藝當をやつて退けてゐたんです

が、そのストロウムの滞潮と一分でもかけ違つて遅れたとか早過ぎると云ふ場合には、思はず臆を冷しましたよ。風が始めの時ほど強く吹いて呉れないので思ふやうに舟足が捗らないし、一方潮流が意地悪く舟に絡んで來る——そんな時に私たちの子供があたり一番上の兄貴が十八になるのを一人、私も自分の頑丈な奴を二人ももつてゐましたが、漁場ではもとより、そんな時にはことに一生懸命になつて長櫓を押して手傳つて呉れるだらうと思ひましたよ。然し自分等だけは命賭けの仕事はしても子供たちまでその危険に引摺り込まうと言ふ氣は全く持つてゐませんでした。なんののかんの言つても正直な所、その仕事は結局、危険極まるものでしたからね。

「私がこれから御話しようとする事件が起つてから今日でやつと三年になるかならないかです。それは一八——年、八月十日の事でした。その日はこの地方一圓の人たちが決して忘れるところのできない日です。と言ふのは、これまで空から吹いて來た強風の中で、一番凄い風が吹いた日だからであります。而も朝から午後もおそくまで、靜かな確實な軟風が南西から吹いてゐて、太陽が麗かに輝いてゐたほどでしたから、漁師仲間のどんな年功者でも、これからどんな事が起るか全く見わけが付かなかつたのです。

「私達三人——私と兄弟二人——は午後二時頃、例の島々に向つて漕ぎ渡りました。私たちの舟は忽ち素晴らしい魚で一杯になりました。實際この日ほど漁のあつたことはかつて知りませんでした。私の時計の、恰度七時に私たちは歸路につききました。さうしてメエルストロウムの最難所を滞潮の時——



それは八時だと知つておきました——を利用して通り抜ける寸法でした。」

「私たちは右舷四十五度に新しい風を受けて極めて軽快に疾走して行きました。危険の事などは夢にも想はずにさうしてまた危険を氣遣ふ理由は、これつばかしもなかつたんですから。」

ところが、ところがです。全く不意にヘルセゲンの峰越しに吹いて来た風に依つて、私達の舟は忽ち裏帆になつてなつて了りました。こんな事は全く珍しい。私達の嘗て経験しないところでした。私達はその理由が判りかねて一寸薄氣味が悪くなりました。仕方なく帆を直して風上に間切るやうにしました。が小渦の爲にどうにも舟が進まないのです。で、元來た所へ引返さうかと思つて鱸の方を見ますと、水平線一杯に恐ろしい速さで、妙に赤銅色をした雲がみるみる擴つてゆくのでした。

「と思ふと今しがた不意に吾々の眞向ふに吹き廻つた風の奴がバツタリ止んで、同時に舟足は全く停つてしまひ、ただその邊をぐるぐる漂つてゐるだけでした。だが、この状態も、なんとか對策を考へ出す餘裕を與へるほど長く續きませんでした。一分と経たない中に暴風です。二分と経たない中に空一面雲が張り渡つてしまひ、それに飛沫が四邊を封じ籠めて、舟の中のお互の顔がわかりかねるほど暗くなつてしまひました」

「その時の狂風の猛烈さはとても御話になりませんでした。諸威のどんな老人の漁夫でもそんな甚いのを見たことがなかつたのです。狂風がやつて来る前に帆索を弛めて置いたのですが、最初の一吹きで手もなくまるで鋸で挽き倒したやうに吾々の帆柱は挫けて海中にけし飛んでしまひました——私

の末の弟は用心深く主橋に體をくくり付けてゐたのですが、そいつも諸共にやられました。

「吾々の舟は、これまで海上にあつたものの中の一筋の塵毛のやうなものでした。それでも全通しの立派な上甲板があつて、艀口が艀の近くに附いておりました。この艀口はストロウムを乗り切らうとする時は逆波を用心していつでも閉めることにしてありました。實際かうでもしてゐなかつたならば、私たちの舟は浸水して危く沈んでしまふところでした。なにしろ暫の間全く浪を冠つてしまつたんです。私の兄貴についちや、一體どうしてこの難場を切り抜けたか別りませんでした。何が何やら確める機會など無かつたからです。自分はと言ふと、前橋の縮帆の帆索を突放すや否や、べつたりと甲板の上に腹這ひになつて、艀の上縁に足を突張つたなり、前橋の根つこにある環付釘をしつかりと握つておりました。これは何もかも考へての仕事ではありません。夢中でやつたことなのです——然しこれがこの場合としては吾ながら適宜の處置でしたよ」

「かくして數分の間、私たちはすつかり水の下にゐました。私は息を耐えて、ボルトにしがみついておりました。もはや耐へられなくなつて、半身を半ば擡げると頭だけがやつと水の上に出ることが出来ました。と、舟の奴も、恰度水から上つた犬がブルブルと一振ひやるやうに、ひと揺れ揺れて浸水した水のある程度まで、自然に拂ひ出しました。私は虚脱したやうな状態から出来るだけ早く回復して、何とかこの場の策を考へ出さうと努めました。その時、誰やら私の腕を握つたらしく思つて見ると兄貴です。私の心臓は悦びで跳ね上りました。私は彼がてつきり海に落ちたと信じておりましたから



ね——然し次の瞬間その悦びが悉く恐怖に變りました。——と言ふのは兄貴の奴、私の耳元に口を寄せて一聲悲しく喚きました——

『モスケエストロウムだぞ!!』

「この場合、どんな氣持がしたか誰だつて判りつこないのです。あの瘡の一番猛烈な發作の時のやうに私は頭から爪先までガク／＼と震へました。兄貴が此一語は何を意味したのか私にはよく判りました。舟足を追うて來た風と一緒に私たちは『ストロウム』の渦の圈内に吸ひ寄せられておりました。もうかうなると何物も私たちを救ふことが出來ないのです！」

「これまで、私たちがストロウムの潮流を乗り越えてゆく時はどんなに靜穩の目でも出來るだけ渦の中心から遠ざかつて、而も、その滯潮の時間を注意に注意して見計つて行つたのです。ところが今や舟はその渦の中心に募地に駛つて行くのです。而もこんな凄惨な狂風の日には、『いい鹽梅に滯潮の時刻に乘入れることになる』と、ちつとは望みもあるぞ」と思つてみました。次の瞬間、自分がかりにもそんな望みを抱くなんてどんなに阿呆らしいことが呪はしくなりました。今となつてはこの舟が九十門の大砲を載せた軍艦の、よしんば十倍あつたところで、運命はきまつてゐるのです。

「この時、暴風の狂ほしい怒りはそれ自身の力を使ひ盡してしまつたのか、或は、私たちがそれほどに感じなくなつてしまつたか、いくらか軟いだやうであつたが、然し、海は、初は風に依つて抑へ付けられ、平く騒めいてゐたのが、今度は巨大な山となつて膨れ上つて來ました。空にも、一つの變化

が起りました。依然として四邊は漆黒のやうに眞黒でありましたが、突然私たちの頭の上あたりには雲切れがして澄み渡つた空の圓い切れ目が覗かれました。そんなにも清らかに澄み切つた、そんなにも深い藍碧の空がまたこの世にあるものでせうか。さうして満月が、その中に今まで見たこともないやうな光澤を帯びて皎々と冴えてゐるのです。彼女は非常な明かさで私たちの周圍の總てのものを照

し出しました。然し、神よ。彼女が照し出したその光景は如何なるものでしたらう!

「私は一、二度兄貴に話しかけようと思いました。けれどもどう言ふものか海鳴が激しく高まつて來ていくから甲高い聲を擽つても一向話を通じないのです。すると兄貴は死のやうに蒼ざめてかぶりを振りま

した。さうして指を一つあげて『聴け』と言つてるもののやうな素振をしました。

「初の中、彼が一體何を意味してゐるのかさつぱり別りませんでした。然し、不意にある不吉な考へが頭に閃きました。私は衣囊から時計を引張り出しました。そいつは停つてゐるのです。私は月の光で時計の面を見詰めてゐましたが、いきなりそいつを遠く海の中に抛り出してワツと泣き出してしまつたのです。時計は七時の時にすでに止つてゐたのです。私たちは滯潮の時間に立ち遅れてしまつたのです。さうして今やストロウムの渦の狂ふ最中に來たのです。」

「舟が丈夫作られてあり手入れが届いてゐて、あまり荷物を積んでゐないと、強風の場合の浪は追風の時ならいつも舟の下を滑り抜けて行くのです。海の素人には一寸不思議ですがね——これは海の言葉で『乗る』と言ふんです、で、私たちの舟もこれまでは旨くこの浪の紆りに『乗つて』やつて來た



のですが、ところが今度は素晴しく巨きな濤が船尾突出部を狙つて来て、船體諸共に高く高く、斯も高く上がる事が出来るものと私はそれまで信じてゐなかつた——私たちが掬ひ上げて行つて、更に其處からまた私たちを滑りこかすのでありました。私たちはくらくくと眩暈を感じて胸が吐き上げてくるのを覚えました——まるで夢の中で高い山の頂天から一氣に顛落るやうな気がしたのです。然しながら、それでも高く差上げられた時は、敏捷くあたりを見渡しました。まつたくたゞ一目ちらつとさせるだけで充分でした。一遍に吾々の今の位置が明瞭と判りました。モスケエストロウムの渦巻は私たちの真正面四百メートルと離れてゐない所にあるのです——然し見たところではモスケエストロウムの渦巻は日頃見慣れたものとは違つてむしろ水車の用水溝のやうでした。若し私が自分が今居る所を知りもせず豫期もしなかつたならば、それがメエルストロウムの本流だとは気が付かなかつたでせう。然し、今の場合、私は吾れと吾が眼を恐しさのあまり閉ぢました。痙攣でもしたかのやうに兩臉がぎつしりと固着いて離れないのです。

「それからものの二分と経ない中に、急に濤が無くなつて一面の泡に包まれました。さうすると舟は左舷の方に急角度に折れてその新しい方向に稻妻のやうに走り出しました。同時に咆えるやうな潮鳴が止んで、今度は数千の汽船が水管から一齊に蒸氣を押し出したと想はれるやうな鋭い叫喚に變つて來ました。私たちは今渦巻の周圍をいつも繞つてゐるあの寄波の圈内に這入つて來たのです。私は勿論、この次の瞬間には例の深淵へ眞逆様に落ち込むことを覺悟して居りました。その下の方は

まりに舟が速く走つてゐるので、ただ漠然と見ただけでした。舟は少しも水の中へ沈まないらしくただ濤の上を氣泡のやうに掠めて走つて居りました。右舷は渦巻へ紙一重と言ふ處に來てゐて左舷の方には今越えて來た満々たる水面が聳えてゐました。それは水平線と私たちの間に捻くり曲つた巨大な壁のやうにそり立つてゐました。

「かくして私達がいよいよこの深淵の入口に這入ると、不思議なことには、遂今しがた此處に近づきつゝあつた時よりも心が變に落着いて來ました。いよいよ往生だと觀念してしまふと、最初私を慄ひあがらせた恐怖が非常に薄らぎました。妙に大膽に想はれますが、實際私は謙を申すのではありませぬ。こんな風にして死ぬと言ふ事がとても莊嚴な事ぢやないか。かくも靈妙な神の御力の啓示に際して、自分一個のケチな生命などを問題にするのはなんと愚しくも小さな事だと言ふふうに思ひ直して來たのです。かう言ふ考へが心に浮んで來ると今までの自分と言ふものが恥しくなりました。やがて私は渦巻そのものに對して、なんとも言へない強い好奇心が湧くのを感じました。たとへ死ぬにして、この渦巻のどん底を探險してみたいと言ふ希望を強く胸に感じました。たゞ私の一番大きい悲しみは、眼の前みるこの神祕を陸に居る人間達に知らせる事が出來ないと言ふ事のみでした。これらの考へは疑もなくこの極端な窮迫に置れた男の心に浮ぶべく餘りに妙な觀念でありました。私はそれ以來屢々考へるのですが、渦巻の周圍を舟がぐるぐるあまりに急轉した爲にひよつとしたら可愛想に私はあの時氣が狂つてゐたのぢやないかと想ふのです。



「私を落着かせるやうにしたもう一つの原因は風の音が止んだ事がありました。たとへ、あつたにしてもその位置まで聞えて来やうがなかつたのです。と言ふのは、今しがた、あなたが御自分で見たやうに、寄波の圈内は一艇の海面よりも遙かに低いのです。で、その海面が高い眞黒な山脈のやうに私たちの上に聳え立つてゐるのでした。あなたが酷い暴風の日に海上にあつた経験がないと風や飛沫が一緒くたになつて人間の心をどんなに惑亂せるものであるかを考へては頂けない譯ですが、此奴が全く人間を盲目にし、韓にし、果ては緊付けにかゝるのです。さうして體を動かしたり物を考へたりする一切の能力を挽き取つてしまふのです。

「然し、今のところ大體この風や飛沫の苛みから免れて落着くことが出来たのです。——恰度いよいよ死刑と定つた極悪人がまだ刑の確定しない中は全然禁じられてゐた些細の慰みをその執行に先立つて許されるやうなものであります。

「一體何回この寄波の圈内を繞つたものかとてもお話できない程です。ものの一時間もぐるぐる廻つてゐました——恐しい速さで、水面に浮んでと言ふよりはむしろその上を飛び掠めた。さうしてだんだん寄波の中心に近づき、それから更に深淵の落口の内側へと次第に迫つて行くのでした。この間も始終、私は例の環付釘を放しませんでした。私の兄貴は艦の方に居て、船尾突出部の籠の下に安全に押しやられてあつた一つの水樽に組つてゐました。先刻狂風に襲はれた際に、海中に攫はれずに残つてゐるものと言へばたゞこの水樽だけでありました。ところがいよいよその大渦卷の穴の縁まで近づ

くと、兄貴はこの水樽から手を放して私の捉つてゐる環付釘にしがみついて来たのです。然し環付釘は二人が一緒に握れるほど大きくはなかつたので兄貴の奴は恐怖の餘りに遮二無二私の手をそれから拂ひ退けようとするのです。私はこの時程情けなく感じたことはありませんでした。いや、もとより兄貴がそんな事をするに到つたのは彼が氣が狂つたからだ。餘りの恐しさに錯亂してしまつたからだとおぼしめてゐましたが、それで、私は兄貴と争ふことをやめました。結局そのボルトを誰が掴んでゐやうと同じ事だとわかつてゐましたからね。私は手を放しました。さうして艦の方に進んで行つてその水樽に掴りました。かうするのは別に難しいことは無かつたのです。と言ふのは船が極めて安定した形で水面と平行したまま——渦卷の熱氣を發する激しい速度の爲に少々揺れるけれど——廻つてゐたからで、私がこの新しい位置に述べつか着かない中に舟は突然激しく右舷に傾いで、そのまま深淵に眞逆様に突進したのでした。私は慌てて短い禱を神に獻げました。もう萬事終れりと思ひましたよ。云々ぐらぐらつとする激しい落下の速度を身に受けた時、私は樽にしがみついた手に思はず力を入れて眼を閉りました。さうして數秒の間眼を開けることが出来なかつたのです。今死ぬか今死ぬかと待つてゐたのですが不思議なことには水中での斷末魔の足搔がなかなかやつて来ないのでした。一刻一刻と過ぎて行きました。俺はまだ死なずにあると思ひました。墜落の感じが止まりました。さうして舟は先刻、泡の圈内にゐた時と殆んど變らない状態で相變らず駛つてゐました。たゞその時よりは船體が一層傾いであると言ふだけでした。で、私は勇氣を取戻して、再びその周圍の情景を見渡しました。



「一渡り周囲を見渡した時の、畏怖の、戦慄の、讚歎の、激情を私は死ぬまで忘れる事が出来ないでせう。舟は、廣漠たる圓周と巨大な深さをもつた漏斗形の水壁の内面に、その中程邊りと見ゆる邊にさながら魔法でもあるかのやうに掛つてゐるのでした。それに満月——先程お話しした雲の只中に開いた空の切れ目に照つてゐたあの満月——その光が金色の溢れるばかりの輝きとなつて眞黒な水壁を傳つて深淵の奥底遠く降つて來るのです。實際その水壁は眞黒でした。若し、それがこの満月の光を吸つてキラキラと妖しい光を發しませず、またそのやうに狂ほしい速さで廻つてもあなかつたならば、人はきつとその水壁を黒檀だと思つたこととせう。

「最初あまりに驚歎して何が何やらハッキリと見別けることが出来ませんでした。最初に見たところの總ては、この俄に眼前に出現した怖るべき巨大さ——唯それのみでした。然し次第に吾に歸へるに及んで、私は本能的に下の方を見たのです。渦巻の傾斜面に舟が懸つてゐるので下の情景は何ものにも障られずに見ることが出来ました。舟は全く平に、即ち水面と平面を保つてゐるのでした。但しこの水面が四十五度以上の斜面を作してゐましたから、言はば、私たちは横様に立つてゐた譯になるのです。然しです。こんな位置にありながら、私達の足場が、さながら全くの平面上にあるやうに樂である事に注意せずにはゐられませんでした。これは、多分、舟の旋轉する速力が餘りに激しかった爲でありませう。

「月の光はこの深い淵の遠い奥底までも届いてゐるやうに見えました。然し私は何も明瞭と見ることが出来なかつたのです。と言ふのは一切が霧に包まれてゐたからです。さうしてその上に虹が——かの回々教徒が、現世と永遠の國とを結ぶ唯一の通路と言ふところの狭い危げなその懸橋のやうに、世にも壯麗な虹がかかつてゐるのでした。即ち霧飛沫は、疑ひもなく、この漏斗形の水壁が底の方に到つて相合し相激し合ふが爲に生じたのであります。——然しその霧の底から天空に向つて湧き上る叫聲を、私は一體何に喩たらいいものでせう。

「最初、泡の圈内からこの深淵に吸込まれた時は此斜面を入口から、かなりの距離の處まで滑り落ちて來たのです。然しそれから先きは進み方が全く不規則でありました。ぐるぐる廻つてゐることはあつたが一定の進み方でなくて、眩暈のする程速くなつたり、急にぐいと小突かれたり、時にはせいぜい一碼、また時によると殆んど完全に渦巻を一周したり、と言つた具合でした。とにかく下降の速力は一周する毎に次第に遅くなり、四邊がはつきりと眼に映るやうになりました。

「私は自分たちの捲込まれてゐるこの液状の黒檀層の茫々たる廣りを見廻した時に、私共の舟ばかりがこの渦巻の抱擁の中にあるのではないと言ふことに氣がついたのです。私たちの上にも下にも、船舶の破片やら、建築用材やら、生木の幹やら、それから細々しい切れつ端、たとへば家具、破れ箱、樽、桶板などの断片が夥しく眼につきました。私は自分の異常な好奇心が既に最初の恐怖心に取つて代つた事を先程申しましたが、それが私の最後の運命に近づけば近づく程いよいよ増大して來るものであります。私は竝々ならぬ興味をもつて私達と一緒に漂うてゐる種々雑多の物を見詰めました。



私は氣が變になつてゐたに違ひはありません。——と言ふのは下の方の泡立ちの中へ墜ち込んで行く物體の速さの比較を観察することがとても面白くて堪らなくなつたからです。ある時などは到々獨言を言つてしまひました——「この樅の木が此度は恐ろしい勢で落ち込んで見えなくなる番だ」などと。けれど此豫想が外れて、オランダ商船の破片がそれを追ひ越して御先きに見えなくなつてしまつたのには落膽しました。で、何回もこの豫測をやつてみて悉く裏切られたのですが最後に、この事實、私の豫想のすべてが外れたと言ふ事實からして、私はふと或る考へ——私の五體を再び震はせ私の心臓を再び跳び上らせた或る考へに思ひ當つたのであります。

「かくも私を戦慄させたものは新しい恐怖ではありません。一層感動的な希望——希望の影が浮かび始めたからです。この希望は半分は記憶から、半分は現在の觀察から浮んで來たものです。私は、ロデンの沿岸で、モマケエストロウムに捲き込まれては再び海上に巻上げられた多くの漂流物をよく見かけたことを思ひ出したのです。大部分の物は酷く打砕かれ、搔き入れ一面に刺立つてゐるやうに見えました。然しまたかう言ふ事も明瞭と思ひ出したのです。——中には、何處も全く傷んでゐないものも確にあつたと言ふ事をです。この違ひは一體どうしたものかと私が考へましたが、刺立つてゐるのは完全にどん底まで吸込れた物であつて、また少しも傷んでゐないのは潮時を大分遅れて渦巻に捲き込まれた爲か、或はまた、他の理由で渦巻に吸込まれたからの落ち方が非常に緩かである爲に、まだどん底まで達しない中に、潮が變つてしまつたものであらうと思ふより外、説明がつかかねたのです。然し

いづれにしても、此等のものは早く吸ひ込まれたもの、または落ち方の速力の大なるものと同じ悲惨な運命に遭遇することなしに、再び潮が淀、海が平になる時また表面に捲き上げられることが出来るかと考へられるのでした。それから私は三つの重大な觀察をしました。第一は、一般的にその物が大きければ大きい程、下行の速力もまた大であると言ふこと。第二は圓體とそれ以外の形の同じ面積の二個の物體に就いては、圓體の方が大であると言ふこと。第三には圓體形とそれ以外の形の、同じ大きさの二個の物體に就いては、圓體形の方が吸引され方が比較的遅いと言ふこと、でありました。

「私は助かつてから、此地方の學校にゐる老人の先生とこの問題に就いて二三度話したことがありますが『圓體形』とか『圓體』と言ふ言葉はその先生から教はつたのです。その先生は、私に説明して説明そのものは忘れて仕舞ひましたが——とにかく私の觀察したことは、すべて浮漂物の形に依る自然の結果に外ならないと言ひました。さうして、また彼は、渦の中に這入つた圓體が同じ大きさの他の如何なる形状のものよりも、渦巻の吸引力に對して強く抵抗を試み、容易に吸込まれないのは、どう言ふ譯かと言ふことを説明して呉れました。

「この觀察を裏書きする一つの驚くべき状態が眼に這入りました。水壁を一周する度に、私たちは樅や、帆船や、檣などが浮んでゐる間を通り過ぎて來ましたが、ところが先刻、私が初めてこの渦巻の奇觀に眼を睜つた時、私たちと同じ位置にあつた其等の物が今では遙かに上の方に見えてゐて、いくらかも元の位置から動いてゐないやうに思はれたのです。



「其處で、私は最早躊躇しませんでした。今まで掴まつてゐた樽に緊切と自分の體を縛り付け、船屋突出部からそれを切り放して樽諸共水の中に飛び込むことに心を決めました。で、私は先づ舟近くに漂ひ流れて来た桶や樽などを指さして、手真似で兄貴の注意を惹いて見たのです。私がこれからやらうとする事をあらゆる苦心をして兄貴に理解させようと試みたのです。最後に彼もどうやら別つたらしい様子でしたが、然し、どうしたものか絶望的に頭を振つて、環付釘を放さうとはしないのです。この場合其處に行つて引張つて来るなどと言ふ事は出来ませんでした。なにしろ寸時も猶豫することを許されないからです。それで私は激しく心を痛ませながらも兄貴をその運命に任かせることにしました。さうして船尾に樽を結へつけてあつた縛索を解くと、それで自分の體を手早くその樽に縛り付け、そのままいきなり水中に飛び込みました。

「結果はそつくり目論見通りに行きました。この話を話してゐる私とその當人である以上、とにかくも『助かつた』ことはもう御判りになつたらうし、これから先きの話も聞かずと知れてゐることでありますから——早く大團圓に急ぐことに致しませう。私が舟から飛び下りてから一時間かそこら経つたと思ふ頃、舟は、遙か遙か下の方に落ちて行つて、三、四回くるくると猛烈な廻轉を續けざまにやつたかと思ふと私の最愛の兄貴をのせたまま忽ち逆落に泡立ち狂ふ奥底に吸ひ込まれて、それなり永久に消え去つてしまひました。私の掴つてゐる樽はと申しますと、先刻の位置からどん底までの距離のほぼ真中頃まで降りて行くか行かない内に忽ち渦巻の様子が變つて來ました。漏斗形の水壁の勾配が

見る見る中に緩かになつて、同時に廻轉の速力も次第次第に鈍くなつて來ました。やがては泡も無くなり虹も消え、渦巻の底が次第に押し上つて來るやうな氣がしました。空は霽れ、風も止み満月が西の方に傾きつゝ、ありました。と思ふと私はもうロホテンの海岸が一望の中に見える海上に浮き上つてゐたのです。實にこの位置にかすかのモスケエストロウムの渦巻が『在つた』のですが。その時が恰度例の滯潮の時刻であつたのです。然し濤は狂風の餘勢で、まだ山のやうに高く紆つてゐました。私はストロウムの潮流に乗せられて瞬く中に普通の漁夫達の漁場に押し流されて來ました。そこで一艘の舟が私を救つて呉れました。私はぐつたりと疲れへたばつて、怖しさの擧句——怖しさが去つたにも拘らず——舌が廻らなかつたのです。私を舟に救ひ上げて呉れた者たちは昔からの親しい毎日顔を突き合せてゐる連中でしたが、まるで幽霊の國から流れついた者のやうに、誰一人として私を見別ける者が無つたのです。私の頭は、以前は濡羽色の眞黒な髪でしたが今は御覽の通りの白髪です。彼等はみんな、私の人相がまるで變つて仕舞つたと言つてゐますよ。私は彼等にこの話をしてやりました。——けれど誰一人眞實にしません。私は今貴方にこの話を致しましたが、もとより貴方がロホテンの氣さくな漁師達さへ信じなかつたこの話を信じて呉れやうなどは夢にも思つてゐません。」



## 壇の中に見出された手記

如何なる人と雖も生きるべき一瞬の命しか残されなかつた時に於いて、敢へて己を存す物をも遺さうとはしないであらう。

キノオの「アテイス」

私は自分の國や家族に就いては殆ど語るべきことを持たない。虐遇と永い星霜とは、私を國から追放し家族から遠ざけてしまった。親譲の財産に依つて、私は普通程度の教育を受けることが出来たが、思慮深い私の性質は弱年の頃迄々として築き上げた學問の貯へに順序を立てることを可能ならしめた。その中でも獨逸の倫理學者の著作は私に最も大きな喜びを與へた、と言ふのは彼等の素晴らしい雄辯に對する私の淺はかな驚歎の故にではなく、賦性の手殿しい思考力から私には容易に彼等の虚言を見抜き得た故にである。私は屢々自分の稟性の潤なき事に就いて非難された、私の想像力の缺乏は恰も罪惡でもあるかの如くに詰責された、そして私の持説の懷疑的であつたことは常に私を有名ならしめた。まことに物理學に對する旺んな興味は、私の心を此年頃に至りて甚だ有りがちな過ちで染めしまつたらしい——と言ふのは私は總ての出來事を、斯る論及などは到底許さるべくも見えないものであつても、その半學の原則に論及したがる習慣に陥つてゐたのである。ともあれ私程、怪詭妖誕の

類に依つて、嚴肅なる眞理の境域から誘き出され難い者はなかつたであらう。私が斯く多くの前置を述べる所以は、これから物語らうとする、たあひもない假作譚などはこれに比べたら徒らな死文字に等しかつたに違ひない程の不思議な物語が、真正銘な心の經驗とは考へられずに粗雑な空想の戲言の如く思ひがちがひされることを慮れたからである。

外國に數年を過ごした後、一千八百——年私はジャバの中でも富裕な人口も多いバタヴィア島の港を出帆してサンダ群島へ向かつた。私とその船の船客となつたのは、仇敵の如くに私を追ひ立てる神の如く思ひがちがひされることを慮れたからである。

經の不休息から逃れたかつたのに他ならない。我々の乗船はボンベイで造られた四百噸許りの美しい銅を張つたマラバア・チークの船であつた。そしてラツカディヴ諸島からの棉花と油とを積み込んでゐた。また甲板には椰木皮纖維、椰子糖、乳酪油、椰子の實、及び阿片の箱少數を載せてゐた。積込み方が不器用だつたので船體はその爲に屢々ぐらついた。

我々は僅の順風に乗つて出帆して、幾日かの長い間をジャバの東海岸に沿つて進んで行つたが、航海の單調を紛らすものと言つては、僅かに我々の目ざしてゐる群島から來た船脚の軽い小船と時折出遇ふ事位であつた。

或る夕暮れ時であつた。私は船尾の欄杆に倚れてゐたのだが、ふと西北の方角に當つて、非常に際立つてぼつつりと浮かんだ雲を見出した。色なり形なりが、確にバタヴィア出港以來初めて見る雲で



あつた。私はそれを注意深く、目の沈むまで見守つてゐたが、見てゐる中にそれは東へ西へ、一つばいに延び廣がつて行つて、まるで低い陸地の長い線とも思はれる程に、霧の細長い帯をもつて水平線を圍んで了つたのである。間もなく私の注意は朱黝い月の出と、唯ならぬ海の氣配とに驚かされた。海には急速な變化が行はれてゐて、水は常よりも餘程透明に見えた。海底まで私の眼ははつきり見ることが出来たので、測鉛を引き上げてたしかめると、船は今五十尋の處にゐた。やがて大氣は堪へ難く熱して來た。あたかも灼熱された鐵からでも發するやうな螺旋狀に立ちのぼる瘴氣がこもつてゐるのであつた。夜に入ると風の吐息は悉く死んでしまつて、更に何ともたとへ難い全き靜寂がやつて來た。船尾の高甲板に灯された蠟燭の炎は微かなそよぎさへも見せず燃えてゐたし、拇指と他の指との間に懸つた長い髪の毛すら揺らぐことがなかつた。併し、船長は何等の危険の兆候も見えないと言つて、それに船はそのまゝ、陸の方に流されてゐたので、帆をたゞみ、錨を卸すやうに命令を下した。そして一人の見張りも置かれずに、殆ど馬來人ばかりの水夫等は甲板の上にごろごろ寢そべつてしまつた。私は襲ひかゝつて來る不氣味な豫感を打消すことが出来なかつたので――下へ降りて行つた。實際、私には總ての様子が、どうしても毒熱風の兆候らしく思はれてならなかつたのである。私は船長にその恐怖を訴へたのだが、船長は些の注意も拂はぬどころか、返事すらしてくれなかつた。併し不安の餘り到底眠る事の出来なかつた私は眞夜中頃起き上つて甲板へ出て行つた。後甲板階段を上り切らうとした時、私は何かがぶんぶん唸るやうな凄じい物音に驚かされた。それは恰度水車の輪

が烈しく廻轉する時に起るやうな響であつた。ところが、その物音の原因をたしかめ得るよりもまきに、私は船の中心が慄へ戦いてゐるのを發見した。次の瞬間、逆巻く白浪が危く船を覆へすばかりに襲ひかゝつて來ると、どつと縦さまに掠めて、甲板の上を船首から船尾にかけてを洗ひ去つた。この突風の極度の兇暴さは却つて船を救つた。全く水に浸つてしまつたにも拘らず、マストが船外に落ちたために、暫く海面から起き上ると、鳥渡の間暴れ狂ふ嵐の下によるめいてゐたが、遂に正しい位置になほることが出来た。如何なる奇蹟のお蔭で私が破滅を免れたのか説明することは不可能である。私は氣を失つてゐたのだが波に打たれて我に返つて見ると、自分の體が船尾材と舵との間に押し込まれてゐたことを知つた。眩暈を感じながら、非常な苦心で足を踏みしめて四邊を見廻すと、船は凄じい白浪の眞只中にあるのであつた。船を呑み込んだ山の如き泡立つた大海の渦巻は、到底如何なる想像も及び難い恐ろしいものであつた。間もなく私は年老いた瑞典人の聲を耳にした。彼は出帆の間際にこの船に乗り込んだのであつた。私がある人限りの聲で呼びかけると、彼は直ぐに踵を返しながら船尾の方へやつて來た。我々はそこで、自分達二人だけがこの災厄の生殘者であることを知つた。我々を除いて甲板の上の一切の物が洗ひ流されてしまつたのだ。船長を初め船員共は眠つてゐる間にやられたに違ひない。船室にはすべて水が奔注してゐた。何の援助もなくして我々の手で船を救ふ見込みはなかつたし、それに刻々と洗ひ



つつあると言ふ意識は我々の努力を麻痺させるに充分であつた。錨綱は勿論最初の颶風で捆索の如く切斷されてしまつたが、左もない時には船はひとたまりもなく覆へされてゐたであらう。我々は恐しい速力で海上を疾つてゐた。波は砕けずに船の上を越えて行つた。艦の骨組は無残に打ち砕かれて、その他の部分も大概ひどく傷はれてしまつたが、併し非常に嬉れしかつたことにも我々はポンプが未だ塞がれてゐないのと底荷がそのまゝであることを發見した。暴風の頂上は已に吹き過ぎてゐたので、風の危険は少なくなつたわけだが、我々のこんな覺束ない船體では、風の風いだ後に來る大浪に依つて微塵に打ち砕かれてしまふことは明かであつた。とは言へ、この極めて正しい意見は直ぐには實證されなかつた。まる五日五夜の間に——その間の我々の生活は非常な困難のもとに水夫部屋から取つて來ることの出來た椰子糖に依つて保たれた——船體は、最初の毒熱風程狂暴ではなかつたにせよ、私とその以前に出遇つた如何なる暴風にも勝る短い矢繼早やに起る疾風を受けて、測り難い速力で飛走してゐた。航路は、初めの四日間は少し變つたのみで東南微南の方角をとつてゐたので、ニューオランダ（オーストリアの事）の岸に沿つて下つてゐた筈である。五日目になると、風は更に一點だけ北に變つたのだが、俄に寒氣が烈しくなつた。太陽は鈍い病的な黄色い耀きを帯びて、水平線よりほんの僅かしか上らなかつた。雲の姿は見られなかつたが、風は次第に募つて間歇的に定りなく吹きすさんだ。どうやら正午時分と思はれる頃、我々の注意は再び太陽に奪はれた。それは恐らく光が氣極したとでも言ふのであらう、反射もなく懶く陰鬱に昏くなつた。そして眼れ上つた海に洗みなが

ら、恰も途方もない力に依つて突然かき消されたかの如く、その中心の閃光を失つた。幾尋とも測り知れぬ大洋の中へ落ち込んで行くそれは、たゞ朦朧たる銀の輪であつた。

我々は甲斐なく六日目の日の明けるのを待ち惚けた——その日は私には未だ來なかつた——また瑞典の男には永遠にやつて來なかつたのである。それ以後我々は眞黒な闇にのみ込まれて、船から二十歩先のものを見ることが出來なかつた。我々を包む永劫の夜、熱帯の海で屢々見慣れた燐光にも最早頼ることが出來なかつた。風は不滅の狂暴さを以て荒れ續けてゐたが、今まで我々に從いて來てゐるやうな普通の奇波や泡は既になくなつてゐた。我々を取り圍くすべては、恐怖と、重々しい憂鬱と、それから眞黒な氣の遠くなるやうな黒檀の沙漠とであつた。迷信的の恐怖は次第に老瑞典人の心に這ひ込んで行つた。また私自身の魂は無言の驚異に包まれた。我々は、船が最早や役に立たぬ以上、上に毀れ果ててゐることも忘れて、たゞ後橋の折れ残つた根にお互の體を固く結びつけたまゝ、悲しく海の世界を眺めるばかりであつた。我々は時を計る術もなかつたし、位置の推測すら不可能だつた。併し、我々が、どんな航海者も曾て來たことのない遠い南方にあることだけは解つてゐたので、普通にある水の障礙に出遇はぬことにおどろいた。だが、我々は絶えず破滅に脅かされてゐた——すべての山の如き巨浪が我々を顛覆させようとあせつた。それらの大濤は我々の想像し得る如何なるものよりも遙かに尨大で、我々が忽ちそれに呑み込まれてしまはないのは洵に奇蹟であつた。友は私に船荷の軽いことを語つて、この船のすぐれた出來を憶ひ出させてくれたが、併し望みそれ自身全く望



みないものであることを感ぜずにはゐられなかつた。ひたすら、何者の力を以てしても一時間と延ばすことは不可能であらうところの死を陰鬱に待ち受けるより他なかつた。黒い茫漠たる海は愈々凄愴として来た。ある時には信天翁の飛び上がるのに息を塞まらせた——またある時には、眩暈のする程の速さで水地獄へ落ち込んで行つたが、その底の空気が激み全く静まり返つて海魔の眠を妨げるものは些もなかつたのである。

我々がこの深淵の一つの底にあつた時である、突然友のけたたましい叫び聲が凄しく夜を引き裂いた。「見ろ！ 見ろ！」私の耳許で彼は喚いた、「全能の神よ！ 見ろ！ 見ろ！」彼の言ふが如く、私は一つの懶い陰気な赤い燈火の閃きが、我々の落込んでゐた宏大な裂け目の面を流れ落ちて来て、我々の甲板に氣まぐれな光を投げかけてゐるのに氣がついた。ふと眼を上げて眺めると、私の血は凍りついてしまつた。我々の眞上のソツとする程の高さのところ、恐らく四千噸もあらうかと思はれる巨大な船が、將に霧地に落ちかゝつて来やうとしてゐたではないか。それは、彼自身の高さの百倍にも超ゆる波の頂に押し上げられてゐるのであつたが、なほその姿は世にある如何なる軍艦も、また如何なる東印度貿易船も及ぶべくもなかつた。膨大な船體は煤けた黒色で、しかもありふれた彫刻などは施されてゐなかつた。砲門から一列の眞鍮の大砲が突き出て、索具にゆらめく無数の戦闘用の燈火は磨き上げられた砲身に輝り輝いてゐた。併し、我々に何よりも深い驚きと恐怖とを覺えさせたものは、その船がこの滅法な海の只中を、しかもこの逆ひ難い颯風を衝いて、總帆を張り切つて進ん

であることであつた。最初に我々はその船を見出した時には、彼女がそのさきの暗い恐るべき深淵から緩やかに上りかけたところであつたため、我々は船首だけを見ることが出来たのである。慄然たる一瞬間、彼女は眩むばかりの頂上で恰もその壯大なる船體で沈思するかのやうに立ち止つたが、さて烈しく身震ひし、よるめいたかと思ふと——落トして来た。

この咄嗟のひまに、如何なる突然の沈著が私の心を支配したのか。私は出来るだけ後方へ身をたじろがせながら、眞向から襲ひかゝつて来る破滅を、恐れることなく待つた。我々の船は遂に身悶えをやめると、頭から沈みはじめた。それで、落下した巨塊は殆ど水中に没した部分と激突したのだが、その結果として、私は抵抗し難い猛烈さをもつて、その見知らぬ船の索具の上へ投げ出されたのであつた。

その時、この船は船首を風上へ廻しかけてゐたので、そのどさくさ紛れに私は乗組員達に氣取られずに済んだ。そして私は容易に彼等の眼をぬすんで前船艙まで行きつくと、少し開かれてゐた艙口から船艙の中へ忍び込むことが出来た。どうしてそんな眞似をしなければならなかつたのかは私にも殆ど解らない。恐らく最初この船の航海者等を見た時に、私の心を囚へた漠とした畏れが、私にさうさせたものであらう。私は一瞥したときにそんな不思議な不安を與へられた人々を俄に信じ兼ねた。私はそこで、船艙の中で隠場所を見つけようと考へたのだつた。仕切板の小部分を動かすと、大きな船骨の間に甚だ適當な避難所が見出された。



私の仕事はまだ終らない中に、聲音が聞えて來たので、私は已なく其儘それを用ひなければならなかつた。一人の男が私の隠れてゐる前を、弱々しい覺束ない足どりで通り過ぎた。顔は見えなかつたが、大體の様子を見ることは出來た。甚しい老齡と羸弱の徴が現はれてゐた。彼の膝は老年の重荷のために踰躑き、全身は苦難のために戦いてゐた。彼は私には理解出來ない國語で、彼自身に破れた低い聲で囁いて、さて船艙の一隅に堆み重ねられた單純らしい器械や朽ち果てた海圖の間を手探つた。その様子には、老いほうけた氣むづかしさと嚴かな神の如き氣品とを無造作にまぢへたやうなものが見られた。彼はやがて甲板に出て行つて、それつきり歸つて來なかつた。

名づけやうのない一つの感じが私の心に行き渡つた——分析することも許されぬ感情、既得の知識ではあまりに不充分であり、また恐らくこの先も私にそれを解く鍵を與へられることはあるまいと思はれるところのものである。私自身の如き心を持ち合せた者にとつて、この後の考へは堪へ難いことであつた。私は決して——私は知つてゐる——決して、自分の概念について納得することは出來ないであらう。併しそれらの根源が全く奇怪千萬な原因から出てゐる以上、斯うした概念が漠然としてゐることは不思議ではない。一つの新しい感覺——一つの新しい現實が私の心に加へられたのである。

私がこのおそろしい船の甲板を初めて踏んでから既に永い時が経つた。そして私の運命の光は、次第にその焦點をあつめて行くやうに思はれる。不可解な人々！ 私の見抜くことの出來ない默想に包まれながら、彼等は常に私の存在を氣づかずにとほり過ぎるのであつた。いまや、身を隠すのなどはまったく無用な莫迦げたこととなつた。人々は決して私を見ようとしないのである。私が運轉士の目の前を眞面にとほりすぎたのはつい先刻のことである。私が現に記しつゝあるものを書くのに必要な品は、此頃勇を鼓して船長の私室から持つて來たものである。私はこの日記を絶やすことなくときどき書記して行くつもりだ。これを世に傳へる機會は眞實得られないまでも、それをこゝろみることだけは失敗しないであらう。最後の時が來たならば、私はこの手記を壘に封じ込んで海中へ投ずるのだ。

思ひがけない出來事が私に熟考の餘地を與へた。そんなことが圖り得べからざる機會を生むのであらうか？ 私は誰にも見咎められずに甲板に出て、小短艇の底に堆まれた段索や古い帆布の中に身をよこたへてゐた。そして不思議な自分の運命についてかんがへ沈みながら、私は知らず知らずタール刷毛で、傍の樽の上にきちんとたたんで置かれてあつた副横帆の縁を汚してしまつた。その帆は今船の上に張られてゐる。そしてなにも心なく觸れた筆の痕は「發見」と言ふ言葉になつて廣がつてゐた。

私は最近、この船の構造について多くの觀察をとげた。よく武装はされてゐるが、思ふにこれは軍



艦ではないらしい。索具の造りなり、全體の構築なりに依つて軍艦でないと言ふことは容易に認め得たが、さてそれでは何であるかと言ふのに、恐らくそれは私にも測り難い。併し、その不思議な船體の型、奇妙な形の圓材、覆ひかぶさつてゐる巨大な帆布、單純な船首、古びた船尾、それらのすべてに、私の心をかすめて何故とも知らない懐しい感情が閃めく、それは常にぼんやりとした思出の影と説明し難い古い異國の年代記と適かなる昔の記憶とをまちへてゐた。

私は船骨を眺めてゐた。船は私の見も知らぬ材料で造られてあつた。その木は船材としては甚だ不適當な特殊な質のものであるのに私はおどろかされた。と言ふのは、非常に孔だらけなもので、それはたゞ歲月に伴ふ腐蝕ばかりではなく、航海中に蟲に喰はれたものと考へられるのだつた。多少穿鑿好き過ぎるかも知れないが、若し西班牙樫か何か不自然な作用に依つて膨張されるものとしたならば、これは正しくスペイン樫のすべての特長を具へてゐた。

上の一節を記してゐる中に、老練な和蘭の老航海者の奇妙な格言が思ひ出された。彼の誠實に誰か疑はさむ者がある時に、彼は口癖のやうにかう言つた。「眞實たとも。船の體が、まるで生きた水夫の體のやうに大きく膨れて行く海のあることが眞實のやうに。」

一時間許り前に、私は大膽にも乗組員の群れの間に自分の身を割りこませた。彼等は私に少しも注意を拂はぬばかりではなく、私が彼等の眞中に立つてゐるのにも拘らず、彼等は全然私の出現に氣づかないかのやうに見えた。彼等は盡く、初め私が船艙で見かけた一人のやうに、白髮の老人達であつた。彼等の膝はよわくしく慄へ、肩は老いくちて二重にまがり、皺だらけの皮膚は風にカサカサと鳴り、聲は噎れて低く震へ、眼には老い呆けた泪がかゞやき、そして灰色の髪は嵐の中になびいてゐた。彼等の周圍には、甲板の到るところに、異形な古めかしい構造の數理學の器械がとりちらされてあつた。

少し前に私は副横帆の結びつけられたことを述べて置いた。船はその時から風を眞後から受けるやうになつて、檣冠から副横帆の下桁にいたるまで、總帆を張りつくして、まつしぐらに南に向つてその恐るべき航行をつゞけてゐた。そして中檣帆の桁端をば絶えず、人間の心が想像し得るかぎりの最も凄じい波の地獄の中にもるばしてゐるのであつた。私は急いで甲板を降りた、船員たちは少しも不便を感じないらしかつたが、私にはとても立つてゐることが出来なかつたのである。波のためにこの彪大な船體がひとたまりもなく呑み込まれずにゐることが、まことに私には奇蹟中の奇蹟とも思はれた。我々は正しく深淵の中に最後の突入をすることもなく、常に永劫の際邊をさまよひつづけるべく運命づけられたのであらう。我々は、私が曾て見た如何なる波よりも千倍も巨大な波濤から、矢の如く飛ぶ鷗よりも輕々しくすべり落ちたかと思ふと、水は深海の惡魔の如く、破壊を禁じ



られて軍に脅すことのみにとどまる悪魔の如くに、その頭を我々の上に擡げかゝるのであつた。私は、幾度となく繰り返される危難脱出を、實にさうした結果を齎し得る自然の法則に歸因するやうになつた。この船が或る強い潮流か、若しくは猛烈な海底の逆流の作用を受けてゐるものと思ふの他なかつた。

私は船長を、その船室で、まともに見た——併し果して彼は私に何の注意も拂はなかつた。ふと見た目にも、彼が人間以上の何者にも映りはしなかつたが、彼の様子には不思議な感情をまぢへて、包みきれぬ威厳と畏れとが漂つてゐた。背丈は略私と似て、約五呎八吋位である。そしてよくひきしまつた均勢のとれた體格をしてゐたが、逞しいと言ふ程でもなくまた他に著しく目立つたところもなかつた。併し彼の面に漲つてゐる表情は異様なものであつた——それは烈しい、不思議な、疎然たる老年の徴で、そして私の心の中にある説明し難い感情を惹き起すのに充分なものがあつた。彼の額には皺こそ少なかつたが、恐るべき永い星霜の姿が刻まれてゐた。その灰色の頭髮は過去の記録であり、更に灰色の眼は未來を占ふ巫女であつた。船室の床には、奇體な鐵釘でとめた一折判の本や、微だらけの科學器具や、廢れた長い間忘れられてゐた海圖などが散らばつてゐた。彼は兩手の上に頭を屈めて、一枚の紙を落着かない燃えるやうな眼ざしで噴めてゐた。それは見たところ委任狀らしく、兎に角、君主の署名がしてあつた。彼は——恰度私が最初船艙で見かけた船員のやうに——彼自身に

向つて、低く何か不平らしい語調で異國の言葉を呟いてゐたが、その聲は一哩もの遠方から私の耳に響いて來るやうに思はれた。

船及び船中のすべての物が、古い昔の氣分で仕立てられてあつた。船員たちは幾世紀もの昔の幽靈の如くにあちらこちらと跳び歩いてゐた。彼等の眼には熱心なしかも穩かならぬ氣配が溢れてゐた。そして戰燈用の燈火のきらきらした耀きの中に私の行途を遮つて彼等の姿が落ちるの見る時、私は、一生を骨董商として過して、バルベックやタドモアやベヌセポリスの朽ちかゝつた圓柱の影ならば幾度も見なれてゐたにも拘らず、曾て感じたこともない、今は魂それ自身が廢墟になつてしまつたかの如き感じに打たれるのであつた。

私は四邊を見廻した時、以前の私の不安を恥しく思つた。

私が若しこれまで我々につき纏つて來た迅風に慄へるくらゐでは、小旋風とか毒熱風などの言葉はまつたく取るにも足らない無効なものであることを理解するであらうところの、大洋と風との戦にはおそろしさのあまり到底堪へ切れなかつたのではあるまいか？ 船を取りまく一切の外景は、永劫の夜の暗黒と、泡のない茫漠たる水であつた。しかし、船の兩側約一リーグの邊には、ぼんやりと此處彼處に宏大なる氷の城壁が、物寂しい中空に屹り立つてゐるのが見られた、恰も宇宙を覆ふ壁のや



うに。

私の想像通りに船は果して潮流の中にあつたのだ——若しもさうした名が、白氷に咆哮し叫び狂ひ、恰も瀑の中へ眞逆様に突進するやうな激しさで南方に轟き渡つてゐる潮に與へられるのに適當なものであるとしたなら。

私の心の恐怖を言ひ表はすことは全く不可能だと言ふに憚らない。だが、この恐るべき天地の秘密に向けられた私の好奇心は、絶望さへ超越してゐた。そしてまたそれはこの最も戦慄すべき死の相をさへ服従せしめた。我々が非常に心をそゝりたてる或る知得——その到達は死滅であるところの或る知り得べからざる秘密——へ向つて急ぎつつあることは明白である。多分この潮流は我々を南極そのものに導いてゐるのであらう。この甚だ狂氣じみた想像はたしかに當つてゐるのだ。

乗組員たちは甲板を落着かぬ慄へる足どりで歩いてゐる。併し彼等の面には絶望に對する冷淡よりも、更に希望の激しい感動の色が漲り渡つてゐた。

この間に風はなほ船尾の高甲板を襲ひつゝあつた。そして船は無数の帆を張りきつてゐたために、幾度となくそつくり海から引き上げられるではないか！ おお、恐怖は恐怖に重さなる！——氷が突然、右と左とに開かれれば、我々は眩しく廻轉し初める、無数の同心圓の中に、ぐるぐると巨大な壁の頂は適な暗の中に消えてゐる圓戯場の縁をめぐつて。だが、最早や私の運命について思案してゐる暇はなくなつた！ 圓は急速に小さくなつて来た——我々は物狂ほしく渦巻の力の中へ落ち込んで行く——そして大洋と暴風の叫喚と咆哮と轟きの中に船は戦いてゐる——おお神よ！——そして——まつしぐらに！

附記——「墮の中に見出された手記」は一千八百三十一年初めて發表されたのだが、これは私がマアケイタアの地圖に親しんでから間もない時分で、それには大洋は四つの口に依つて、(北)極灣に突進して、地殻の中へ吸収されてしまふやうに記されてあつて、また極そのものは恐しく高く聳え立つた黒い岩として出てゐた。

——終——



## 長方形の箱

数年前のこと、私は南カリフォルニア州のチャールストンからニューヨーク市へ向けてヘアデイ船長の上等な郵船「インデペンデンス號」に乗船を申し込みました。船はお天気さへよければ、當月（六月）の十五日に出帆する筈だったので、私は十四日に自分の船室を鳥渡ばかり整理しておかうと思つて船へ出かけて行きました。

私は我々の船が、何時になく大勢の婦人客を混へて、可也澤山のお客を載せることを知りました。名簿の中には私の知己も幾人かいましたが、それらの間に、私の殊の外懇にしてゐる若き藝術家コルネリウス・ワイヤット氏の名を見出して、私は喜びました。私のC——大學時代の親友なのです。彼は優れた才能を興へられてゐましたが、また嫌人症と感受性と熱狂とを併せ持つてゐました。それに最も思ひやりの深い信實な心を胸の底に藏つてゐました。

私は彼の名札が三つの客室の上に貼られてゐるのを見たので、再び船客名簿についてしらべると、それは彼自身と妻と二人の妹のために取つたものであることがわかりました。客室はゆつたりとしてゐたし、上下に重さなつた寢床があります。寢床は確かに一人しか寝られぬ幅のものでしたが、それにしても何だつて四人の人間に對して、三つも客室を取らなければならなかつたのかと、

私は合點がゆきませんでした。私は恰度この頃、どんぞ些細なことでも極端に氣に懸つてならないやうな氣むづかしい心持になつてゐた時なので、實を言へば恥しいことにも、私はそこでこの多すぎる客室について、様々と不躑躅な臆測に耽りました。勿論餘計なことには違ひないのですが、それでも私は執拗くこの謎を解かうと努力しました。つひに私は一つの結論に到着すると、何故もつと早くその事に氣がつかなかつたものかと我ながら呆れた程でした。「召使だよ、當り前さ。」と私は言ひました。「こんなことが解らないなんて、馬鹿だなあ。」そこで私は再び名簿を繰つて見たのです——が一行の中に召使は正に一人もあません、尤も、本當は連れてくる筈だつたと見えて、「及び召使。」と言ふ字が一度書かれてまた消してありました。「さうだ、屹度特別な手荷物があるのに違ひない。」と私は改めて自分に言ひ聞かせたのです。「何か特に船艙に置き度くないものだ——何か自分の目の届くところに置き度いもの——ああ、成る程——繪だらう——伊太利猶太人のニコライノから手に入れた、あれだ。」この思ひ付きは私を満足させてくれたので、私はひと先づ好奇心を追ひ拂ひました。

ワイヤットの二人の妹ならば、私も非常によく知つてゐるのですが、大さう優しい賢い娘たちでした。彼の妻と言ふのは新しく迎へたばかりで、私は未だ一度も會つたことがなかつたのです。併し彼は私の前で幾度となく彼女の事を例の熱心な様子で話してくれました。彼は彼女を比ひなく美しく利口な申し分のない女だと言つて聞かせました。それで、私は早く彼女と知己になれることをねがつ



てみました。

私が船を訪れたその日(十四日)にワイヤットの一行も矢張り其處へ来る筈になつてゐたので——私は、是非花嫁にお目にかゝりたいものだ、豫定よりも一時間も永く待つてゐたのですが、やがてそこへお断りを言つて來ました。「W 夫人は少し加減が悪いので、船に乗るのは明日の出帆の時まで延ばすこととなりました。」

翌朝になつて、私はホテルから波止場へ出かけて行つたのですが、さてハアデイ船長に會ふと、船長は言ひました。「色々な事情で」(莫迦げてはゐるけれども重寶な文句です)「どうも『インデペンデンス號』は一日二日出帆出來ない模様です。すつかり用意が出來ましたら使を上げてお知らせしませう。」これは奇妙なことだと私は考へました。何故、言つて安定した南の微風があつたし、「色々な事情」も現はれさうもなかつたのです。私は根氣よくせがんで見たのですが、併し矢張り諦めて歸つて來るより他に途がありませんでした。

殆ど一週間も待ちぼうけてから、漸く船長の知らせが來たので、私は早速船へ乗り込みました。船は乗客で溢れ、またすべつ出帆の用意のために混雜してゐました。ワイヤットの一行は私自身よりも十分後れて到着しました。二人の妹と花嫁と——畫家はいつもの厭人症の發作に襲はれてゐるやうでした。併し、彼は私に自分の妻を引きあはせることすらしてくれなかつた程だつたので——そこでコを得ず彼の愛らしい伶俐な妹のマリアンが、いそいで言葉少なく我々を近づきにくれたわけ

でした。

ワイヤット夫人はすつかりグェイルを下げてゐたのですが、私のお辭儀に答へてそれを裏げた時には、私は正直のところびつくりしてしまひました。併し、前に友の畫家から、その女の美しさについて幾度も幾度も聞かされる度毎にそれを闇雲には信じ難く思ふ習慣をつけてゐなかつたなら、私は屹度もつと驚いたことに違ひありません。

まことに私はワイヤット夫人を極くつまらない容貌の女としか考へることが出來なかつたのです。縦ひひどく見つともないとまでは行かなくても、何れにしる餘りそれと隔りが無いのです。彼女は併しすぐれた趣味の装ひをしてゐました——そこで私は思ひ返しました。これは屹度彼女の智力や氣質の優美さが友の心を囚へたものであらうと。彼女は殆ど口數をきかずに、直ぐに W 氏と共に自分の客室へ這入つてしまひました。

私の持前の穿鑿好きがまた頭をもち上げたものです。召使はゐない——これは已に解つてゐることです。そこで、私は特別な手荷物を探しました。遅ればせに、長方形の松の木造りの箱を載せて二輪荷馬車が波止場に着きました。それが特別な手荷物に他ならないわけです。その積込みが終ると、船は直に帆を上げて海へ出ました。

問題の箱は、左様、長方形でした。長さが約六呎、幅が約二呎半——私は精密と言へる程、氣をつけて觀察しました。さてこの形は甚だ特異なものであつたので、一見して私は自分の臆測の正し



かつたことを信じました。私はすでに述べた如くに、友の特別な手荷物がおそらく幾枚かの、若しくは一枚の、繪であらうと結論したのでしたが、それと言ふのは私が彼が数週間に亙つてニコリイノと取りひきしてゐたのを知つてゐたからです——そしてさて此處にある箱は、其形から言つて、レオナルドの「最後の晩餐」の模寫とそれから同じ「最後の晩餐」の小ルビニの模寫とを入れるのに何よりも應はしかつたのです。この點は、そこで、充分に私を落着かせました。私は自分の聰明さを考へて、上機嫌にクスクス笑ひました。

こんなことについて彼が私に隠し立てをした事は蓋し初めてでしたが、併し彼は明かに私を出し抜いて、私の鼻の下でこつそり、素晴らしい繪を紐育へ密輸入しようとして企て、あるのです。私は、おつけ彼を擲擲つてやらうと思ひました。

ところが、私ははたと當惑しました。その箱は餘分の客室へは運び込まれなかつたのです。それはワイヤットの自分の部屋に入れられて、しかも殆ど床の全部を占めたまゝ置かれてありました——畫家と妻とが一方ならぬ不自由を感じるの言ふまでもないことです——そしてなほその表面に大きくのさばつた字がペンキかタールかで書かれてあるのですが、それはしつこい不愉快な、私の氣のせゐか、ひどく厭らしい臭ひを放つてゐたのです。蓋の上に斯う書いてあります——「紐育アルバニイ街アデレイド・カーティス夫人行——コルネリウス・ワイヤット出。此面を上方に向けるべし、取扱注意。」

さて私は、アルバニイのアデレイド・カーティス夫人が畫家の夫人の母親であることを知つてゐたのですが——私は不思議な氣持になつてその宛名全體を眺めました。私は、そしてその箱並びに内容が、紐育チェムバー街にある我厭世畫家の畫室よりも北へ運ばれることはない、こゝろにきめました。

最初の三四日は良い天氣で、風が北に變ると、我々は忽ち陸を見失ひました。船客は至つて、上機嫌でお互に睦しく話し合ひたがりました。併し、ワイヤットと妹たちは例外で、もう一人の人について私は私はい無作法に考へたのですが——まことに頑なに振舞ひました。私にとつて、ワイヤットの態度はあまりに氣になりません。彼はいつもの場合よりもまた一層陰鬱でしたが——事實彼は氣むづかしかつたのです——併し、私は彼の奇矯に對しては既になれてゐたのです。けれども、その妹たちに至つては、私は何とも合點が行かなかつたわけです。彼女達は殆ど船室の中に閉ぢこもつたきりで、私が重ね重ね甲板へ出て誰かと話でもするやうに勧めるのも、ひたすら拒みました。

ワイヤット夫人自身はもう少し愉快でした。言ひ更へれば彼女はおしやべりなのですが、おしやべりは海に於いても決してふさはしいものではありません。彼女は大抵の婦人達と非常に親しくなりましたが、併し私の驚いたことには、彼女の様子には男に對する魅力などは少しも見られなかつたのです。彼女は我々を甚だ面白がらせてくれました。左様、「面白がらせた」と言ふより他なささうです。つまり、W夫人は笑ふことよりも、笑はれることの方がづつと多かつたのです。紳士達はあ



まり言ひませんでした。婦人連は忽ち、「お人好しで、あまり器量のよくない、無教育な、野卑なもの」と呼び合ひました。何だつてまたワイヤットはそんな配偶を背負ひ込まなければならなかつたのか、大きな不思議でした。富は一般にその理由になります——併し、これはこの際理由にはならぬと言ふのは、ワイヤットが會つて、彼女は、持參金などは一弗も持つて來なかつた、と私に語つた事があるのです。「私は愛のために結婚したのだ」と彼は言ひました。「ひたすら愛のためだ。然も花嫁は私の愛よりも適かにまさるものだ。」私は友のこの言葉を思ひ合せて、愈々迷はざるを得ませんでした。彼が氣が變になるなぞと言ふことがあり得るでせうか？ 他に如何考へやうがありません。彼はそれ程洗練され識見が高く、氣むづかしい男で、缺點に對してもそれ程精密な感覺を持ち、また美に對してそれ程鋭い觀察力を持つてゐたのでしたから！ 確にこの婦人は彼を好いてゐるやうに見えました——特に彼が居合せない場合には——彼女が幾度となく繰返して口にする「愛する夫、ワイヤット氏」といふ言葉はまことに笑止なものでした。ところが、やがて、彼が彼女を著しく避けてゐるらしいことが知れ渡りました。彼は大部分船室の中にとつたひとり垂れこめてゐて、如何にも妻を彼女の勝手放題に任かせてあるやうな風に見えました。

私は自分の見聞きした點から考へて、畫家は何か途法もない運命の氣紛れに依るか、或は熱狂的な取りとめもない熱情の發作にあるかして、何の値打もない女を妻に迎へてしまつた、その當然な結果として、全く堪へ難い嫌厭に陥つてゐるものと思ひ込みました。私は心の底から彼を哀れに思つたの

ですが——併し尙彼の「最後の晚餐」に關する隔意は矢張り許す氣にはなれません。これに對して私は必ず仇を打つてやらうと決心してゐたのです。

或日彼が甲板に出て來たので、私はこれまでのやうに彼と腕をくんで、あちらこちら歩きまはりました。彼の憂愁は、併し、(無理もないと私は思つたのですが) 全く少しも晴れません。彼は不機嫌にしかも強ひて僅ばかり喋りました。私が力めて一つ二つ言つた冗談に對しては、彼は大儀さうに微笑しようとしませんでした。可哀な奴め！——私は彼の妻の事を考へて、彼がそれでも愉快らしく伴はうとする氣持さへ訝しく思つたのです。私は到頭急所を突いてみました。私はそれとなく、例の長方形の箱について探りを入れ始めたのです——私が彼の小ひさな楽しい隠し事に依つて撈られはしないことを縋に仄めかしながら、私は先づ先手を打つて置いて觀察しようと思つたのです。私は「あの箱の特異な形」のことを言ひかけて、したり顔に微笑しながら目くばせをすると、人差指で、彼の胸のあたりを軽くつきました。

私のこの悪意のない串戯に對してワイヤットのしめした態度は、俄然彼が狂氣してゐたことを私に信じさせました。最初彼は私の言つた洒落がよく呑み込めないらしく眼を瞞つて私を噴めてゐたのですが、段々それが解つて來るに従つて彼の眼玉は殆ど飛び出さんばかりになつたものです。彼の顔は眞赤になつて——それから恐しく蒼白になつて——そして、恰も私の仄かしたことがひどく可笑しかつたかの如くに、途方もない聲で笑ひ出すと、おどろいたことに、いよいよはげしく、十分もそれ以



上もの長い間哄笑を續けたではありませんか。そして擧句の果が、甲板の上にとつさり打ち伏してしまつたものです。私が駆け寄つて彼を抱き起した時には、彼の顔は全く死人のやうでした。私は助けを呼んで、骨を折つて、彼を氣づかせました。彼は我に復りながら、しばらくわけの判らないことを喋つておりました。翌朝になると彼は體だけは全く回復したやうでした。勿論精神について言ふのではありません。私は船長の忠告に従つて、それから以後その航海中は一切彼と會ふことを避けておりました。船長は私と同じやうに彼の發狂を認めてゐたのですが、この事は船中の何人にも言はぬやうにと私に注意しました。

ワイヤットのこの發作についで、私の性來の好奇心を唆るやうな種々な事件が起りました。その一つは、こんな事でした。私は強い緑茶を飲んだために、眠れなくて夜中苛々してゐたのです——事實、私は二晩も碌々眠らないことがありました。さて、私の客室は、單身の船客に普通なやうに、中部船室、或は食堂へ通じておりました。ワイヤットの三つの部屋は、後部船室にあるのですが、其處と中部との仕切りは、ちよつとした引き戸があるだけで、それは夜でも鍵がかゝらないのです。殆ど始終、かなりの軟風が吹いて船が著しく風下へ傾いでゐたので、その引き戸は半ば開きかゝつてゐたのですが、誰もわざわざ起きて行つて閉める者はなかつたのです。ところが、私の寢臺の位置からは、部屋の扉が問題の扉と等しく開いた時には、（しかも私のところの扉は熱度の加減で絶えず開いてゐるのでしたが）後部船室が手にとるやうに見えるばかりではなく、また恰度其處がワイヤッ

ト氏の客室に當つてゐたのです。で、二晩（續けてではないが）起きてゐる間に、共に十一時頃でしたが、W夫人がこつそりとW氏の客室から出て來て餘分の室へ入つて行くのを判然と認めました。彼女は其處に夜明けまでゐて、夫に呼ばれた時に再び戻つて行くのでした。彼等が事實上別居してゐることは明かでした。つまり餘分な部屋の謎はこゝにあつたのです。

更にもう一つ私の興味を惹いたことがありました。それは、私が眼をさましてゐた問題の二晩の間、ワイヤット夫人が別室へ姿を消すと間もなく、私は彼女の夫の部屋から洩れて來る或る奇妙な、用心深い、靜かな物音に氣がついたのです。氣をつけてしばらく耳を澄ました末に漸くその音の意味が讀めました。圖らずもそれは、畫家が例の長方形の箱を鑿と木槌とを持つて開ける音だつたのです。

木槌は明かに何か軟い毛か綿の類で頭を包んで音を殺してあるやうでした。こんな風にして、私は彼がそつと蓋を開けるのを、詳しく聽き別けることが出来るやうに思ひました。そしてまた、彼がそつくりそれを取り外して部屋の中の下段の寢床へ載せるのもわかりました。それは、たとへば、寢床の木の端へ蓋がぶつかつたらしく微かにコツンと鳴る音に依つてもわかりました。それに床の上にはそれを置く餘地がないのです。その後、森と靜まつて、最早や夜明け近くまでは何も聞えて來ませんでした。ただひよつとして、若しも私自身の妄想から生まれたものでないとしたなら——低いすゝり泣き、或は殆ど聽きとりがたく壓しつぶされた泣き聲のやうなものが聞えたやうな氣がしました。啜り泣きか吐息に似てゐるのですが——併し勿論どつちでもあり得る



道理がありません。私ばむしろ自分の耳鳴りだつたと思ひます。ワイヤット氏は疑もなく、例によつて、彼の十八番を初めて——その藝術的熱狂の發作に耽つてゐたものに違ひありません。彼は箱の中なる繪畫の實に自分の眼を樂しませるべく、その蓋を開いたのです。そこには併し、何一つとして彼をすゝり泣きさせるやうな物は入つてゐなかつた筈です。それで、私はそれが單に、ハアデイ船長の心盡しの綠茶にそゝのかされ私の氣まぐれな幻聽に過ぎなかつたことを重さねて言ひたいのです。明け方間に及んで、その二晩とも、ワイヤット氏が長方形の箱の蓋をして、再び音を消した木槌に依つて釘を元通り打ち込むのを、私ははつきり聞きとりました。これが濟むと、彼は正装した姿で部屋から出て来て、別室の夫人を呼びに行くのでした。

海上に七日の日數が過ぎて、船はさてハッテラス岬を過ぎたばかりでしたが、その時恐しい疾風が南方から襲つて來たのです。併し、前々から天候の險惡を豫想することが出來たので、船は多少その準備がととのつてゐました。上から下まですつかりきちんとしてゐたので風が烈しくなると遂に、二重に縮帆された後檣縦帆と前檣中檣帆とを用ひることにしました。

この艤装で、船は四十八時間安全に——申し分ない上等な船であることを證明しながら、殆ど浪をかぶることもなく進んで行きました。ところがそれが過ぎると疾風は颶風に變つて、我々の後檣縦帆は細紐の如くに引き裂け、次から次へ續けざまに凄まじい大浪をかぶりました。これに依つて我々は三人の男を浚はれ、また厨房とすべての左舷の檣樁を失ひました。そしてあなやと思ふ間もなく前檣中檣帆を滅茶々に裂かれてしまつたので、我々は荒天支索帆を上げたのですが、それでやうやく持ち返へして、船は前よりは一層しつかりとして進みました。

併し、疾風は尙ふきつるばかりで却々やみさうな模様も見えなかつたのです。索具は外れてひどく張り切つてゐることを發見されました。そして暴風の第三日目の午後五時頃に至つて、我々の後檣はおそろしく風上に傾きながら甲板の外へ落ちました。そのため船が凄じく横揺れするので、一時間以上もかゝつてそれを直さうと甲斐なく努力したのですが、それが果されぬうちに、船匠が來て船艙の四呎も水の入つたことを告げました。この窮境に加へて、更に我々はポンプが殆ど役に立たない程塞がつてゐるのを發見したので、今や全く狼狽し絶望したのですが——たつた一つ残つてゐる試みと言ふのは、船荷を海へ投げ棄てることと、残つた二本の檣を切ることに依つて船體を軽くすることでした。我々は到頭これを爲し遂げました——併し、それでポンプをどうすることも出來なかつたので、その暇に水はどんどん浸入して來たのです。

日暮れ方に及んで、疾風は心持烈しさを減じて、海もそれに従つて靜まつて行くやうだつたので、我々はなほボートに乗つて助かることに薄い望みをかけてゐました。八時頃になると、雪が風に飛んで、我々はそのお蔭で満月を見ることが出來ました——この吉運のかけらは我々の挫けた心を不思議にはげましてくれたものです。

信じ難い程の努力の後に、遂に我々は大型ボートを無事に舳側へ出すことに成功しました。そして



それへ乗組員の全部と船客の大部分とが群がり乗りました。この一團は直ぐに本船を放れましたが、非常な艱難の末、難船後三日目にオクラコオクの浦へ無事に着くことが出来たのでした。

十四人の乗客及び船長が、船尾の小形短艇と運命を共にする覚悟で船に残りました。我々はそれを容易く下ろすことが出来ましたが、併し水面に觸れる時にそれが顛覆しなかつたのは全く奇蹟と言ふ他ありません。これへ乗つた人々は、船長夫妻と、ワイヤット氏の一行と、メキシコの官吏夫妻とその四人の子供たちと、それに私及び一人の黒奴の従僕とでした。

勿論我々は絶對的に必要な道具類と、いくらかの食料品と、身につけた衣服の外には、何一つ持ち込む餘地もありませんでした。誰だつてそれ以外の如何なる物も助けようなどとは考へなかつたのです。ところが本船を幾分か離れた頃、ワイヤット氏は船尾座に立ち上ると、船長に向つて冷然と、自分の長方形の箱を取つて來るために、もう一度ボートを戻してくれと要求したものです。

「お坐んなさい、ワイヤット氏！」船長は遙に嚴しく答へました。「ちつとして温なしく坐つてゐて下さらぬと我々は皆引續返へされてしまひます。上舷が危く水に入りかけてあるではありませんか。」

「箱だ！」とワイヤット氏は矢張り立つたまゝ喚き立てるのです。「箱だと言ふのに！ ハアデイ船長、君はまさか嫌だと言ひやしまいね。大した重さではない——ほんの些細なものだ。君の生みのお母さんの名に依つて——上帝の愛に依つて——救の望みに依つて、後生だから箱のところへ戻してくれ！」

船長は鳥渡の間、畫家の熱心な哀訴に心を動かされたものゝやうでしたが、併し再び嚴肅な態度に復つて、言ひ切りました。

「ワイヤット氏、あなたは狂氣して居られる。私はあなたの言ふことを聞くわけにはいかん。お坐んなさい、さもなければボートは顛覆してしまひます。待ちたまへ——彼を止めて——彼をつかまへて下さい！」——彼は飛び込むつもりで——「到頭、やつてしまつた！」

船長の言つたとほり、ワイヤット氏は本當にボートから身を躍らせました。そして、難破船の風下にゐたのにも拘らず、殆ど超人的な努力に依つて、船首錨鎖から下つてゐる綱へ縋りついたのです。それから直ぐに甲板に飛び上ると、物狂ほしい勢で船室へ駆け下りて行きました。

その間に、我々は本船の艦の方へ流されてしまつて、漕ぎ戻さうとこゝろみたのですが、我々の小さなボートは暴風の息吹の中の羽毛にも等しかつたのです。我々は不幸な畫家を見捨てなければなりません。

本船と我々のボートとの距りが急速に大きくなつた時に、漸くその狂人（さうとしか考へやうがなかつたのです）の姿があつた。長方形の箱をそつくり引きずりながら、甲板昇降口に現はれるのが見へました。我々が驚きの眼を瞠つて眺めてゐる中に、彼は素早く三寸綱を以て箱を自分の體へぐるぐる巻に縛りつけました。それからさて、箱諸共海へとび込んだのですが——急に、そのまゝ永遠に消えてしまひました。



我々は、しばらく權を息めて、愁はしくその一點を噴めてみました。やがて、我々は漕ぎ去りました。一時間も沈黙が續きました。到頭、私は思ひ切つて言ひました。

「ねえ、船長、どうしてあんなに急に沈んでしまったのでせう？ 甚く訝しいぢやありませんか？ 實のところ僕は、彼があ箱に體を結びつけたのを見て、ひよつとしたら助かるかな、とさへ思つたのですかね。」

「沈むのが當然です。」と船長は答へました。「彈丸のやうに沈むわけです。併し、直ぐにまた浮かんで来るでせう——鹽が溶けさへすればね。」

「鹽！」と私は叫んだ。「レッ！」と、船長は死んだ男の妻と妹とを指して言ひました。「こんな話は、もつと他の適當な時にするものです。」

我々はそれでも運命の味方を得て、遭難の四日の後に命辛々ローノーク島へ着くことが出来ました。我々はそこで一週間を過してから、遂に紐育へ向ふ便船を得ました。「インデペンダンス」沈没後一月程経つて、私はプロオド・ウェイでゆくりなくもヘアデイ船長と出會ひました。我々の會話は自然、遭難當時のこと、とりわけ哀れなワイヤットの悲しい運命の上落ちて行きました。そこで、私は初めて、次のやうなおどろくべき事實を知りました。

畫家は彼自身と妻と二人の妹と召使とのために船室をとつたのでした。彼の妻は、實際、彼の言つた通り最も愛らしい最もすぐれた婦人だつたのです。六月十四日（即ち私が船を訪れた日のことです）の朝、突然彼女は病氣になつて死んでしまひました。若い夫は悲しみのために氣も狂はぬばかりでしたが——紐育行の航海は如何しても延ばせない事情にあつたのです。彼はいとしい妻の亡體をその母親のもとへ届けなければならなかつたのですが、併し世間一般の僻見は、彼が大びらにさうする事をもとより許してくれるわけもなかつたのです。船客の九割は、死骸と共に乗船することを拒んでるに違ひありません。

この板挟みにあつて、ヘアデイ船長は先づその屍體に香料を塗つてから澤山の鹽と共に適當な大きさの箱につめて、そして一個の商品の如くに裝つて船へ持ち込むやうに計つたのでした。妻も死んだことは何も言つてないし、またワイヤット氏が妻の乗船を契約してあることは既に知れ渡つてゐたし、それでその航海中誰か身代りの者が必要になつたのです。亡つた夫人の婢がそれには最も適當でした。餘分の客室はもともとの娘のために用意されたものですが、そこでこの偽の花嫁は毎晩別に寝ることにしたのでした。そして晝間はせい一つばい彼女の女主人の役をつとめました——船客の中に夫人の姿を知つてゐる者がないことは氣をつけて確かめられてあつたのです。

私の誤りは畢竟するに、あまりに不注意な、あまりに空鬱好きな、またあまりに輕はずみな氣質のお蔭に他ならないのです。併し、私はこの頃の夜、熟睡の出來たためしは滅多にありません。絶えず



私につき纏ふ顔があるのです。そして、ヒステリカルな笑ひ聲がいつまでも私の耳の底で鳴つてゐるのです。

— 終 —

## 早過ぎた埋葬

興味津々として人に迫るけれど、さて普通の物語とするには餘りに凄すぎると言ふやうな材料が幾らもある。したがつて世の常の物語作者は、怖毛を顫はせたり胸をむかつかせたりしたくない限り、かう言ふ材料は避けなくてはならない。然し此等の材料が事實としての嚴肅さと權威とを以て是認され支持される時、初めて物語として正當に織り出されるのである。例へば、ベルゼナア河の殺戮、リスポンの大地震、ロンドンの悪疫、セントバアソロミュウの虐殺、カルカタの地獄窟に於ける囚人百二十三名の窒息死等々に就いての記事を讀むならば、何人も押へ切れない強烈な快苦感に戰慄するのである。然し、此等の記事、それも特に魂を顫はすやうな所はことごとく事實、真正正銘の現實の姿、歴史そのものである。これが唯の作話であつたなら私達は單に嫌惡の情のみを感じて面を背むけるであらう。

私は歴史上の比較的著名な大規模の慘禍を此處に擧げて見たのであるが、此等の記事が人の感情にかくも活々と印象されるのは、慘禍そのものの特質に因るのは勿論の事として、更にその廣汎性にも基くのである。それで私が今長い、不氣味な人間の慘苦の型録の中から、是等の大規模の廣汎的な災禍には屈してゐない而もそれよりは一層根深い苦痛に満ちてゐる個人的な不幸の例を記述するのを選



んだ譯は讀者も御分りであらう。眞個の慘さ、全く、どうにもならない最後の恐怖——それは個別的なものであつて、廣い範圍に行き渡つてゐるものではない。最も凄惨な苦痛はいつも單獨の人間に依つてのみ味はれる。決して集團的ではない。——その點、我々は惠深き神に感謝しようではないか、生きながら葬られる——此事こそ、これまで人間の運命の上に落ちて來た極端な不幸の中で、特に疑ひもなく最も怖ろしいものである。而もこの種の不幸が屢々、實に屢々存在したと言ふ事は、物を考へる事の出来る人達の到底否定し得ないところである。生きてゐる事と死んだと言ふ事の區別はそれ自體が朦朧した黄昏に過ぎない。そもそも何處で生が終り、何處で死が始るのか。誰が明瞭言へるだらう。ある病氣によつては生の外部的機能は全く停止状態に這入るが、その實は（正確に言ふと）單に中止してゐるに過ぎないのである。不可解な機械組織の一時的休止に過ぎないのである。暫くすると、ある見えない不思議な精氣が働いて魔法の齒輪が軌み出し續いて大輪が廻り始めると言ふ次第だ。銀の紐が永久に切れ、金の容器が修理し難いまでに毀れたのではないのだ。然し、では、その間、靈は何處にあたのか。

この種の一時的休止の病狀は珍しくない。従つて時には早すぎた埋葬を促すやうな事もあり得ると言ふ。「かゝる原因はかゝる結果を生ず」との先驅型の不可避的結論は兎も角として、私達は醫學上の或は通俗的な經驗からこのやうな早期埋葬の實際起つたと言ふ事を直接に立證し得る夥しい事實を知つてゐる。若し御希望ならば、幾多の信頼すべき例證を此處に擧げてもいい、その中の最も顯著

な一つとして、讀者のある方々には尙記憶新なる事實がバルチモアに近接したある市に起つたのである。その事件は痛々しい強烈な且つ廣汎な驚駭を捲き起した。最も尊敬すべき市民、著名の法律家に於て國會議員なる某氏の妻女が突然譯の分らぬ病氣に罹つた。これには彼女の侍醫も手の下しやうがなかつた。酷く悶え苦しんだ擧句死んで仕舞つた。いや死んだと思はれた。全く何人も彼女が實際死んだのかどうか疑つて見ようとさへしなかつた。また疑ふべき理由もなかつた。彼女は普通見られる死の總ゆる外觀を呈してゐた。顔の線は硬直し落窪んでゐた。唇は大理石のやうに蒼白かつた。眼には光澤が無かつた。身體には全く温が消えてゐて脈搏は止んでゐた。死體は三日間埋葬されずに置かれた。その間に死體は愈々硬ばつてコチコチになつた。けれど結局急激に腐爛し始めたやうに想はれたので葬儀は直ちに執行された。

夫人は一族累代の墓地に納められた。その墓地の窖はそれから三年と言ふものはそのまま手を付けられなかつた。が、三年目の終りに、もう一つの棺を入れる爲に窖が開かれる事になつた。だが、これはまた!! なんと言ふ恐怖がその扉を自ら押し開いた良人を待受けてゐたことであらう! 扉が外側に揺れ開いた瞬間、何やら白い布を纏うた物がカラカラと奇妙な音を立てて良人の腕へしなだれ落ちて來た。それは彼の妻の骸骨であつた。——未だ腐らなかつた經帷子を着たままの。

仔細に調べて見ると、彼女は埋葬後二日間生き還へつたまま死なずに居たと言ふ事がわかつた。彼女が棺の中であまりに苦しみもがいたので、棺は石室の柵から床の上に落ちて割れて仕舞つた。それ



で彼女は棺から脱け出られるやうな結果になつたのであると言ふ事も判明した。偶然墓所の中へ、石油を一杯に満したままのランプを置き忘れて来たのであつた今見るとすっかり空になつてゐた。しかしこれは蒸發して無くなつて仕舞つたものかも知れない。此凄惨な窖へ降りる階段の一番上に棺の大きな破片が発見された。彼女は此で鐵の扉を敲いて誰かの注意を惹かうと努めたものらしい。彼女は、かうしながら、全くの恐怖感から氣絶して、おそらくそのまま死んだものであらうが、倒れる時に内側から突出してゐた鐵の金物に經帷子が引掛かつた。さうして、それなりの状態で腐れて行つたのである。——立つたままの姿で。

千八百年佛蘭西で矢張りこの生きながらの埋葬と言ふ惨忍な事件が起つた。その時の仔細を知る者は誰も「事實は小説よりも奇なり」と言ふあの通り言葉を保證せざるにあられないのである。この物語の女主人公は、さる名門の、百萬長者の令嬢で、比ひまれな美しきで知られたヴィクトリン・ラフルヤードと言ふ娘であつた。彼女に付き纏ふ無數の求婚者の中にジュリアン・ボッシュエと言ふ青年がゐた。彼は巴里の雜誌記者で一介の貧しい文士に過ぎなかつた。けれど彼の才氣と人懐しい快活な性分は、此令嬢の注目を惹いた。實際令嬢は彼を愛してゐるかのやうに見えた。けれど門閥の誇りよりして彼女は、遂にボッシュエ君を振り捨てて、可成有名な銀行家で外交官でもあるレネル氏と結婚して仕舞つた。でも結婚後、この紳士はすっかり彼女を疎んじた。疎んじたばかりでなく、積極的の虐待さへしたらしい。かうしてこの男の下に彼女は不幸な歲月を送つてゐたが、間もなく死んで仕舞つ

た。——少くとも彼女を一目見た人は死んだと思はざるを得ない程、死に酷似した状態に陥つたのである。彼女は葬られた。——累代の墓所の石室ではなく、彼女の生れた村の普通の墓地へ。失望悲嘆に暮れながらも、なほ昔の戀人の面影に胸を焦がしてゐたボッシュエは、せめて彼女の亡骸を發掘してその豊かな黒髪でも手に入れよう、と言ふ至極ロマンチックな目的を以て巴里から遙々遠い彼女の村へとやつて来たのである。彼は墓地に這入り込んだ。真夜中に乗じて、彼は棺を發掘し、それを、こぢ開けて將に、彼女の亡骸から黒髪を切り離さうとした。その時である。彼女の昔ながらの面眸がぼつちりと開いたものである！ 實際彼女は生きながらに葬られてゐたのであつた。命脈がことごとく失せてゐたのではなかつた。彼女は愛人の抱擁に依つて、死と間違はれてゐた深い昏睡状態から呼び覺されたのであつた。彼は今や氣も狂はしい許りになつて彼女を村の宿屋に奢資ひ歸つた。彼は相當の醫學上の知識に基いて、彼女に甦生法を極力試みた。彼女は見事に蘇つた。彼女はボッシュエなる自らの命の救主であることを知るに到つた。さうして體が本復するまで彼と一緒に宿をとつてゐたが次第に心も優しく潤ひ初め——もともと彼女の心だつて金剛石のやうに堅い譯でもなかつたし、且つ今度の愛の教訓こそ金剛石をも柔ぐに足るものであらうと言ふもの——で、總てをボッシュエ君に許したのであつた。彼女は二度と夫の許へは歸らず愛人と共にアメリカに奔つた。その後二十年経つてから永い歲月は彼女の容姿を變へて、おそらくどんな親友でも見別けはつくまいと安心して二人は再びフランスに戻つて来た。然しこれは早まり過ぎた。と言ふのは、夫のレネル氏は一眼で彼女の



正體を看破つてしまつたからである。さうしてレネル氏は彼女に再び妻としての復歸を要求した。彼女は、もとよりこんな要求は言下に拒絶した。法廷も彼女を支持して、かうした特殊な事柄の下にあつて而もかゝる長年月が過ぎてしまつたからには、法律上からまた一般の徳義上からして、レネル氏の夫人としての権利は消滅したものであるとの判決を下した。

アメリカの出版者が翻譯して出したがりさうなライブチツヒの「外科醫報」と言ふ、相當權威のあるさうしてなかなか氣の利いた定期刊行誌があるがその最近號は此一件に類した非常に慘な椿事を記載してゐる。

巨大な體軀の、とても壯健な、一步兵士官が、ある時悍馬を乗りこなさうとして不意投げ落されそのまま氣を遠くしてしまつた。頭蓋骨がほんの僅か挫けただけで別に差迫つた危険もないやうに見えた。圓鋸術も上首尾に成し遂げられ、放血法その他の手當も充分に施された。けれど、どう言ふわけか刻々と怪しい状態に陥ちて行つて次第に見込みが無くなり死んだと言ふ事になつた。

天氣は蒸し暑かつた。そこで彼は無作法にも非常に慌だしく公共墓地に埋められた。彼の葬式は木曜日に行はれた。その次の日曜日には、いつものやうに、多くの墓參者が墓地内に雜踏した。正午頃一人の百姓が例の士官の墓の上に腰を下ろしたところどうやら誰か下で藻掻いてゐるかのやうに地面がムズムズ動き出したやうな氣がした、いや確に動き出したと言ひ出したので、容易ならぬ騒動が持上つた。初めのうちは、此男の言葉は餘り氣にも留められなかつたが、然し彼の顔色のまざままごとし

た恐怖と、その事實を主張して止まない執拗さの爲に、遂々、群衆の總ては必然的に色めき出した。其處で早速鋤が持ち出された。墓は恥しい程淺かつたから、二、三分掘つたかと思ふ中に、もう棺の頭が見え出した。士官はその時も死んでゐるやうに見えた。然し彼は殆んど眞直に體をたてて棺の中に坐つてゐた。さうして棺の蓋は、狂暴に藻掻いた爲に、半ば持ち上げられてあつた。

彼は直ちに最寄の病院に擔ぎこまれた。病院では假死の状態にはあるがなほ生きてゐると診斷した。數時間にして彼は甦つて知人の顔を識別し得るまでになつた、さうして途切れ／＼ではあるが墓の中の苦痛を話し出した。

彼の話から推すと、埋葬後一時間以上も生存の意識があつた事は明らかであつた。墓は無造作に且つ不注意に埋められたので土と土との間に無數の間隙が残つてゐた。その孔から空氣が幾らか這入つて來たのである。彼の頭の上に人々の聲音を聞いた、で、どうにかして此方の存在を知らせようと努めた。彼を深い昏睡から喚起したと思はれるものは、と彼は言つた、墓地内の雜踏のやうであつた。けれどそれと同時に如何に自分が怖ろしい位置に封じられてゐるかを明瞭と意識するに到つた。

更に記載さるる所に依ると此患者はその後至極經過良好で、いよいよ回復に近づきつゝあつたが、大事の間際で、敷醫の手術の犠牲になつてしまつたのである。つまり電氣手術を受けたのであるが、よくある事でききなり前後不覺の發作を起して今度こそ眞實に息絶えて仕舞つたのである。

電氣手術と言へば、私は有名な、而も極く稀な同種の事件を想ひ起すのである。然しこれは殺した



話でなく、二日間も葬られてゐたロンドンのある若い辯護士を蘇生させた話である。これは一八三一年の事である。その當時到る所で話題とされ、素晴らしい感動を引起したものである。

患者エドワード・スタップルトンは窒扶斯に罹つて醫者の好奇心を唆るやうな異常な症状を呈したが外見上死んだやうに見えた。其處で、遺族達に、どうか死體解剖を許して呉れるやうに頼んで見たが彼等は應じなかつた。かう言ふ申出が拒絶された場合によくある奴で、醫者達は祕かに死體を掘り出して、自由に解剖しようと決心した。この計畫は、ロンドン界限到る處に満ちてゐる死人發掘業者の手を籍りて、造作なく遂行された。葬式後三日目に、深夜に紛れて、死體と想はれた所の物を深さ八尺程の墓から掘出して來て、ある私立病院の手術室に持ち込んだ。

ある程度の腹部切開を試みたところが身體の各部が如何にも生生としてゐて、腐敗したやうな様子が少しもないので、電気試験をやつて見ようと言ふ事になつた。數回電流を通じて見た結果は普通の如く別に異つてはゐなかつたが、たゞ、一、二回、その痙攣的な動作の中に竝々ならぬ生氣が閃いたことは注目に價した。

大分夜も更けて行き、黎明近くなつたので、結局暇取らない中に解剖した方がよからうと言ふ事になつた。然し、一人の助手が自説を試験して見たいと熱心に希望し、胸部のある筋肉に電流をかけさせてくれと言つて肯かなかつた。そこで、一寸切り口を作つて手早く電線を接続した。すると死體は突發的な、然し全く非痙攣的な動作で、不意に起き上つたかと思ふと、手術臺から降りて床の真中へ跳び出したのである。さうして、暫時自分の周圍を不安さうに見詰めてゐたがやがて——口を開いた彼が何と言つたか全く別になかつたが、とにかく言葉が發せられたことは間違ひなかつた。而も音節は一々明瞭してゐた。言葉が終ると一緒に彼自身も床の上にドタリと倒れた。

暫くの間、一座の者は全く恐怖の爲に全身痺れたやうに思つた。けれど容易ならぬ事態であると悟つて漸く各自氣を取り直した。スタップルトン氏は氣絶はしてゐるが死んでゐるのでないことが判つた。エーテルを呉れると彼は間もなく生きかへつた。さうしてずんずんと目ざましく良くなつて元の健康體に復すると共に、親戚知己の間に戻つて行つた。スタップルトンの蘇生の一部始終を彼等に物語る事は、再發の恐れが全く無くなるまで保留されて居たのである。此吉報に接した彼等の茫然たる驚きと有頂天の悦びとがどんなものであつたかは想像に委せる次第である。

此事件の最も戦慄すべき特異性はスタップルトン氏自ら陳述する所に存在する。彼は此期間全く無意識であつたと言ふ事は一時も無かつた。朦朧と雜然とではあるが、彼の身の上についた事は一切即ち醫者に依つて死んだと宣告された時から、病院の床の上に昏倒するまでの一切をことごとく氣付いてゐたと彼自ら確言してゐる。自分が病院の死體解剖室に居るのだと氣付いて、最後のドタン場に瀕しながらも極力聲を擗つて叫んだ、先刻の意味の別らぬ言葉と言ふのは實は『俺は生きて居るんだ』と叫んだのであつた。

この種の記録をいくらでも列擧するのは容易な事だが、然しそれは止めよう、『早過ぎた埋葬』が



起ると言ふ事實を立證する爲にこれ以上何もそんな廻りくどいことは要らない。考へても見給へ。其事の性質上滅多に吾々の目には觸れない。従つて事實上、吾々には知られずにかゝる事件が甚だ「頻繁」に起ると言ふことは認めない譯には行かない。何らかの目的で墓地が取拂はれるやうな時、吾々の最も怖ろしい疑惑を暗示するやうな姿勢の骸骨を發見しないやうな事は殆んどないではないか。

この疑惑は全く怖ろしい。——けれどそれよりも常人の運命に到つては世にも怖ろしい限りではないか。死に切らぬ前の埋葬——これにも増して人間の肉體並びに精神の激しい苦難を想はせる事件が他に絶對にないと極言して宜しいと思ふ。堪へ難い肺臓の逼迫、濕つた土の息も詰るやうな臭氣、體に獅嚙ついてゐる經帷子、身動きもならない柩の抱擁、絶對の夜の暗さ、押し被さつて來る海のやうな沈黙、目には見えないが何處かでもぞもぞする征服者「蛆蟲」の感觸——さうして一方地上を想つて見給へ。其處には麗かな空氣と草木とがある。自分のかゝつた運命を知つたなら飛んで來て救ひ出して呉れるであらう、親しい友達が幾等でもある。然し所詮、知らせる手段はどう藻掻いても有様はない——自分の望なさは眞の死人の望なさと全く同様である事を意識する。かうした意識はなほもときめいてゐる心臓に身も世もない悲しみと——いかなる突き詰めた想像でも思はず逡巡するやうな戦慄とを醸し出すであらう。私は地上に於けるこれ以上の苦難を知らない。いや陰府の氷寒地獄の青苦すらこの半ばに達しないと思はれる。而もかう言ふ物語のどれもこれもが總じてゾクゾクするやうな興味を感じさせせるものである、私は興味と言つた。然しそれは題材それ自身の神聖な畏怖感を

通して物語られる事件の實在性を吾等が確認するが故に必然に而も特別に生ずる興味である。私のこれから述べんとする所は私の自身の實際の知識——自からの確實な身を以て經驗した物語である。

扱て私は永い間、世にも不思議な病氣に罹つてゐた、醫者達は他に名づけやうもない所からこの病氣を類癩と呼んでゐた。この病氣の直接の原因及び潜在的素因、或はその實際の兆候等は總て神祕の雲に覆はれて分らなかつたけれど、病氣そのもの、外見上の性質は誰にもすぐ了解されるものであつた。それは主として程度に依つて色々になるもので、此病氣の患者は或時は僅か一日、時に依るともつと短い間ですむ事もあるが、一種の頑強な昏睡状態に陥入るのである。患者は全くの無感覺、外面には不動の状態を持續する。然し脈搏だけは微ながらも聞えて居て一脈の温みも残つてゐる。頬の眞中邊には、あるかないかの赤味が未だ消えずにゐて、唇に鏡を當てがつて見ると、鈍調で不規則な躊躇ひ勝の肺臓の運動も認める事が出来る。次いで再び夢幻の状態が數週間乃至は數ヶ月間持續するのである、その間は、どんな精密な検査も最も嚴重な診斷もその患者の容態と完全な死者との區別が明瞭には付きかねるのである。大抵の場合此等の患者が「早すぎた埋葬」を免かれるのは、唯以前彼が類癩に罹つた事があると言ふ友人達の記憶が續いて喚起される疑惑、就中、腐敗の傾向が無いと言ふ事に依るに過ぎない。幸ひ、病勢の進行は漸進的である、徴候は注意を惹くことは惹いても、不分明である。この發作が漸進的に明白になつて來て回を重ねる毎に前回よりも繼續期間が長くなる。此處に危く埋葬から救はれる理由が存するのである。然し偶々、最初の發作にも拘らず（時々



ある事だが、それが非常に永いと言ふやうな患者は殆んど避け難く生きながら墓場に葬られるのだ。私自身の病状は醫學書に説明されてあるものと特に異つてある所はない。時折、何と言ふ格別の原因もないのに、次第々に半ば假死の状態に陥入る。さうしたなりで苦痛もなく、動く力もなく、密に言ふと考へる力もなく、唯自分自身と自分の枕邊を取巻いてゐる人達の存在を朦朧と夢うつつに意識しながら突然病症の轉機が来て完全に正氣づくまでそのまま横はつてゐるのである。だが、また時には全く不意に急激に襲はれる。先づ氣持が悪くなる痺れが来る寒氣がする、目が眩んで来る。さうして突然倒れて仕舞ふのだ。さうして、そのまま何週間も總てが空で眞暗で、沈黙で、宇宙萬物が虚無に歸つてゐるのである。これ以上の空寂があり得やうか、然し、かうした状態から私は徐々に、發作時の急激だつた割合には緩かに目覺めて來るのである。恰度長い落莫たる冬の夜の身寄もなく家もなく、巷を彷徨ふ乞食の上に夜が明けかゝる時のやうに、實に鈍々と、實に懶げに而も嬉しげに生命の夜明が訪れて來るのだ。

この全身強直の病癖以外には、然し私の體は至つて丈夫の方だつた。また、私の平生の睡眠状態の特質性が時に依つて長びくのだと思ふ以外、別に空恐しい持病があるとは信じられなかつた。私は眠から覺る時、決して直ちに明確な意識に立ち返へることはできなかつた。常に茫とした、取り止めない状態に數分間彷徨うてゐた。一般的に精神機能、殊に記憶の働きは全く中絶の状態に置かれた。私の忍ぶべき苦痛は肉體的には少しも無かつた。然し精神的のそれに到つては實に無限であつた。

私の幻想は直ちに納骨堂に囚はれた。私は蛆蟲や、墓石や墓碑銘に就いて譚言を口走つた。私は死の夢幻に没頭してゐた。「早過ぎた埋葬」の危懼が絶えず腦裡を往來してゐた。この妖しい不安は夜となぐ晝となぐ私を悩ました。晝間に於ても勿論その苦しさは並々ならぬものであつたが夜となると、一層堪へがたいものとなつた。凄愴な闇が地上に降りると、私は物思ふ毎にいよいよ怖しく、葬儀馬車の羽根飾りのやうにたゞ身を顛はせるのみであつた。かうして人間としての精根が盡きて仕舞ふと、私は悶えながらも眠に落ちて行くのである。——目が覺めた時、若し墓場の中に自分があたらと思ふと怖ろしい限りではあつたけれど、かうして最後に眠に着くのであるが、然しそれも結局、幻想の世界へ——巨大な、眞黒な、蔽ひ被さるやうな翼をもつて羽搏する「墓場」の夢想へと陥ちて行くに外ならない。

夢の裡に私を苛んだ數限りも無い陰鬱な幻想の中から私は唯一つだけ選り出して、茲に書いてみよう。

その時のカタルプシイの昏睡状態は、おそらく、いつもよりも、永く且つ深いものであつたらしい。突然氷のやうに冷やかな手が私の額に觸れた。同時に性急で早口な聲が「起きろ！」と呼んだ。耳の奥から聞えて來たやうな氣がした。私は眞直に坐つた。周囲は鼻のつかえるやうな烏羽玉の闇であつた。私を呼び起した者の姿を見とめることは出来なかつた。私は自分が發作を起して倒れたのは何時頃であつたか、その時何處に居たのか、全く思ひ泛ばなかつた。私は身動もせず、ひたすら考



へを集中させようと努めて居ると、冷たい手が私の手頭を強く握つて、ぢれつたさうに振つた。さうして例の早口な聲が耳許で響いた。

「起きろつたら起きろ、俺の言ふのが聞えないのか。」

「だがさう言ふお前は何者だ。」

と、私は突込んだ。

「俺か、俺の今住んでゐる國では名前などは見當らないんだ。」

その聲はどうやら悲しげに響いた。

「俺は元、人間だつた、だが今ぢや、悪魔と言ふ奴さ、俺は無慈悲だ、だが物の哀れを知らない譯ぢやない。お前は俺の顔へてゐるのが解るだらう。俺が喋る度に、齒の根がちがち鳴るが、夜の寒氣、無窮の夜の寒氣で顫へてゐる譯ぢやない。だが、この怖しさは如何だ。お前は如何して、安々と寢てゐられるのだ。此等の光景には俺はもう辛抱出来ん。さあ起きろ！俺と一緒に外の夜の世界に出て来い。俺はお前に墓場を發いて見てやろう。さあ此奴が、恐しい世界でなくてなんだ。よく見ろ！」

私は眼を瞠つた。尙も私の手頭を握り締めてゐる見えざる影が全人類の墓場を開いて見せたのだ。墓からは、何れも腐肉の燐光が流れ出てゐた。私はその微かな光りを便りに墓の有ゆる隅々を見透すことが出来た。其處には蛆蟲と共に、哀しい、嚴かな眠に落ちてゐる屍衣を纏うた人々の姿を見た。ああ、然し眞實に眠つてゐる者は極めて稀れであつた。少しも睡めぬ人達は彼等に比べて幾百萬と言

ふ程多かつた。彼等の弱々しく腕くのが見えた。誰も彼も一樣に悲しい不安の裡にあることを語つて居た。無数の墓の奥深い底から經帷子が侘しげに落葉のやうに鳴る音がした。安らかに眠つてゐるやうに見える者でも大部分は、程度の差はあるが、いづれも埋葬された當時の緊縛された窮屈な姿勢から變つてゐるやうに見えた。かうして見詰めてゐると、再び聲が響いた。

「これが——これが惨な光景でないのか。」

然し、私が答へる暇もない中に、その影は私の手頭を押えた手を急に放した。と、燐光も同時に消えた。墓も忽ち閉されて仕舞つた。その途端、墓場の中から再び「おお神よ、これが惨な光景ではないのか」と叫ぶ騒々しい絶望の呻が洩れて来た。

夜になると浮かんで来る此等の夢幻が目ざめてゐる時も恐るべき力を以つて迫つて来た。私の神経系統はことごとく困憊し、私は絶えざる恐怖の餌食になつて仕舞つた。私は乗馬、散歩、其他自分を戸外に運ばねばならぬやうな一切の運動を躊躇するやうになつた。實際私のかうした常習性の類癩をよく知つてゐる人達の傍を一步でも離れると、ひよつとして通例の發作に襲はれた場合眞實の状態が確かめられない中に葬られはせぬかと考へて私はどうにも自分の安全を信する譯には行かなかつた。私は最も親しい人達の注意と信實さへ疑つた。萬一、これまでにないほど昏睡状態が長引いて、彼等も、是では愈々駄目だと見切りを付けるやうに説き伏せられる事はないかと氣遣つた。いやそれ所ではない。今まで度々迷惑を掛け續けて来たから、少しでも永引いた發作にでも取り憑れたら、それを



この煩はしい病人を厄介拂ひをする何よりの口實とするかも知れない。其處まで考へるやうになつたのである。彼等が如何に神命に誓つた約束をして私を安心させようとしても無駄であつた。如何なる事情であらうと私の死體が目に見えて腐爛して行き、もう到底保存に堪へない程度になるまで葬らなといふ最も神聖な誓言を私は彼等に強要した。然し、さうしても、なほ私の怖れは消えなかつたし、如何なる氣休も受けようとはしなかつた。私は遂々綿密な系統立つた一つの豫防組織を案出した。先づ最初に累代墓所の 窖を内部から自由に開けることが出来るやうに作り變へた。墓の内側に深く突出してある長い横杆を一寸でも押せば表の鐵の扉が彈ね上るやうに慥つた。それから私の容れらるべき棺から直ぐ手の届く所に食物や水の便利な容器が置かれ、空氣や光線も自由に出入できるやうに考案された。また棺そのものはふんわりと柔かい敷物で覆はれてあつて、且つ、棺の蓋は、窖の扉と同様の仕掛けで、少しでも體を動かせば、容易に開くやうな發條が附いてゐた。のみならず、大きな鈴が墓の天井から下つてゐてそれに附いてゐる紐が棺の穴を通じて中の體の片手に結ばれるやうな仕組にもなつてゐた。ああ然し、こんな人爲的な用意が人間の宿命に對して何の役にたとう。如何に巧妙な安全装置も、宿業の呪はれの身を、この忌はしくも堪へがたい「生きながらの埋葬」の苦しみにから救ふことは出来ないのだ。

ある時——前にも屢々あつたが——私は、全くの無意識状態から、最初の最も微かな不分明な生存の知覺へ戻りつゝあつた。實にのろのろと龜の歩みをもつて意識の世界が白らみかけて來た。夢うつ

つの不安、鈍調な苦痛の無感覺に近い持續、何の望みも何の努力もない、それから、暫く間を置いて耳鳴りがし出す。次に再び長い間を置いて體の節々が痛み出しやがて楽しい無限をも想へる靜寂が訪れる。その間に覺めかゝつた感情が次第に意識を形作らうと足掻く、それから再び短い失神の境を彷徨した後、突然吾に還へるのである。やがて臉が微かに慄へる、と思ふと忽ち無限の激しい恐怖が電流のやうに襲つて來て顛顛から心臟まで血が一時に逆流する。さうして初めて確實に物を考へやうとする努力が生ずる、憶ひ出さうとする努力も起つて來る。さうして微かにおぼつかないながらも、どうにかそれが成功して、やつと、ある程度まで自分の現状が判りかけて來るのである。自分は普通の眠から覺めつつあるのではない、と感ずる。類癇に襲られたのだと思ふ。さうして最後に、海の大濤のやうな一つの怖ろしい觀念に依つて私の震へてゐる靈は一堪りもなく壓倒される。——それはあの幽靈のやうな執念深い一つの觀念だ！

このやうな想像に囚はれてから數分の間は私はたゞ凝然と動かすにゐた。何故か。何故と言つて動くだけの勇氣を思ひ切つて振り起せなかつたのだ。私は自分の運命を一思ひに突き止めて見るだけの努力を敢へてなし得なかつた——而も心の中には「確にさうだ」と囁く何物かあつた。絶望——他にどんな惨さがあらうとも、これほどの絶望を呼び起しはしなれないと思はれる——たゞその深い絶望のみが私を強ひて長い逡巡の後漸く臉を開かしたためたのである。私は臉を開けた。闇黒——全くの闇黒であつた。私は發作が既に終つたことを知つてゐた。私の病症の轉機が夙の昔に過ぎて仕舞つたことを



知つて居た。自分は今や全く普通の視覚機能を回復したのだと知つてゐた。——而も闇黒——限なく闇黒であつた。永遠に續く「夜」の餘りにも濃き、一筋の火影さえない全くの闇黒世界であつた。悲鳴を揚げようとした。けれど、乾枯びた唇と舌とが空しく痙攣しただけで、空洞のやうな肺臓は何か重々しい山岳にでも、し掛かられたやうに挫けて、懸命に息を吸込む度に、心臓と一緒に喘いで顫へるに過ぎない——聲などは、無理にも押し出せなかつた。空しく叫ぼうとして顎を動かして見ると、丁度死人のやうにそれが縛られてゐるのに氣が付いた。さうして體は何やら堅い物の上に横つてゐて兩側も同様のもので嚴重に取り圍んであるのを感じた。それまでは手足を動かして見る氣も取へてなかつたが今度は矢庭に兩腕を突出して見た、さうするとそいつは顔から六吋と離れてゐない處で堅い木に打つかつた。——その木は全身を包圍してゐるのだ。最早、私は自分が棺の中にある事を疑へなくなつた。

然し、今やこの無限の悲運の中に、甘美な希望の天使が訪れて來た。——と言ふのは例の安全装置を憶ひ出したからである。私は身を振つて、殆んど反對的に蓋を開けようとした。然しそれは動かかなかつた私の手は鈴の紐を探つところ、それも見當らなかつた。慰めの天使は、永遠に逃げ去つた。さうして總ては層峻嚴な絶望の支配に歸した。私があれば程念入りに用意して置いた棺の柔い敷物が無いことも必然に氣が附かすには居られなかつた。——それに妙に濕つばい土の獨特の匂が強く鼻を衝いて來た。最早結論は動かす譯に行かない。私は自家の墓所に埋められたのではないのだ。

他處に出て居る中にいつもの發作に襲はれたのだ。他人の間に居る中に——何時だか何處でだか憶ひ出せないけれど。さうして彼等がまるで犬でも片付けるやうに自分を埋めたのだ——普通の棺桶に釘付けにして、何處か名もない無縁佛の墓場へ深く深く永久に埋め込んだのだ。

斯くも恐しい自覺が遮二無二、それ自身を私の心の奥底へ押込んで來た時、私はもう一度、必死に聲を出さうと藻掻いた。さうして今度は工合よく成功した。長い、狂ほしい、連續的な悲鳴が苦悶の叫喚が、地下の闇黒世界に鳴りどよめいた。

「おおい、どうした？」  
荒々しい聲が私の悲鳴に答へた。

「一體どうしやがつたんだ。」  
と第二の聲が聞えて來た。

「早く出て來やがれ」  
と第三の聲である。

「山猫見たいに、なんていけ騒々しい聲を出しやがるんだ。」  
と第四の聲が續いて來た。さうして私は矢庭に荒くれ男の一團に捉れて無作法に搔すぶられた。けれど、もう既に目ざめてゐた。あの必死の聲を振り擽つた時、吾と吾聲に驚いて初めて明瞭と醒めたのであつた、さうして彼等に搔すられると同時に忽ち記憶が甦へつたのである。



この椿事はヴァジニアのリッチモンド市附近で起つたのだ。私は友人同伴でデユムス河敷哩を下つて銃獵に出懸けたのであつた。ところが夜が迫つて來ると共に暴風雨になつた。幸ひ、河中に碇泊してゐた小型の帆前船が見付かつた。それには庭土が積込んであつたが吾らに避難所を提供して呉れたものはこの船の船室しか無かつた。吾々は、これを利用して一夜を船で明したのである。私はこの船の唯二つしかない寢棚の一つで眠つた——六、七十噸そこそこの船の事だからその邊のことは斷る必要もなからうが、私の占領したのは敷物も何もなく、一番廣い處で十八吋位、頭上の甲板から底までの距離も殆んどその位であつた。其處に潜りこむには随分骨を折つた。然し、それにも拘らずぐつぐつと寢込んでしまつたらしい。その時私が見た光景は、夢でも無く、幻覺でもなかつた。——總て自分の寢込んだ場所の狀況から必然的に織り出されたものに過ぎないのだ。つまり平生心に築喰つてゐた考やまた前にも述べたやうに眠から醒め際の際に著しい記憶恢復の困難と言ふ事も作用して當然に生じたものであつた。私を揺り起したものは帆前船の水夫と、荷揚人足の一團であつた。積荷が庭土であつた故に土の臭がしたのは當然であつた。顎を括つた綱帶と思つたのは、夜帽子が無いので代りに頭に捲き付けた絹のハンカチであつた。

然しその間の苦惱は、洵に現實の墓場に埋葬された者と少しも變るところが無かつた。それは言ひやうもなく怖ろしく、考へやうもなく凄慘なものであつた。けれど、大凶が大吉を生んだと言ふべきである。何故と言つて極度の苦しみが私の精神に急激な變化をその當然の結果として齎らしたからで

ある。私の心は強く自若とした落着を得るに到つた。私は意氣揚々と外を出歩いた。私は勇しい運動を始めた。天空の自由な空氣を胸深く呼吸した。「死」よりも外の事柄を考へた。私は自分の醫學書には再び手を觸れなかつた。忌はしいパツカンの書は焼捨てた。私は、このやうな「夜の思想」や墓地の妖説浮語や百物語等は一切遠ざけた。かくて私は直ちに新しい人間になつた。さうして一人前の男性としての生活を始めた。私は此記念すべき夜以來埋葬に關する危懼を一蹴した。それと同時にあの世にも奇怪な類癩も起らなくなつた。思ふに、恐怖なその病の結果と言ふよりもむしろ原因なのであつた。

理性の明かな眼にさえ、悲しい人類の世界は時として、地獄の相を取る事がある。然し人間の想像は、地獄の奥底の隅々まで、罰せられる事なくして探り得るカラテスの如き力をもつてゐない。ああ墓場の恐怖の物凄き行列を總て幻想とのみ言ひ切れない時がある、けれどアフラシアブと共に、オキザス河を下つて行つたかの悪魔達のやうに墓場の妄執をも眠らしめよ。然らざれば彼等は私達を喰ひ喰ふであらう。——彼等は眠むる事をば許されねばならぬ。然らざれば私等は亡びるであらうから。

——終——



## 陥穽と振子

神を蔑にし飽くなき拷問鬼ら、罪なき者の  
血を吸ひて狂ほしき永き呪文を満たせしは此處。  
今や國は慈みゆたかに、恐怖の窟打ち毀たれ  
死の住みし所、眼前、生命と平安と充ち満ちてあり。

(巴里イヤコペン黨俱樂部跡に建設の  
市場の扉に誌すべく作られた四行詩)

私は病氣になつてゐた。——その永い間の苦痛に依つて瀕死の病氣になつてゐた。彼等が最後に私の縛を釋いて、坐る事を許して呉れた時には、既に神経がすっかり壞れてゐることを私は感じた。宣告——怖るべき死刑の宣告が私の耳に聞えて來た明瞭な言葉の最後のものではなかつた。その後で、宗教裁判官達の聲が夢の中のやうな朦朧した咳として響いて來た。それは何處か水車の車輪の廻る音を聯想させるものが在つたらしく、聞いてると「回轉」と言ふ觀念が私の心に浮んで來た。此はほんの短い間であつた。すぐ聞えなくなつた。だが私には見えた。總てが身慄ひする程、誇大に感じられて見えた。黒衣を纏うた裁判官達の脣が見えた。それは白く——私の今書いてゐる此紙よりも白く、

さうして怪奇なまでに薄く——彼等の果斷や、動かし難い決意や、人間の苦悶の冷厳な輕侮等を強く示して飽までも薄く——私には見えるのであつた。私は自分にとつては生命の終りとなる所の宣言や其等の脣から尙も發せられてゐるのを見たのである。其等の脣が冷やかな言葉を發する度に振れるのを見た。私の名前の綴音を言つてゐる其脣の形を見た。而も何の音も聞えないので私は竦然とした。私は又このやうな氣が顛倒する許りの怖しさの間にも、室の壁を覆うてゐる黒い壁掛が靜かに、氣が付かない程の微さで搖れてゐるのを見た。それから卓上の七本のひよる長い蠟燭が目に這入つた。最初に、それは何處となく心優しい物をもつてゐるやうであつた。自分を助けて呉れる眞白な、すらりとした天使達のやうに思へた。だがその次には、突然私の精神は我慢の出來ない激しい嫌悪を感じた。流電池の線に觸れたやうに五體のあらゆる纖維に蝨酸が走つた。さうして天使達の姿は焰の冠をつけた無意味な幽霊と變つて自分の救ひは彼等から得られない事が分つた。それから私の空想の中に、例へば朗らかな樂音のやうに、墓場には甘美な安息があるに違ひないと言ふ考が這入つて來た。その考へは靜かにコソリと這入つて來て、しみじみと味ひ得るまでの形を取るには長い時を要した。遂に私の精神がハッキリとその考を感じそれを抱いた瞬間、裁判官達の姿が私の目から魔術のやうに消え失せた。ひよる長い蠟燭の影も無くなつた。其焰が盡く消えてゐた。闇黒が忽ちやつて來た。瞑府へ落ちる魂のやうにすべての感覺が餘りに狂激な墜落の爲にすつかり失はれて仕舞つたやうに見えた。沈黙と寂寞と夜のみの世界であつた。



私は氣絶してゐたのであつた。然し今でも尙、あの時は總ての意識がごとく無くなつてゐたのではないと言ひたい。では意識の如何なる部分が残つてゐたかと言ふことは分りもしなければ此處に書かうとも思はない。がともかくもその時は意識が全く無くなつてはゐなかつた。深い熟睡の中にあつても意識はすつかり失はれない。——夢我夢中の境地にあつても、——昏倒の状態にあつても——死の中にあつても、墓場の中にあつてすらも、すつかりとは無くなつてゐないのである。さうでないとするならば、人間の靈魂の不滅は有り得ない事になる。最も深い熟睡から私達が目を醒ます時でも何かしら夢らしいものの薄紗のやうな網を破つて來るのである。然し醒めて一秒と経たない中に（それほど網は破れ易い故に）夢を見たかどうか忘れてしまふのである。氣絶から正氣付くまでに二つの階段がある。第一は心理的な即ち精神的な覺性の階段。第二は肉體的な、即ち存在の覺性の階段である。かうして第二の階段に達して第一のそのの印象を思ひ起すことが出來るとすると、それらの印象が、自分が越えて來た深淵の思ひ出を雄辯に語るものであると言ふ事は可能であるやうに思はれる。さうしてその深淵とは——何であるか。如何にしてその深淵の陰影と死の陰影とを私達は識別し得るか、然し私が第一の階段と名付けた印象は勝手に憶ひ出すことが出來なくとも、永い間を経て不意に其等の印象が私たちの胸に甦つて來ないものであらうか。自分が憶ひ出した譯でもなく、其等が何處からやつて來たのか、不思議であるやうな時に。

かつて氣絶した事のある人は燃えてゐる炭火の中にふと見慣れぬ城廓や何處かで知つてゐるやうな

顔を見出すやうなことがある。多くの人の未だ見た事のないやうな哀しい幻影が空中に浮んでゐるのを見ることがある。何か新奇な花の匂を嗅いで考え込むことがある。今まで注意を惹いたことのないやうなある音楽的な韻律が氣になつて頭が狂しくなる事がある。

私は其時のことを憶ひ出す爲に何度も注意深い努力を繰り返して見た。私の靈が通つて來た一見虚無らしい状態の何らかの記念物を掻き集める爲に懸命に骨を折つた。その中で、どうやら成功したと思はれる瞬間があつた。然し短い、極く短い間であつた。その瞬間に私は昏倒時の無意識状態らしく思はれるものと僅々關聯してゐる（と意識回復後の明瞭な理性が保證したところの）記憶を思ひ浮べたのである。この記憶の片影が朦朧と告げる所に依ると、脊の高い者が私を抱いて沈黙のまま下の方へ連れて行つたのである。——下へ、下へ、なほも下の方へ、——私は遂にその下降の限り無い長さには、眩暈を感じ息が詰るのを覺えた。自分の心臓の異常な静けさに漠然たる恐怖が湧いて來た。その次には、萬物が突然動かなくなつたのを感じた。あたかも私を抱いてゐた者（幽靈の従者！）が一氣に下へ落ちてゆく中に、限りない限りさえ駆け脱けてしまつて、やつと倦きて止つたやうに思へた。その次に意識に上つたものは扁平と濕氣の感じであつた。それから先きは總てが氣違染みた混沌であつた。

全く不意に私の意識に動きと音とが甦つて來た。——騒々しい心臓の運動とその鼓動の響音とであつた。それから後暫く全部空白な間があつた。やがて再び、運動と音とそれから感觸——體に滲透



するビリビリする感覚があつた。次ぎには自分の存在の單なる意識——思惟作用の伴はない。その状態はかなり長く續いた。それから出抜に、思考が甦つて來た。さうして續いてそくそくとして迫る恐怖感と、自分の眞個の状態を確認しようとする熱烈な努力とが起つた。次には意識不明に陥りたいと言ふ強い願望が起つた。が次には、忽ち精神がはつきりと目ざめ、動かうとする有効な努力をし始めた。かうして今度は、宗教審判、裁判官、黒い壁掛、宣告、悪感、氣絶の總ての記憶がそつくり浮んで來た。それから續いて起つたことは完全に忘れて仕舞つた。それらに就いては數日経つてから懸命に考へた末、漠然と思ひ出す事が出來た。

その時まで、私はまだ眼を閉ぢたままであつた。私は自分が縛を解かれて仰向に横つてゐるのを感じた。私は手を伸ばして見た。するとそれは何か濕々した堅い物の上にドタリと落ちた。私は其のまま暫くの間黙つてゐた。さうして自分は一體何處に如何なつてゐるのであらうと想像することに努めた。私は一目見たいと思つた。けれど自分の眼を開く事は思ひ切つて出來なかつた。私は周圍の物をちらりと見るとその最初の一瞥が怖かつた。恐しい物を見なければならぬからではなく、むしろ見るべき何物もない空ではないかと思ふと私は怯えずにはゐられなかつた。けれど遂々、私は死物狂ひの勇氣を奮ひ起して、一氣に眼を開いた。それは私の最も怖れてゐた考へ通りであつた。永遠の夜の暗さが私を取巻いてゐた。私は呼吸をしようとして足掻いた。闇黒の濃さが、私を壓迫し呼吸を詰まらせるやうに思へた。空氣は堪へ難いまでに鬱積してゐた。私は動かすにぢつとして居た。さうして理

性を働かさうと試みた。宗教審判の經過を思ひ浮べて見て其處からして自分の實際の状態を演繹して見ようとした。宣告が下された。それから非常に長い時間が経過してゐるやうに思へた。然し自分が眞個に死んでゐるとは全然考へられなかつた。自分が死んでゐるのではないかと言ふやうな想像は、小説などで讀むことはあるが、それは全く自分の存在の實感とは兩立しないものである。然し、それでは、一體、自分は何處に如何してゐるのか。死刑囚は通常異教徒焚殺刑に於いて命を絶れると聞いて居たが、このオウトダフェが丁度自分の審判の當夜に施行されたのであつた。では自分は此次の機會（それは何月も起る事のない）の犠牲として、前の土牢に再び送り還されたのか、が、そんなはずはないと私は直ちに悟つた。彼等は犠牲を緊急に必要としてゐたのだ。更に、私の前の土牢はトレドのすべての死刑囚檻房と同じやうに石の床で、光も臙げに這入つて來てゐたのだ。一つの戦慄すべき考へが突然浮かんで來て血液が一時に逆流した。さうして私は再び意識不明に陥つたのである。氣が付いてから私は全身を痙攣させながらやつと立ち上つた。さうして自分の腕をあらゆる方向に差し伸べて見た。何物にも觸れなかつた。然し、私は一步踏み出すことを怖れた。若し「墓場」の壁にでも突き當ることになつたら——と思つたからであつた。すべての毛穴から汗が滲み出て額に冷たい玉が連なつた。不安な焦燥が、矢も楯もならないほど募つて來た。私は手を伸ばしたま、注意深く前に進み出た。眼玉を前に突き出してどんなに微かな光の影でも捉へようとしながら。かうして私は何歩か歩いた。然し依然として眞暗で空つぽであつた。私は漸くホッと一息吐いた。



どうやら私の運命は自分の最も怖れてゐた所のものでは少くとも無いやうに思はれて来た。私は、こんな工合に注意深い歩みを續けてゐると、トレドの曖昧な然し恐しい噂の數々が次ぎから次ぎと思ひ浮んで来た。十年に就いては種々と奇妙なことが語られてゐた。——もつとも自分はそれを作話として貶してはゐたけれど、其等は單なる噂として見なければ、到底繰り返す氣になれないやうな、不氣味な怪談めいたものであつた。私は此地下の暗闇の世界で餓死するやうに棄てられたのであるうか。でないとするならば、如何なる運命が、おそらくそれ以上に怖しい運命が自分を待つてゐるのであらうか。その最後が死、それも有り来りな、絞切型の苦しみでは済まされぬ死である事は、裁判官達の性格をよく知つてゐる私には疑ふ譯にはゆかなかつた。たゞその方法と時期が問題であつた。私はひたすらそれを考へ倦み魂を疲らせた。

遂々、私の前方に擴げた手が何か堅い障礙に行き當つた。それは壁——石疊のやうな、滑かな、粘つく冷たい壁であつた。私は牢獄の古い傳説を憶ひ出しながら注意深い疑をもつてその壁に沿うて進んで行つた。だが幾等歩いても此土牢の廣さは分らなかつた。周圍の壁は何處も一樣であつて、たとへ一周して元の出發點に戻つて来たとしても、其事に氣がつかない位、完全に同じやうに思はれた。そこで、ナイフを捜した。私が審判の部屋に連れて行かれた時は、まだポケットの中に入つてゐた筈であつたから。所が無くなつてゐた。私の着物は粗末なサーヂの包衣に變つてゐた。ナイフがあつたら、その刃を壁の石と石との隙間に立てて出發點の目印にしようと思つたのであつた。然し心が

落ち着くとそれは何んでもない問題であつた。私は包衣の縁を引裂いて、それを眞直に伸して、壁と直角に置いた。かうして壁を手探りしながら進んで行けば完全に一周した時はこの裂布の處に戻つて来るに違ひない。——さう、少くとも私は考へた。然し、私は土牢の大きさを、自分の體の衰弱と言ふことを考慮に入れてゐなかつた。下は濕つてゐて滑り易かつた。その中に私は前のめりに足を取られて倒れて仕舞つた。私は極度の疲勞から、そのままへたばつたなり起上れなかつた。さうすると忽ちうつと睡つてしまつた。

目を醒して、手を伸してみると、側にベン塊と水注子とが置いてあつた。私はこの間の事情を詮議してゐる餘裕などは無かつた。あまりに困憊してゐた。私はたゞガツガツとして食ひ、飲んだ。それから再び起上つて牢獄の壁に沿つて歩き始めた。非常な困難と闘ひながらも、やつと先刻のサーヂの切片の處に迹り着いた。最初出發してから倒れる時迄、私は五十二歩を算へた。再び歩き出してから、此裂布の地點に来る迄、更に四十八歩を算へた。そこで合計百歩と言ふ事になつた。二歩を一碼と換算するとこの獄房の周邊は五十碼であると私は推測した。然し私は壁に沿うて多くの曲角に出會したので一體この窖——窖と考へない譯には行かなかつた——がどんな形のものか見當がつかなかつた。

私はかうして詮索はして見たが別にこれと言ふ目的も——希望に到つては全く——持つてゐなかつたのである。唯、妙な好奇心が私を驅つてこの詮索を繼續せしめた。壁の方はそれだけに止めて、今



度は内側の土間を横断して見ることにした。床は何か堅い物質から出来てあるやうに見えたが實際は粘土であつたから餘程用心して進むことにした。然し遂に私は勇氣を出して逡巡すに足を踏み出すやうにした。さうして出来るだけ一直線上を歩いて行くやうに努めた。私が、こんな工合に、十歩か十二歩進んだ時、私の包衣の引裂いた縁の殘部が垂れ下つて兩足に絡みついた。私はそれを踏み付けて激しく臥向に顛倒した。

倒れた當座は何が何やら心が混亂してゐて譯がわからなかつたけれど、何秒か経つと、私はそのまま倒れた状態にありながらも、一つのやや驚くべき有様に注意を惹かれた。それはかやうなことである。私の額は牢獄の土間の上に付いた。然し、唇、初め顔の上部の總てが頤と殆んど同一平面にあつたにも拘らず、何物にも觸れてゐなかつた。同時に額の邊が濕つばい空気に冷え冷えと包まれたやうに思はれた。さうして饑ゑた菌のやうな特殊な香が鼻を衝いて來たのである。私は手を差し伸べて見た。さうして思はず身震ひした。私は圓い陥穽の縁の際どい所に打倒れたのであつた。私はその坑の縁の邊一寸下の石疊を手さぐりして小さな破片を見出すとその深淵に投げ込んで見た。私は暫くの間その破片で坑の壁に打衝りながら行く反響を聞いてゐたが、やがて水面に落込んだらしく激しい水音が木魂返して來た。すると忽ち上の方から扉でも素敏く、開閉するやうな音が突然聞えて來て、同時に、一筋の微かな光線が射込んで來たかと思ふとまたすぐ消えて仕舞つた。私は自分の爲に設けられた處刑法が如何なるものであるかを明かに知つた、さうして今偶然の事から

免れ得た事を喜ばずに居られなかつた。若も倒れる前に、もう一步先きに踏出してゐたならば、この世界は再び私の見得る處では無かつた。さうして今自分が危く免れ得た死は、宗教糾問に關する種々の物語の中に現れた（私はそれを取るに足りない作話のやうに考へてゐたところの）性質をまざまざと實證するものであつた。彼等の暴戾の犠牲となる者に對して、二つの殺し方、最も殘虐な肉體的苦痛を伴ふ死と極度の心理的恐怖を伴ふ死、このいづれかを擇ぶのである。私は後者の犠牲として殘されたのであつた。私は長い間苦しめられた爲に神経は盡く傷み毀れ、私自身の聲にすら怯えるまでになつて居た。したがつて、この種の拷問には、あらゆる點に於いて、最も詭へ向きであつた。

私は、この種の陥穽戸が土牢の到る處に散在してゐるのであらうと想像した。それで私は四肢を慄はせながら元の壁際へ後退りを始めた。このやうな怖ろしい思ひをする位ならむしろ温順くして死なうと考へたからである。然し、また一方では、いつそ此等の深淵の何れかに飛び込ん、自分の慘な運命の處置を一思ひに付ける勇氣があつたらばと思はないこともなかつたのである。けれど今、自分は極度の臆病者になつてゐた。此種の陥穽戸に就いて讀んだ事——一思ひに命を終らせる事は決して彼等の怖ろしい計畫の期待する所ではないと言ふ事も私は忘れる譯にはいかなかつたのである。

精神の苦痛は私を長い間眠らせなかつたが、最後には再び疲れて睡ろんでゐた。目を醒ますと、前のやうに、ベンのかたまりと水注子が側に置いてあつた。私は嫌付くやうな渴を感じて一氣に水注子を空にした。おそらくその水の中には薬が仕込んであつたらしく、飲み切るか切らない中に、堪へられな



いほど睡魔が襲うて来た。私は深い深い眠り——死のやうな眠りの中に引入れられた。何時間眠つたか勿論分らなかつた。然し再び眼を開けると、自分の周囲の物が見えるやうになつてゐた。怪奇な硫黄色の火影（何處から出て来るのか初めは別らなかつたが）に依つて私は牢獄の廣さや形を見る事が出来た。

その廣さに就いては私は大きな誤算をして居た。壁の全延長は二十五碼を超えなかつた。此事實を前にして、誤算の理由を發見する爲に私は暫く夥しい馬鹿げた努力を拂つた。全く馬鹿げた努力であつた。こんな身の毛の彌堅つやうな恐怖の眞中にあつて牢獄の單なる大きさを計る事よりも、もつと馬鹿げた事があるだらうか。然し私の精神は却つてつまらぬ些細な事に狂烈な興味を見出すやうになつてゐた。私は如何してこんな間違をしたかと言ふ問題に没頭した。最後に到々その理由が頭の中に閃めいて来た。第一回の探索に於いて、私は倒れる時迄五十二歩を計算した。だが其時既にサーズの裂布から一、二歩の處まで来てゐたに違ひなかつた。もう殆んど穴を一周してゐたのであつた。其處で私は睡つて仕舞つた。醒めると起上つて今度は逆に引返へして行つたに違ひなかつた。それで實際の長さの殆んど倍に思ひ違へたものであらう。錯雜した心理状態から、第一回は壁を左側にして歩き始めたのに、戻つて来る時には壁が右手にあつた事實を見道して仕舞つたのである。

私は又、周邊の形に就いても瞞されてゐた。私は壁を手探りしながら進んで行つた時、多くの曲り角に行き當つたやうに思つた。これが非常に不規則な感じを與へたのである。氣絶や昏睡から醒めた

ばかり頭には絶對的な闇黒の効果は、こんなにも力強いものである。曲り角と思はれた物は處々に不規則な間隔を置いて出来てゐる僅かな凹所に過ぎなかつた。牢獄の大體の形は四角であつた。私が今まで石疊のやうに考へてゐた壁は鐵或は他の金屬の巨大な板から出来てゐるやうでその接目が凹所を作つてゐるのであつた。此の金屬壁の全面には僧侶達の怪談染みた迷信が生み出した醜怪な面を背けるやうな形が滅茶苦茶に手荒く描き出されてあつた。骸骨の姿をして嚇すやうな形相の惡魔達、更に實際恐怖を唆るやうな無氣味な形像が、壁全面に擴がり、それを塗り潰してあつた。私は其等の怪物の姿はいづれも充分に認める事は出来たがその彩色は、濕つぽい牢獄の空氣の爲に褪せたり呆けたりしてゐるやうであつた。その次に床を見たが、それは石で作つてあつた。その眞中に、先刻危くその縁から道れたところの圓い陥穽が口を開けてゐた。然し、それは牢獄に唯一つしか無かつた。

私は此等の物を不明瞭に而非常に努力をして見たのである。と言ふのは、私が睡つてゐる間に體の状態が著しく變つてゐたからである。私は仰向に足を伸したまゝ、木製の棹のやうな低い臺架の上に横たはつてゐた。さうして馬の腹帯のやうな長い革紐で緊切とこの臺に縛り付けられてゐた。その革紐に私の胸や四肢をぐるぐる幾重にも縛つてあつた。たゞ僅に首だけは自由を許されてあつた。さうして左腕がある程度まで——自分の側に置いてある床の上の土製の食物皿に、非常な努力を用ひてやつと届き得る程度の自由が許されてあつた。恐ろしい事には水注子が無くなつてゐた。恐ろしい事は——何故と言つて私はもう堪へ難い渴に苛まれてゐたからである。この渴をいよいよ募らせるのに



彼等の拷問の目論見らしく見えた。と言ふのは皿の食物が鹽辛く味付けてあつたから。

私は上を向いて、獄屋の天井を眺めた。高さ三十呎か四十呎あつた。略周囲の壁と同じやうに作られてゐた。その天井の板の一つにある實に奇怪な形に、私は全身の注意を吸収された。それは普通見るやうな「時間」の神の繪であつた。唯變つてゐるのは大鎌の代りに古風な柱時計に付いてゐるやうな巨きな振子を描いたと一寸見ると思はれるところの物を持つてゐた。然し、何か此振子の格好には妙な所があつたので私は一層注意して見詰めてゐた。私がかうして眞直に監視してゐると（その位置は恰度私の眞上に在つたから）私はその振子が一寸動いたらしく思はれた。次の瞬間私の想像は確證された。その振子の振幅は短く從つて勿論鈍かつた。私はなほ暫く見つめてゐた。稍々怖れを感じながら、いやそれよりも遙かに多く奇怪な感じに打たれながら。然し、結局、その鈍い動作に倦きて、私は天井の他の方面に眼を轉じた。低い物音が私の注意を捉へた。床の上を見ると數匹の大鼠が走つてゐた。彼等は私の右手に見える例の陥井戸から出て來るのであつた。肉の匂ひを嗅付けて私が見てゐる間に既に貪婪な瞳を光らせた奴が群をなして其處から出て來た。此等を嚇して追拂ふには容易ならぬ注意と努力を必要とした。

三十分、或は一時間位（時間は漠然と感ずることが出来なかつた）して、私は再び天井を見上げた。その時私の見た物は私を狼狽させ驚愕せしめた。振子の振幅の大きさは約一碼増して居た。從つてその速力もそれに應じて速くなつてゐた。然し特に私を感亂させた事は、それが明らかに下へ降

つて來つゝあると言ふ事實であつた。而もその振子の末端が半月形に上向に反返へつたギラギラする刃鋼で作られてゐて、半月の尖端から尖端迄約一呎位で、その下刃が明らかに剃刀のやうに鋭かつた——のを、私は名狀しがたい恐怖を以て觀察した。その刃は強靱で分厚で形は上に行く程細くなつて上方の堅い幅廣な部分に接續してゐた。——即ち眞鍮の重々しい柄に嵌つてゐた。さうしてそれが空中を切つて往復する度にシュッシュと鋭い音を發した。

私は僧侶らしい拷問の巧みさで自分の爲に設けられた處罰が如何なるものであるか最早疑ふ餘地が無かつた。私が陥罪の存在に氣が附いたと言ふ事は既に死刑執行員達に依つて知られて居るのであつた。この陥罪——その中に陥ち込む恐怖こそ私のやうな不屈な國教忌避者に對して定められた刑罰であつた。この地獄さながらの陥罪こそ傳へるところに依れば、あらゆる責道具の中で最も辛辣な物とされて居たのである。私はこの陥罪に、たゞほんの偶然に依つて墜落する事を免れたのである。然し此に陥ち込んで苦しみ足搔く事こそ此害の様々な怪奇極る慘殺の最も主要な部分を構成してゐるものであつた。然し、此に陥入れる事に失敗したとなると、彼等惡魔の計畫は別に模様換へをしなればならなくなつたのだ。（けれど他にこれに匹敵する別法はないのだ）其處で、違つたより御手柔かな慘殺の方法を講ずるより仕方がなかつたのである。御手柔かな！ 私はこの言葉のかうした適用を想ひ出した時に、苦しみ呻きながらも半ば微笑かけたのであつた。

次第に押迫つて來る振子の刃鋼を待ちながら死ぬその事よりも遙に恐しい永い永い時間をどうして



堪へたかは此處に書いても致し方ないのである。それは漸く気が付く位に一寸一寸、一厘一厘と、永い歲月とも思はれる間を置いて、而も絶えず下へ下へと降りて来るのだ。そのヒリヒリする刃の風を切る煽りが私の身近に迫つて来るまでには——何日か過ぎた。いや夥しい月日が過ぎ去つたやうに思はれた。やがて鋭い鋼鐵の臭氣が私の鼻孔に滲み込んで来た。私は祈つた。——もつともつと速く下りて来るやうにとひたすら祈る事によつて私は神様を惱ましたことであらう。私は熱病患者のやうにいきり立つて、その怖ろしい偃月刀の軌道へ自分自身を押し上げようと悶搔いた。然しまた不意に氣落ちがして靜かにそのピカピカする死を見ながら微笑を洩した。——恰度子供がピカピカする玩具を見てするやうに。

續いて、全く意識不明の間があつた。それは短かつた。と言ふのは私が氣が付いた時は振り子は先刻の位置から目立つほど未だ下つてゐなかつたからである。然しそれは長かつたかも知れない。私が氣を失つたのを見付けた僧侶が居て、勝手に振り子の運動を止めることは有得ることであつた。正氣付いてから私はまた、著しく名狀し難い程、身體が弱り切つて仕舞つて、まるでがつくりと志が虚脱してゐるやうに感じた。此やうな苦惱の中にあつても人間の本能は食物を求めた。私は苦しい努力を以て、革紐の許す限り左手を伸した。さうして鼠共の喰ひ荒した殘物を手に取つた。それを口に押し込めながら私はふと、充分纏らないある考が——悦びのやうなまた希望のやうなものが——腦裡を掠めたやうに思つた。それは纏りの付いてゐない考の影であつた。よく多く人の經驗するやうなあの

完成してゐないものであつた。私はそれが悦びのやうな希望のやうなものであつたと思つた。しかし同時にそれが形を取らないで死んで仕舞つたことを感じた。私はそれを思ひ出し、完成しようと幾度も無駄な努力をした。私の人並な思考力は長い間の受難の爲にことごとく失はれてゐた。私は精神虚弱者になつてゐた。——白痴であつた。

振り子の揺れる方向は恰度私の體と直角をなしてゐた。その半月刀は私の胸部を横切るやうに計畫された物らしかつた。それは先づ私の衣服のサーヂを一摺、擦つて毛は立てる。さうしてその作用を繰り返して行く——二回——三回と。その巨大な振幅（三十呎を超すかと思はれる）と風を切る素晴らしい重壓の力は鐵壁をも切り裂くに充分であるが數分の間は、そのやる仕事は單に私の着物を掠つて精々毛は立てるに過ぎないのだ。此處まで考へて來て私は停まつた。この考より先きには敢へて進めなかつた。私はこの點に執拗に注意を集中させた。あたかも、其處に停つてひると、半月刀の下降も其處で停めることが出来るかのやうに。

私はその刃鋼が自分の着物を切る時の音を強ひて考へる事に努めた。——着物を磨擦する時の變なぞくぞくするやうな感覺を一生懸命に考へて見た。私はこんな馬鹿げた些事の妄想に、齒の根がガクガクするまで没頭してゐた。

下へ下へ、確實に滑つて來るのだ。私は振り子の横の速さと縦の速さとの對照に狂熱的な興味を感じ出した。右へ左へ。それは幅廣く惡鬼の叫喚を擧げながら往復する！ 下へ、下へ、それは、虎の忍



び足をもつて、私の心臓へ降りて来る！ 私は両方の考へが代る代る頭を擡げる度に笑つたり咆えた  
りした。

下へ下へ、狂ひなく容赦なく下つて来るのだ。それは私の胸から三時の範圍を往復してゐた。私  
は猛烈に——狂暴に——左腕を自由にしようと思つた。けれど左腕はたゞ肘から手頸までしか自由が  
利かなかつた。非常な努力をして側の皿から自分の口まで——もうそれ以上は駄目であつた——動か  
す事が出来たに過ぎなかつた。私が若し肘の縛を切る事が出来たらば、直様振子に捉まつてそれを停  
めようとしたであらう。それは、まるで雪崩を空手で抑へようとするやうなものではあつたが。

下へ下へ、止む事なく、必然的に下へ。私は一面の振幅毎に喘いで悶搔いた。その往復毎に痙攣的  
に縮こまつた。左右に上下する刃渡りを私は絶望の極の全く無意味な熱心さを以つて見送つてゐた。  
その時の自分にとつて死の方が、どれだけ安樂であるかは言ふも愚な事であるが、それでも、私はそ  
の刃鋼が戻つて来る毎に反射的に眼を閉ぢた。然し、如何に緩慢な動作でも、やがては自分の胸にそ  
のヒリヒリする鋭い刃を打込んで来るだらうと思ふと身體中の神経がことごとく慄へた。神経を慄は  
せ五體を竦まさせたものは然し「希望」であつた。正に「希望」であつた。拷問に於ける勝利の希望  
——宗教斷罪所の 窖に於いてもなほ死刑囚の耳に囁かれる希望であつた。

もう十回乃至十二回振動すると振子の刃は必ず、私の着物に觸れると言ふ事が分つた。此が分る  
と、私の精神の上に突然、切つば詰つた鋭い凝集した沈着が訪れつて来た。私は、何時間か或は何日

かの間、今初めて眞實に「考へた」のである。私を縛りつけてゐる革紐、即ち馬の下腹帯らしい物は  
一筋のものであると言ふことに氣が付いたのである。私は數本の索で縛られてゐるのではなかつた。  
あの剃刀のやうな半月の刃が革紐の何處か一個所を切るならば、私は左手で體から全部解いて了ふ事  
が出来ると譯であつた。然しかうなつて見ると、刃鋼の押し迫つて来るのが如何に怖ろしいものであつ  
たらう。一寸身動きした結果が如何に決定的なものであらう。更に、また拷問鬼らの嬖人らが豫め  
こんな事は氣が付いて居て何か脱目ない仕組になつてゐないであらうか。幸に振子の軌道の所へ胸  
の繩目が来てゐるであらうか——私は自分の微かな、最後と思はれる望みが一堪りもなく打倒される  
事を怖れながら、胸の邊をハッキリ見渡す爲に首を持ち上げた。革紐は足から手から身體中何處も彼  
處も縛り付けてあつた。——たゞ一個所即ち胸、恰度あの殺戮の刃の通り路を除いて。

私が、がつくりと元の位置に首を下すや否やあの考へ——先刻、焼付くやうな層の間に食物を押  
込んだ時、その一部分が朦朧と浮んで来た、さうしてたゞ形のない考への影と言ふより表はしやうの  
なかつたあの救ひの考へ——突然私の頭に閃めいて来たのである。その考への全體の容が現れて來  
た。弱々しい、正氣とも思へないし確實とも思へないが、ともかくも全體が現れて来たのである。私  
は直ちに必死的な最後の力を以て、その考への遂行に取り掛つたのである。

私の横つてゐる低い臺架のすぐ近くに何時間も鼠共が群つてゐた。彼等は獷猛で、不敵貪婪であ  
つた。彼等の赤い眼は私が動かなくなりさへすれば忽ち體に食ひ付かうとして私を凝視してゐた。



「一體此双等が陥井戸の中で食ひつけてゐる食物は何だらう。」と私は思った。

私が如何に苦心して追拂つても、彼等は皿の食物を僅かに残したきり殆んど食ひ荒して仕舞つた。結局私はたゞ習慣的に皿の附近に手を上下させてるに過ぎなかつた。全く効果のない單調な無意識な運動になつて仕舞つてゐた。彼等は辛抱出来かねて、屢々私の指先にその鋭い齒をつき立てた。私は皿に残つてゐた匂の強い脂身の切れ片を取上げて、手の届く限り革紐に所かまはず、擦すり付けて見た。これが濟むと今度は床から手を引込めて息も吐かずにちつとしてゐた。

最初、この貪慾な動物共はあまり様子が酷く變つたのでつまり手の上下運動が突然止つたので、やや度膽を抜かれた形であつた。彼等は怖れをなして逡巡いだ。多くの者は陥穽の方へ走り去つた。然し此は一瞬間であつた。彼等は何時まで空しく堪へてゐなかつた。私がいよいよ動かないと見究めると、彼等の仲間の最も大膽な奴が一、二匹、棗架の上に跳び上つて来て革紐を嗅ぎ始めた。これが言はば總動員の合圖のやうなものであつた。陥井戸から夥しい新手が群がつて来た。彼等は臺架を攀ち、それを越えて何百匹となく私の體の上に群がつた。振子の一定された運動は彼等の邪魔には少しもならなかつた。彼等はその軌道を除けながら脂身を擦込んだ革紐に夢中になつてたかつてゐた。彼等はのし掛つて来た——刻々に増して来る團塊となつて密集して来た。彼等は喉元で振くれた。彼等の口が私の唇を探つた。私はその集團の重力で息が詰りさうになつた。この世で何とも名づけやうのない無氣味さで胸がむかつて来た。その重々しい濕つばい感觸が私の心臓を凍らせた。と思つ

てゐる中に忽ち索目の緩みかけたのを感じた。然し一ヶ所では心許ない、他の部分に於いてもきつと活動してゐるにちがひないと考へて人間の忍び得ない決意をもつて堪へた。

私の觀測に間違ひはなかつた辛抱は決して徒勞でなかつた。私は遂々「自由」になつた。革紐は切れ切れになつて體から解れ下つた。然し、既に振子の刃は胸許を掠りつゝあつた。それは衣服のサーヂを切り裂いてゐた。下衣のリンネルにも食ひ込んで来てゐた。もの二振、動いたなら、鋭い痛みが全身に傳つたであらう。けれど身を交す瞬間が来てゐた。私が手を一振り振ると私の救助者達は崩をなして逃げて行つた。私は周到な、狂ひのない、落着いた一動作をもつて斜に體をそらした、——と忽ち私は紐の不縛と假日刀の刃を滑り抜けた。此瞬間私は全く自由であつた。

自由！ さうして再び、宗教斷罪所の手中に陥ちた！ 私が恐怖の臺架から足を踏み出したかと思ふ途端、地獄の機械の運動がピタリと止つた。さうしてそれが目に見えない力でスルスルと引上げられて天井から見えなくなつた。疑もなく、私の一舉一動が注視されてゐたのだ。自由！——私がただ一つの苦難に於いて死を迫れたのは、死者者よりも一層悪い他の種類の苦難に渡された爲に過ぎないのだ。かう思ひながら私は神経質に自分を取圍んでゐる鐵板の壁を改めて見廻した。竝々ならぬ變化——初めは明かに認めることは出来なかつたがともかくもある變化が起つたことは確であつた。私は數十分は夢見るやうな動搖する放心状態で辻褃の合ない推測に耽つてゐた。この間に響を照し出してゐる硫黄色の光線は壁の罅の罅隙から洩れて来るものであることを初めて發見した。その罅隙



幅さ約半吋位で壁の裾に沿うて、窖を一週してゐた。壁は全く床から分離してゐるやうに見えた。また事實さうであつた。私はその罅隙から覗き込まうと努めて見たが何も分らなかつた。覗き込むのを止めて立ち上つて見ると、この部屋の變化の神祕が、突然、理解された。壁上の種々なる形相の輪郭は明瞭であるがその色彩は褪せて呆けてゐるやうに見えたと前に言つて置いたが、その色彩が、明らかに成り出した。刻々にハッキリと驚く程鮮やかな光輝を帯びて來た。さうして幽靈のやうなまた悪鬼のやうな異形の者の影は、私程神経の弱つてゐない人でも竦とする程、妖しい姿を現して來るのであつた。前にも何も見えなかつた總ゆる方角から悪鬼の眼が兇暴な妖怪めいた生氣を帯びて私を睨め付けてゐた。其爛々たる凄愴な光はどうしても偽物とは想はれなかつた。偽物どころか、息をする度に鐵板の焼ける熱氣がムウツと鼻孔を襲つて來た。窒息するやうな臭氣が窖に満ち溢れた。一分毎に鮮さを増して來る眼の輝きが私の呻きを、凝視してゐた。血の恐怖を描いた畫像に、點じられた紅色が、いよいよ強度を高めて來た。私は喘いだ。一息毎に悶搔いた。拷問者の奸計だ、最も辛辣な!! 人間の中で最も惡魔的な!!

私は焼けてゐる鐵板から思はず中央に退いた。襲ひ掛る熱火の死を考へると、陷井戸の冷たさが、この上もない惠のやうに思はれて來た。私はその怖ろしい縁に走り寄つた。私は目を瞠つた。燃えてゐる天井の照返して井戸の奥の隅々まで明るくなつてゐた。それを覗いた凄慘な一瞬間、私の靈は私の見たものの意味を了解しようとはしなかつた。然し遂に強制された。其光景は飽くまでも私の精

神の中にそれ自身を掘ち込んで來た。私の慄く理性の上にそれ自身を焼付けた。「おお——」たゞ一聲さう叫ぶことが出來た。たゞこれ以外の怖れなら如何なるものでも堪へよう——然しこれだけは駄目だ。私は甲走つた叫喚と共に一跳びに縁から退いた。さうして激しく泣きながら兩手の中に顔を蔽した。熱さは急速に廻つて來た。私は瘧のやうに痙攣しながら顔を上げた。牢獄の中では二度目の變化が起つてゐた。さうして今度はその變化は明らかに「形體」の上で起つて來た。初めの中は例によつて何か起りつゝあるかいくら見ても分らなかつたが、やがてそれはハッキリして來た。宗教斷罪所の復讐は、私が二度も旨く逃れて來たので、いよいよ決定的になつて來た。もはや恐怖の王様と戯れてゐることは許されなかつた。この窖は四角形であつた。然し今や鐵壁の相對する二角が銳角になつて來た。従つて他の二角が鈍角になつた。この怖ろしい變化は、鷹臼を引摺るやうな低い、呻くやうな音と共に次第に急激になつて、瞬間に牢獄全體が菱形に歪んで來た。而もその變化は依然として繼續した。——私にはそれを止める如何なる工夫も望みもなかつた。その灼熱した鐵壁に永遠の平和の經帷子であるかのやうに兩脇から挫き潰されることが出來るのだ。「死だ!」と私は言つた。「陷井以外のどんな死でも——」

然し、何と言ふ愚かな私だ! この井戸の中に陥し込むことが、この焼けた鐵板その者の目的だと言ふ事を想ひ得なかつたのであらうか。どうして私がその熱氣に抵抗するのだ。また、たとへ熱に堪へたとしても壓力をどうするのだ。菱形は今はもう、思ひ惑つてる餘裕がないまでに急激に刻々と扁



平になつて来た。その中央、従つて一番廣い處は大きく開かれた深淵の上に外ならなかつた。私は  
憐れとして身を退いた。けれど後から迫つて来る壁が撥返すやうに私を突き出した。私の萎縮した振  
れた體を保つ爲に、堅い床の上には最早一吋の足場も無くなりかゝつてゐた。私は悶搔くの止め  
た。然し、私は全靈の苦惱をたゞ一つの高い、長い最後の絶望の悲鳴に籠めて打ち上げた。私は縁の  
上によろめきかゝつた。私は目を背した。

人間のガヤガヤ言ふ聲が聞えて来た。多くの喇叭の音とも思はれる高らかな響が起つた。續いて數  
千の雷光が一時に軌み合ふやうな鋭い音がした。灼熱の鐵壁が突然退いた。氣を失つて深淵の中へよ  
ろけ込まうとする自分を一つの擴げた腕が抱きすくめた。それはラサアル將軍の腕であつた。フラン  
ス軍がトレエドを占領したのであつた。宗教斷罪所は其敵の手中に陥つたのである。

—終—

### 赤き死の假面

## 赤き死の假面

かの「赤き死」は永い事、國中を食り食つた。これほど決定的に死ぬ、これほど忌はしい流行病が  
またとあつたらうか。血の赤さと恐怖——血こそこの疫の化身でありその印鑑であつた。先づ鋭い苦  
痛がして、引續いて急激な眩暈を感じ、やがて毛孔から夥しい血を噴き出して死んで仕舞ふのであ  
る。患者の身體、殊に顔面に眞紅の斑點があらはれるのであるが、これがこの疫の兆候で、かうなる  
と最早、人々の同情も看護も絶對に得られなくなるのである。發病、昂進、死亡、これが全部でも  
の半時と經たない間に過ぎてしまふのである。

然し、プロスベロ公は幸運で放膽で而も聰明であつた。公の所領地の住民がいよいよ半數ほどに減  
つてしまふと公は、宮廷の騎士や淑女の間から千人ほどの壯健で陽氣な連中を呼び出して彼等と共に  
城砦風の僧院の奥深くに隠遁してしまつた。

この僧院は廣く宏大ですべて公自身の風變りな而も壯麗な興味から創られたものであつた。僧院を  
繞るものは強くて高い城壁であつた。これには鐵の城門が付いてゐた。家臣達がすべて這入つてしま  
ふと熔鑪と巨大な鐵槌とを持つて来て、門を焼きつけてしまつた。内部から失望の、或は狂氣の居  
堪らない衝動が起つても絶對に出入の道を封じようと彼らは決心したが爲であつた。僧院には食料が



豊富に用意されてあつた。このやうに周到な準備が出来たので宮人達は最早かの傳染病を何ら憚るに及ばなかつた。外部の世界はなるがままになれ。それらを悲しみ、心勞することは愚かしいことであつた。公は娯樂のあらゆる設備を整へた。道化師もあつた。即興詩人もあつた。バレエの踊りにも樂人もあつた。美人も居れば酒もあつた。すべて此等の物と安全とが内部にみちてあつた。然し外部には「赤き死」が満ちてあつた。

此處に隱遁してから五六ヶ月目の終り近く、外界ではかの流行病はいよいよ猖獗を極めつゝあつた頃、プロスベロ公は彼の千人の友達を世にも風變りな一大假面舞踏會に招待したのであつた。

その舞踏會は實にきらびやかに艶かしいものであつた。先づその會場の結構を言ふならば、いづれも善美を盡した七つの部屋から成りたつてあつた。世の常の宮殿ならば、このやうな居間はすべて長い眞直な通景をなして、部屋の兩端の開扉がするすると殆んど壁際まで引かれるから全景の見通しが自由利くやうに作られてあるのである。

ところが何事にも偏奇なものを愛せらるるプロスベロ公の性向からも察せられるやうに此處では様子が全く異つてあつた。各室がどれもこれも不規則に作られてあるので一時に一室しか見る事が出来ないのである。二十碼か三十碼毎に急な曲り角があつて、而も曲る度毎に人々は新奇な結構に出會するのである。部屋の左右兩側の壁の眞中にはゴシック風の窓が、曲り紆つた各部屋に添うた狭い廊下に向つて開いてあつた。其窓の焼付硝子は各部屋の裝飾の基調となつてある色彩に應じてそれぞれ變化

してあつた。例へば東端れの部屋には青い掛毛氈が掛つてあつた。さうするとその窓硝子は目の醒めるやうな青色であつた。その次ぎの部屋は飾付けも掛毛氈も紫色である故に、窓硝子も同様紫であつた。三番目はことごとく緑色であるから窓硝子も同じ色であつた。四番目は橙色の家具、橙色の燈であつた。五番目は白色、六番目は董色であつた。七番目の居間は天井から壁一面に黒天鷲絨の掛毛氈で覆はれ、それが更に重々しい襷を作つて同様黒天鷲絨の絨緞の上に垂れ落ちてあつた。然し此處の窓硝子の色合のみは部屋の色彩と一致してあなかつた。深紅色鮮かな滴るばかりの血の色であつた。七つの部屋の何れに於いても、此處彼處に鏤められ、或は天井から吊された金色の飾付の中にはランプや燭臺らしいものは一つも無かつた。各部屋にはランプや蠟燭から發する光は少しも見えなかつた。然しながらその部屋部屋を周る廊下にはそれぞれの窓に向つて焰の鉢を載せた重たげな三脚架が据ゑられあつた。その焰が窓の色硝子を透かして、部屋中をきらきらと照らした。

このやうにして幾多の華美な夢幻的な光景を作り出した。だが、とりわけ西端の、眞黒な部屋では血色の窓硝子を透かして暗い掛毛氈の上に落ちる灯影は極めて怪奇なるものであつた。爲に其處に這入つて來る者の顔は世にも不氣味に照らし出されるので思ひ切つて足を踏込む程大膽な人は殆んど無かつた。

この部屋にはまた巨大な黒檀の時計が西側の壁に掛けられてあつた。振り子は鈍い、重々しい、單調な響を刻んで左右に揺れてあつた。長針が一周りして、時を打つ際には、その眞鍮の肺臓から、實に明



かな、高い、深い、而も極めて音楽的な響が聞えて来るのであつた。けれど餘りにも不思議な調子と力の籠められた音であるが爲、オーケストラの音楽師達は一時間を経る毎に、彈奏の最中であつてもしばし手を休めて吾知らずその音色に聽入る程であつた。従つてワルツを踊る人たちも已むなく一寸足を停める。かくてこの陽氣な人達の全群が暫時その調子を混亂させて仕舞ふのである。時計が鳴りひびいてゐる間はどんなに浮々した男でも顔色が蒼ざめ、年老いた沈着な人達も、幻想や沈思に心擾されたかのやうにちつと額に手を當てゝゐるのである。

この音の餘韻がすっかり消えてしまふと群衆の中に急に軽やかな笑ひが漲るのである。樂人達は互ひに顔を見合せて自分等の神經過敏や間拔さに思はず微笑してしまふのである。さうしてこの次に時計の鳴る際は、決してこんな感動は起すまいと嘔き交すかのやうであつた。

かうしてまた六十分（その間に實に三千六百秒の時が過ぎ去つてしまふ）が経つと、再び朗らかに時計が鳴り渡り、またもや前と同様な混亂と戰慄と沈思とが生じて来るのであつた。

然しそれにも拘らず、饗宴そのものは、洵に陽氣で壯なものであつた。ブロスベロ公の趣味は獨特のもので、とりわけ色彩とその効果に就いては並々ならぬ眼識を持つてゐた。公は單なる流行の裝飾を輕蔑した。彼の計畫は放膽で猛烈で、その思ひ付きは野生的な光澤を發して煌いてゐた。公を狂人だと思ひこむ者の中にはあるだらう。けれど公を知つてゐる者はさう言ふことは感じなかつた。公の狂人でない事を確めるには、親しく公を見たり、その言を聽いたり、直接手で觸れてみたりする必要があつた。

この宴樂に當つて、七つの部屋の感動的な飾付は殆んどブロスベロ公の指圖に依るものであつた。假面者たちにそれぞれ與へられた役割も公自身の趣味を基調としたものであつた。それらはすべて怪異な姿であつた。閃光、耀爛、奇矯、幻酔——かのエルナニの物語以來の多くのものが滿ち溢れてゐた。不似合な四肢と異形な裝束をもつたアラビヤ風の姿もあつた。氣狂ひのみが考へ出し得るやうな讒言めいた着想もあつた。艶美なるもの、淫蕩なるもの、怪異なるもの等數多くあつたが、中には鬼氣とするやうなもの、時には思はず面をそむきたいほど嫌惡を起させるものもあつた。このやうに七つの部屋の此處彼處に、數知れぬ夢が徘徊してゐた。此等の人たち——夢さながらの人たち——は各部屋のそれぞれの光を身に映しながら前後左右に纏れあつてゐた。オーケストラの放埒な樂の音さへも自分達の聲音であるかのやうに思はせた。

やがてまもなく、例の天鵞絨の部屋にある黒檀の時計が鳴り出すのである。すると總てが、ほんの一瞬間であるが、しんと靜り返へる。時計を除いてすべてが音に潛める夢の影はその位置にそのまま、堅く凍りついてしまふ。しかし時を告げる音はすぐ消えてゆく。それはほんの一瞬時しか續かない。その途端、輕やかな、半押殺したやうな一つの笑聲が、消えて行つた時計の音を追ひかけるかのやうに、聞えて來るのである。すると音樂は忽ち勢を盛返へして來て夢も再び甦る。さうして彼らは三脚架の焰が色とりどりの窓硝子を透して投込む光りを身に閃かせながら、今までよりも、もつと



陽氣に前後左右に身を紆らし纏れ合ふのである。然し七つの部屋の一番西端れの居間には誰一人今では這入らうと企てる者はなかつた。何故ならば、夜も漸く更けて來たしそれにかの血色の窓硝子を透して流込む光の赤さがいよいよ冴えて來たからである。掛毛氈の一層深み行く黒さは人の魂をびくつかせた。此處の眞黒な絨緞の上に足を落した者には、遠くの他の部屋部屋で陽氣な噪宴に溺れた連中に聞えてくる如何なる物音よりも、一層森嚴な、いよく調子の籠つた時計の響が身近に聞えて來るのであつた。

然し他の部屋は、どれもこれも群衆に満ち溢れてゐた。其等の部屋には熱苦しいまでに旺んに生の心臓が波打つてゐた。かうして宴樂は狂ほしく旋轉して行つた。が、やがて、遂々、眞夜中を知らせる時刻がやつて來た。音樂は止んだ。ワルツの踊り手たちはびつたり出足を止められた。再び不安な靜止が萬物の上に押し擴がった。時計の鐘は愈々十二時を打ち出した。さうして、噪き抜いた人たちの間にも多少思慮深い者たちは時計の響がいつもより一層長い爲、それだけ深く考へ込むやうな結果になつた。さうして最後の響の最後の全韻がまだ全く沈黙の中に消え切つてしまはない中に、未だ誰一人としてその存在に氣がつかなくなかつた假面者が一人彼らの間に雜つてゐるのを發見したのである。忽ちこの新しい闖入者に就いての嘯が風のやうに傳はつた。さうして、非難や驚愕を、いや遂には恐怖や嫌惡をあらはす吐きや嘆息が全群に湧き始めた。

かうした風變りな遊宴では、考へるまでもなく、竝大抵の風體では到底これほどの驚駭を惹起す筈はないのである。實際此夜の假裝はどんなに放逸異形なものでも殆んど制限がなかつた。それにも拘らずこの問題の人間の風體は全然頭角を抜き出して、すつかり他の者の鼻を明してゐた。當のブロスベロ公自身の無際限な奇裝すら遙かに顔負けがしてゐた。どんな不敵な者の心にも觸れると必ず感動を惹き起す琴線がある。生も死も同じやうに、ほんの冗談としか考へないやうな無感情の男にも、決して冗談ではすまない事があるのである。人々は、この闖入者の服裝にも態度にも、何ら明るい機轉もなく、また禮法に應つた所もないのに深く胸を衝かれた。

此者は脊がひよる高く瘦せ枯れてゐて全身隈なく墓場の衣裳を纏うてゐた。顔を蔽した假面は、如何に丹念に調べても容易にその偽りである事がわからぬ程、硬ばつた屍の相貌に酷似してゐた。だがこれらは總て、その邊を噪き廻つてゐる連中から、たとへ賞められないにしても、我慢してやらうと思はれたかも知らない。ところがこれは「赤き死」の姿を眞似たものだと言ふ噂が擴がるまでになつた。彼の衣裳は血で濡れてゐた。——さうして額には點々と眞紅の恐怖が一面に撒きちらされてゐるのだ。

この亡靈めいた者——彼はその役割を更に心ゆくまでやつて退けようとするかのやうに、寂然たる嚴な態度でワルツを踊る者達の間をあらゆる縫うて歩くのであつた——その姿に目を止めたブロスベロ公は恐怖と嫌惡の激情に痙攣してゐる様子であつた。だが、次の瞬間、公の額は憤怒の爲に赤色を呈して來た。



プロスベロ公は、噎れた聲で身近に居た侍臣に命じた。

「何物だ！ 何者が、敢へてかくも冒瀆な振舞で、余に侮辱するのだ。引捉へて假面を剥取れ！ 余は朝になつたら城壁から吊首にしてやる奴の顔を見て置きたいのだ！」

プロスベロ公がかう叫んだのは、東側の、即ち青色の居間に於いてであつた。此等の言葉は——公は度胸骨の太い、頑丈作りの方であつたから——七つの部屋全部を貫ぬいて隅々まで、はつきりと高らかに鳴り響いた。さうして樂の音も公の手の一振りでもびたりと靜肅に立ち返つた。

公は蒼ざめた侍臣の一群に取巻かれて青色の部屋に立つてゐた。初め公が言葉を發した時、この一團は闖入者の方に思はず二三歩進みかけた。と言ふのは、その時でもかなり手近にゐたかの怪しい者が今や發言者の方へ、飽までも落着いた堂々たる歩調で一層身近に迫つてた事だからである。然し、此假面舞踊者に就いての狂ほしい推測に依つて深められた何とも名状しがたい一種の恐怖から、誰一人進んでこれを捉へようとする者は無かつた。従つて怪物は何ら碍げられること無しに、既にプロスベロ公の身邊一碼の處へ迫つて來た、しかし全會衆は殆んど唯一つの衝動に押されたかのやうに室の中央から壁際まで縮み退つた。彼は依然として碍げられずに、最初から彼の特徴であつた例の森嚴な、整然たる足並で、青の部屋から紫へ——紫から緑へ——緑から橙色へ、——オレンジから白へ、——白から遂々董色まで、何人も彼を捉へんとする決然たる行動をしない中に悠然と通り抜けて來てしまつたのである。恰度、此時、プロスベロ公は、激怒と、たとへ一時にもしろ後退りをした自

らの臆病風に對する羞恥心から氣狂ひのやうに猛りたつて、まつしぐらに六つの部屋を突き抜けて行

た。然し、今や全群を支配した慄然たる恐怖感の爲、何人もこれに續く者は無かつた。公は拔身の短劍を頭高に振つて、息をも吐かず、性急に、後退りする怪影の三四呎側まで押し迫つた。この異形の者は天鷲絨の部屋の最端まで押詰められると突然向を變へて公に對抗した。忽ち鋭い叫びが聞えた。すると短劍が煌きながら黒貂の敷物に舞ひ落ちて來たかと思ふと引續いて屍にな

つたプロスベロ公の五體も、うつぶせに倒れ落ちた。かうなると饗宴者たちも死物狂ひの勇氣を振起して、一氣に、眞黒な部屋へ駆け込まねばならなかつた。さうして黒檀の時計の陰影に、まつすぐ身動きもせず立つてゐたひよる長い假面の男を引捉へて、荒々しくその經帷子や死相の假面を剥してみると、その男を形作つてゐた物は、これと言つて手に觸れ得ない只の空つばである事を知つて、人々は一言も發し得ない戰慄に襲はれた。

これこそ「赤き死」であると言ふ事が遂々認められるに到つた。彼は夜盜のやうに忍び這入つて來たのだ。饗宴者は一人一人相次いで、血汐に濡れた歡樂の床に仆れた。さうして斷末魔の悶搔をしてそのまゝ息絶えて行つた。かの黒檀の時計の刻も遊宴者の最後の一人が息を引取ると共に止んだ。三脚架の焰も消えた。さうして闇黒と頽廢と「赤き死」とが恣ままに、萬物の上に跳梁した。

——終——



# 黒猫譚

私がこれから書き綴らうとするのは、世にも不気味な、而も極めてありきたりな物語であるが、私は讀者にそれを信じて貰ふこと、を豫期しもしなければ歎願もしない。かう言ふ私自身の反感すらが吾れと吾が經驗を信じようとはしないのだから、他人にこれを強ふるのは狂氣の沙汰であるかも知れない。然し私は狂人でもなければ、夢みてゐるのでもない。唯、明日死ぬべき身の私は今日こそ懺悔をして、魂の重荷を軽くしたいと思ふのである。私の直接の願ひは、單なる家庭の出來事を發端から終結まで率直に手短かに註釋なしに世の中に曝け出したいと言ふに過ぎない。その出來事は私をして恐怖せしめ、懊惱せしめ、遂に破滅せしめるに到つた。然し私はその出來事を説明しようとは思はない。何故ならばそれは私にとつてたゞ一途に恐怖そのものである。後になつて頭の良い人たちが私の幻想を日常茶飯事と見做すかも知れない。もつと落着いてゐて論理的でさうしてたやすく物に激しない人たちが出て、私が怖しさに驅られてかきつゞる物語をたゞありきたりの原因結果の月並な連鎖に過ぎないと言ふかも知れない。

私は小さい時から素直で憐み深い性質をもつてゐた。私の心根のやさしさは却つてそれが仲間の嘲笑の種となる程際立つてゐた。とりわけ動物が好きで兩親に甘へては種々様々の生物を飼ふことを許

された。私はこれらの生物と終日遊びくらした。私は彼等に餌をやつたり撫つてやつたりする時ほど幸福なことはなかつた。この性質は年齢と共に激しくなつて行つた。成人してからはこれが、唯一の娛樂のやうであつた。忠實で伶俐な犬を愛育したことのある人達に向つて私は、さうして得られた楽しみや強度がどんなものか今さら説明する必要もあるまい。單なる「人間」の絲遊のやうな信實や御座なりの友情を、ふんだんに味つた人たちは、けだもの、忘我的な獻身的な愛情の中になにかいんと胸に徹へるものを感じる筈である。

私は早婚であつた。さうして幸にも妻の心根は私の性向と相和するものをもつてゐた。私が一方ならず動物を愛するのをみてとつて妻は、機會ある毎に最も好ましい生物を手に入れて來た。鳥類、金魚、犬、兎、小猿、それから「猫」を私達は飼つた。この猫と言ふのが非常に大きく美しく全身漆黒で怖しいまでに伶俐であつた。この猫の賢さといふ點になると日頃迷信などを信ずる氣質でない私の妻も、昔から言ひ古された猫は魔法使の化身——と、言ふ傳説にしばしば言及するほどであつた。もとより妻がこんな事を眞面目に信じてゐた譯ではない。私といへどこゝでたまたま思ひ出したから書いてみたまでの事である。

ブルトウ（陰腐の神）——これが猫の名であつた——は私の心をこめての愛物であり親友であつた。彼に食物をやるのはいつも私で、彼も亦家中どこでも私のゆく先々に付き纏うた。私が街へ出ようとする時でもついて來ようとするのだが、これを追ひ返すのは生やさしい事ではなかつた。







ところではなからうか。たゞ犯してはならぬ事を知つてゐる爲にわざわざその「律法」を理性に逆らつて犯して見たい氣持を経験しないだらうか。

このひねくれた天邪鬼な氣持ちこそ、前にも言つたとほり私を全く破滅させてしまつたのである。自らの魂を虐げてみたい氣持ち、吾とわが本性に暴虐を加へて見たい、たゞ惡なる故に惡をして見たいと言ふ測りがたい心のあこがれ、——それがたうとう私を驅つてこの從順なけものにこれまで加へて來た危害を更に引續いて完成させて仕舞つたのである。ある朝、酷くも私は猫の首に索の輪をひつけて、木の枝に吊した。心に激しい悔恨の痛みを感じ、涙を流しつゝも、私はそれを縊り殺してしまつた。——たゞ彼が私を愛してゐたことを知つてゐたが故に、彼は私に對して殺すべき何の理由をも與へなかつたが故に彼を縊り殺したのである。さうする事が正しく罪であり、こよなく恵み深く、畏るべき天帝の限りなき憐れさへ届かぬ地球に自分の魂を投げ出すべき、萬死に相當する罪を犯すことになるを知つてゐた爲にわざわざ縊り殺したのである。

この酷い行ひの果たされたその日、夜も開けて、私は火事と言ふ魂消る叫びに眠をさまされた。私の寢臺の帷がめらめらと炎え最早家中一面火を被つてゐた。私と妻と召使とが、やつとの事で焰をくぐつて遁れ出た。が家は丸焼けになつた。私の全財産はことごとく烏有に歸した。それで私はいよいよ自暴に身を持ち崩した。

私は自分の慘虐な行爲と火事とを因果律で結びつける程心弱いものではない。だが私は事件の連鎖

を詳しく話してゐるのである。私はその一鎖をも不完全に残しては置きたくない。その火事の次の日、私は焼跡を訪れた。たゞ一個所を除いて壁はすべて焼け落ちてゐた。この個所は家の中程にある餘り厚くない仕切壁であつた。私の寢臺の頭の方はこの壁に向つてゐた。此處の漆喰だけが火勢にかくも頑強に抵抗したのであるが、私はこれは最近此處が塗り換へられたといふ事實に歸した。この壁の周圍には眞黒に人群りがして多くの人々が非常に綿密にまた容易ならぬ熱心さをもつてその特別な部分を調べてゐるやうであつた。

「變だね。」「奇妙だ。」或はそれと同意義な言葉がしきりにとり交されてゐるので私も遂に好奇心を唆られた。私は壁際に近寄つた。ところが眞白な壁の上に来るで薄肉彫でもあるかのやうに浮き出でゐる巨大な猫の形を見たのである。その姿は誠に驚くばかり雋永に描き出されてゐた。さうして索ま

でがその頭に附いてゐるのではないか。この幽霊——さうとしか思へない——を見た時の最初の私の驚きと怖れは非常なものであつた。がいろいろ考へてやつと心を鎮めた。想ひ出して見ると猫を吊したのはこの家に近接してゐる庭園であつた。火事の報らせでこの庭園はすぐに群集で一杯になつた。この群集の中の誰か、猫を木から引ずりおろして開け放しの窓から私の部屋の中に抛り込んだのに違ひない。これは多分眠つてゐる私を起す目的でやつたものと思はれる。そこへ他の側の壁が倒れて來てこの猫の死骸を、塗りたての漆喰にめり込ませてしまつたのであらう。その壁の石灰が焰と死骸のアンモニヤとに作用されて今見るが如き



畫像を完成するに到つたものであらう。

かくて私は此處に詳述したやうな驚くべき事實に就いて、私の良心は、ともかくも、理性だけは納得させる説明を樂々と作り上げはしたが腦裡に寫しこまれた印象は依然として消ゆるべくもなかつた。數ヶ月の間、私は猫の幻から逃れることができなかった。その間悔恨に似た——けれどさうではなかつた——一種の感情が胸の中に湧くやうになつた。かくて猫を失つたことを心さびしく感ずるやうにもなつた。今では病み付きとなつてしまつた。魔窟の中にゐても前の猫に代るべき、似たやうな恰好の猫を探すやうな心にさへなつた。

ある夜穢れた魔窟の中で酔ひ痴れてゐた時、ジン酒か、ラム酒かの、とにかくその部屋的主要な家具をなしてゐるところの巨大な酒樽の上に載つかつてゐる何やら黒いものが突然私の醉眼に映じた。私はしばらくこの酒樽のてつべんを覗めてゐた筈である。然し、不思議でならなかつたことは、その時までどうしてこの黒いものに、氣が付かなかつたかと言ふ事であつた。私は近付いていつた。手で觸つて見た。それは一匹の黒猫であつた。非常に大きい奴で、丁度ブルトウと同じ位であつた。見れば見る程ブルトウによく似てゐた。只一個所違つてゐた。ブルトウは斑の何處の部分にも白い毛は一本もなかつた。然し今度の猫ははつきりとはしないけれど白いぶちが殆んど胸許全體を覆うてゐた。私が觸ると、猫はいきなり起き上つてゴロゴロと喉を鳴らしながら體を私の手に擦り付けて來た。私に見付けられたのをひどく悦ぶかのやうに見えた。これこそ私の註文通りの猫であつた。私は直ぐ

に酒場の主人からそれを買ひ取らうとした。けれど主人はその猫は自分のものではないし、また見知り越しのものでもないし今見るのが初めてだと言ふのであつた。

私はなほも猫を靜かに撫でてやつた。私が歸へらうとすると従いて來たさうな氣振を示した。私は猫のするまゝに任せた。私は時折躡んでは彼を撫でてやつた。家に着くと、猫はそのまゝ居付いてしまつて、すぐと私の妻の竝々ならぬお氣に入となつてしまつた。

ところが私の方はすぐにこの猫に、嫌氣がさして來た。これは私の期待したものとはまるで正反對であつたが、それがどう言ふ譯か皆目判らなかつた。只猫が私に對して愛慕の情を見せれば見せるほど胸がむかつくやうに嫌ひになつてくるのであつた。この嫌ひな煩はしい感情は次第に昂じて苦々しい憎惡に變つて行つた。私はこの猫を避けるやうになつた。羞ぢ怖れる感情と過ぎにし無殘な振舞の思出があるのでこの猫を肉體的に苛めつけることは敢へてし得なかつた。私は何週間も彼を毆ぐつたり踏み躪つたりするやうな事はなかつた。然し徐ろに實に徐ろではあるが名狀しがたき嫌惡の情が募つて來てこの嫌らしい猫の姿を見ると、私は呪はしい疫の息吹から道れでもするやうにしるび足で逃げ廻るのであつた。更にこの猫を怖れ憎む心を一層煽るに到つたのは、私が猫を連れ歸つた翌日、氣が付いて見ると、矢張りブルトウと同じくこの猫も片目が抉りとられてゐると言ふ事を發見したからであつた。だがこの事は却つて私の妻をして益々猫を愛撫せしめる機縁となつた。私の妻は前にも言つたやうに以前私の性格の特徴であり、且つ素朴で清純な幾多の樂しみの源であつたところのあの



憐み深い心を多分に持つてゐた。

ところが猫に對する私の嫌悪が次第に激しくなつて行くのに反して猫の方では愈々私に慕ひ寄るのであつた。私の足許に絡みつくその執拗さ加減は到底讀者に了解するところではない。私が腰かけてゐると、必ず猫は椅子の下に踏み込むか、或は私の膝に飛び上つて、ところ嫌はずその呪はしい體を摩りつけるのである。私が立ち上つて行かうとすると兩足の間に纏ひ付くので私は思はずよるめくのであつた。また、その長い鋭い爪を私の着物に引掛けて胸の邊まで攀つてくるのである。

こんな時、私は一撃のもとに打倒したらと思ふのだけれど、それが如何しても斷行出来ないのである。一つは以前犯した罪の記憶があるからでもあるが主なる理由は（思ひ切つて白狀してしまふが）この猫がたゞもう無性にこはかつたからである。

この恐怖はあながち身體的の危害に對する恐れでもなかつた。と言つてそれを別にはつきり定義する事も出来なかつた。かゝる事を告白するのはこの死刑囚の監房の中に居る身ですら恥しい限りである。がこの猫に對する恐怖は全く何の言はれもないたゞの妄想に依つて深められて行つたのである。妻も一再ならずこの猫の白い斑點に就いて私に話し掛けた。實際見たところではこれのみが私が前に殺した猫と異つてゐる唯一の目印であつた。讀者はこの斑點が大きくはあるけれど、もとは非常に不明瞭なものであると私の言つたのを記憶されてゐるであらう。然し、殆んど目にわからぬ程度で、且つ私の理性は長い間それを空想として極力否定して來たのであるがその斑點が日増しに明瞭な輪郭を

現して來るのであつた。その形は名を呼ぶさへ恐い物の姿であつた。その爲に私は一層この怪物を憎み怖れて若し勇氣さへあるならば一思ひに其奴を除いてしまひたいと願つたのである。

それは世にも不氣味な異形の相——絞首の首形であつた。それは恐怖と罪惡、苦痛と死の悲しくも怖しい機械の形であつた。

かうして私は今や全く慘であつた。それは只物の哀れを覺える人間としてののみじめさだけではなかつた。このけたもの——其奴の仲間を私は手もなく殺してやつたではないか——そのけたものが、至上の神の御姿に擬らへて作られた人間の私にかくも堪へがたい苦痛を與へるのに到つたのだ——ああ、私はかくて晝も夜も安らかな休息のめぐみを受けずに過ぎねばならなくなつた。晝は晝で、この猫は一瞬も私の側を離れなかつた。夜は夜で私は口に言はれぬ怖しい夢を見た。ギョツとして目をさますと顔の上には生温かい其奴の息吹がかゝつてくるのであつた。どう跳いても振り落し切れない夢魔の化身が胸板の上に無限の重さでのしかゝつてゐるのであつた。

このやうな日夜を分かたぬ責苦の下に、微かながら残つてゐた私の善良な分子さへすつかり痺れてしまつたのである。邪な考——眞暗な最も邪惡な考のみが跳梁するやうになつた。平常から氣むづかしい私の疝癢が、いよいよあらゆる物、あらゆる人間へのにくしみと昂じて行つた。とりわけかうして突發的にたゞもう行きあたりばつたり、何の抑制もなしに爆發する私の疝癢の最も頻繁な被害者は不平一つ言はぬ可哀想な私の妻であつた。彼女はいつもちつと辛抱に辛抱を重ねてゐた。



ある日、彼女は何か家事向の用で、私達が貧乏から餘儀なく住むやうになつた古い建物の穴藏まで私の後をついて降りて来た。猫も私の後からその急何な階段を降りて来たが危く私を眞逆様に突き落すところだつた。私は嚇として狂氣のやうになつた。私は斧を翳して今の日まで私の手を止めてゐたあの子供ぢみた恐怖を腹立ちのあまり打忘れていきなり猫をめぐけて打落した。實際それがそのまま行けば間違ひなく唐竹割になるところであつたが、この一撃は妻の手に依つて受け止められた。私はこの思はぬ邪魔だてに一層激昂して、悪鬼のやうに猛りたつと、抑へた妻の手から斧をぐいと引外していきなりそいつを妻の頭にめりこませた。妻は呻聲一つ立て得ずそのまゝ息絶えてしまつた。

この思はしい殺人に引續いて私は更に綿密な注意を以つて死體隠匿に取掛つた。晝でも夜でもとにかく死骸を人目にかゝらず戸外に運び出す事は到底出来さうもなかつた。様々な計畫が胸に浮んで来た。ある時は死體を細々に切り刻んで燃して仕舞はうかとも思つた。或は穴藏の床を掘り下げて其處に埋めてやらうかとも考へた。又ある時は、庭園の井戸の中に、投げ込んでやらうと思つたり、いつそ商品かなんどの體裁に箱詰にして運搬人に運び出して貰はうかとも考へたりした。だが遂々最も打つて付けの妙案に思ひ當つた。中世の僧侶が彼等の犠牲を僧院の壁の中に塗り込んだと傳へられてゐるが丁度そんな工合に妻の死體も壁に塗り籠めてやらうと決心した。

かう言ふ目的にはこの穴藏はもつて来いであつた。其處の壁は元々ぞんざいに作つてあつた上に最近粗末な漆喰を全體に塗つたばかりで且つこの穴藏の淀んだ濕氣のせゐで容易に固らなかつた。更にその壁の一つには向うに突き出した個所があつてそれは見せかけの煙突或は煖爐の爲に作られたものであるがそこは塞げられてあつて穴藏の他の部分と一見違はないやうにしてあつた。この個所の煉瓦を取り除いて其處へ死體を隠匿し、また元通りに塞いで何人の目にも怪しまれないやうにするのは易たるものであると私は信じて疑はなかつた。

さうしてこれは全く思惑どほり成功した。私は鐵挺で煉瓦を易々と取崩した。それから丹念に内側の壁に死體をたてかけて、その上に元通り煉瓦を積み上げたが一向手数はかゝらなかつた。私は灰泥、砂、毛髮等を手に入れて極めて周到な用意を以つて古い壁と區別のつかぬやうな壁土を煉上げた。さうしてこれを新しい煉瓦の上に綿密に塗り立てた。すつかり出来上つてしまふと私自らその仕上げの手際良さに満足した。壁は何處にも手を入れたやうな所は少しも無かつた。床の上に散らばつた塵屑は出来るだけ氣を付けて一つひとつ拾ひ上げた。私は勝利を感じた。これでやつと骨折の驗が見えて来たわい。私は獨言を言つた。

その次の仕事は、この惨ましい行爲の原因であるところの例の猫を探し廻る事であつた。今度こそ猫を殺さうと決心したからである。若しこの時猫の姿が目止まらうものなら其運命は知るべきであつた。而し敏感なこの獸は私の先刻の激怒に怖れをなして私の感情の和まぬ中は姿を現すまいと心をきめてゐるかのやうであつた。その嫌な猫があなくなつたのでホツとした私の深いしみじみとした嬉しさをなんと言つて告げたらよいであらう。夜になつても猫は出て来なかつた。初めて、



この家に移つてから實に初めてこの一夜を私は安らかに、ぐつすり眠ることが出来たのである。さうだ、自らの魂の上に殺人の重荷を負うてゐながらもぐつすり眠りを貪る事が出来たのである。かくて二日目も過ぎ三日目も過ぎた。が私を苛むかの猫は猶も姿を現さなかつた。私は再び元の自由な人間に立ち還つてホッと息を吐いた。怪獣は私の權幕に怖れて永久に此家から立去つたのだ！もう二度とあの猫をみる事はないのだ！私の幸福感は絶頂に達した。私の後暗い行爲はいさゝかも私の心を亂さなかつた。二三の諷刺も爲されたが容易に言ひ開きが出来た。家宅搜索も行はれた。けれど、もとより、何の手掛りも發見されなかつた。この分なら未來も安全だど私は確信した。殺人の四日目。全く不意に警官の一行がやつて来た。さうして再び屋敷内を非常な嚴密さで搜索し始めた。然し死體隱匿の場所は到底判る筈はないと言ふ自信があつたので私は何ら動搖を感じなかつた。警官は私に搜索の先々に同行を命じた。彼等はあらゆる隅々を隈なく搜した。遂に彼等は穴藏にも降りて行つた。それは三度か四度目であつた。私は筋一つ震はせなかつた。私の心臓の鼓動は何の罪もなく安らかに睡む人達のそのやうに落着いてゐた。私はその穴藏を端から端へと歩いてみせた。私は腕組をして平然とゆきつ戻りつした。警官達はすつかり満足した。で立去らうとした。然し私の心の悦びは抑制するべく餘りに強かつた。私は、一つには勝利感を味ふ爲には、二つには私の無罪を飽くまで彼等に確信させる爲に只一言いはせて貰ひたかつた。「皆さん！」私は一行が階段を昇りかけた時たうとう口を開いて仕舞つた。「私は皆さんの疑念を晴

すことを得たのを心より嬉しく思ひます。私は皆様の御健康を祈ると同時に今少しく禮儀深くあらむことを併せて望む者であります。それはさて置き、これは——これは實に頑丈した家でありまして——（たゞ私は無性に能辯に捲し立てたいと言ふ熱望のあまり自分で自分が何を饒舌るのやら少しも別らなかつた）「全く素的によく出来た家と申して宜しからうと存じます。この壁と來たら——おや皆さんもう行らつしやるのですか——この壁と來たら、窓から頑丈に塗上げてあるんですよ」此處で私は逆上した空元氣を見せる爲に手にした杖で、愛妻を埋めて煉瓦を積み重ねてある個所をトントんと可成り強く叩いた。

天帝よ、願はくば悪魔の勝より我身を護らせ給へ！杖の響が未だ消えもやらざる中にこれに應じて慕の中から一つの聲が聞えて來た。

初めはどうやら、物を隔てて聞くやうな杜絶れ杜絶れの子供の啜り泣きとも思へたが、それが忽ちきりきりと高まつて長く引つぱつた叫び聲、いやもうこの世ならぬ、人の聲とも思へない——呻き、怒號となり、果ては、恐怖とも凱歌とも付かぬ慟哭に變つてゆくのであつた。かゝる悲鳴は地獄に墜ちて苦しむ者と苦しめて自ら喜ぶ悪魔達の喉笛から、一緒になつて流れ出る陰府の聲としか思はれなかつた。

その時私の心は語るも愚かである。私は殆んど氣を失つてよろよろと向う側の壁までよろけて行つた。警官の一行は驚愕と畏怖とで一瞬間、階段の上にそのまゝ釘付けになつてしまつた。だが次の瞬間



間敷本の腕がその壁をせつせつと毀しにかゝつてゐた。壁は諸共にゴツトリと落ちて来た。死體はもう可成り腐爛して、血が凝りついたまゝ、見てゐる人の前にすつくと立つてゐた。この死體の頭の上には、眞赤な口をカッと開いて、隻眼をランランと光らせたかの猫——私を到々その術中に陥れ、人殺しをさせ、今また呻き聲を立て、私を絞首人の手に渡したかの猫が坐つてゐた。私はこの怪獸をも一緒に墓場の中に塗り込めてしまつたのだ！

——終——

## 跛 蛙

この王様ほど冗談を愛好せられた方はまたこの世にあるまいと思はれた。冗談のためにのみ生きてゐられるかのやうに見えた。王様の寵愛を得る最も確な方法はたゞ面白い輕口を上手に言つて退けさへすればそれで良かった。したがつて王様に仕へる七人の大臣達も揃ひも揃つてその道の上手ばかりでありであつた。そのみではない、どれもこれも、王様竝に、肥満漢で油ぎつた大柄な人たちはばかりであつた。冗談を言つてゐると肥つて來るものか、いづれか、明瞭わからないけれど、とにかく瘦せた諧謔家と言ふ者は世間には澤山ないやうである。

冗談の品位（王様の仰有るには、品位などは冗談の脱殻ぢや）などは一向氣にも留めなさらなかつた。王様は、とりわけ冗談の露出なのを愛せられてその爲には少々長たらしいのでも厭ひなされなかつた。あまりに氣むづかしい話にはすぐと欠伸をなされた。王様は定めしヴォルテールの「サデイグ」よりもラベレエの「ガルガントウア」の方が好きだと仰有るであらう。總じて、言葉の綾よりも生地そのままの冗談の方が遙かに王様の御氣に召した。

この物語の當時には、職業的道化師と言ふのがまだ宮廷では廢れずにゐた。雑色縫合せの着物を着、頭巾をかぶつて、鈴をちやらつかせて、王様のテエブルから落ちるバン層に有付く爲には、事に應じ



て即興的に小ッ氣の利いた諧譚を申上げる——あの道化役と言ふのが大陸の強國の宮廷にも未だ残つてゐた。

この物語の王様も勿論道化役を抱へてをられた。と言ふのは、つまり、七人の大臣達の鬱陶しい偉さにたんのうされた時の釣合としても、何かしら、かうした馬鹿げた物が必要とされたからである。

然し王様御抱への道化は唯の道化ではなかつた。この道化は更に一寸法師で且つ跛でさへあつた。だから王様の眼から見るとこの道化は三倍の價値があつた。一寸法師もまた道化と同じやうにその頃の宮廷では珍らしいものでは無かつた。笑はせる道化とそれを見て笑ひこける一寸法師の兩方がなくては、何處の宮廷でも（宮廷と言ふものは、如何なる場所よりも日永な退屈な所である故に）なかなか日が暮れにくかつたのである。ところが、先程も申したやうに、諧譚に巧みな男と言ふものは百人が九十九人肥滿漢で圓つこく、カサバツてゐるものである。——然るにこのホツブフログ（跛蛙）が一人で三つの寶を持つてゐると言ふので王様は、こよなく満足に思つてゐられた。

私は思ふに、ホツブフログと言ふ名前はこの道化が洗禮式の時、名付親から貰つたものではなく、恐らく、この男が人並の歩き方が出来ない所から、かの七人の大臣達が協議の上、命名したものであらう。實際ホツブフログは、跳ぶでもなく這ふのでもない——足をひよいひよいと投げ出すやうにしなければ歩けなかつた。この無様な恰好が王様にとつて限りなく悦樂でもあり慰藉でもあつた。と言ふのはこの王様御自身の容姿は洵に申分のない美男と言ふ風に（お腹が飛び出てゐて頭には生れつき

の瘤があつたにもか、はらず）宮臣達から折紙をつけられてゐたからである。

然し、この跛蛙は、足が曲つてゐる爲に、床や道を歩く時は非常に難澁したけれど、下肢の缺陷を償ふ爲に神様が彼に與へたらしく思はれるものはその上肢の異常な筋肉の力であつた。その爲に彼は樹でも繩でも凡そ登ることなら何んでも、驚くへき放れ業を演ずることが出来た。かう言ふ事に掛けては、彼は確に、蛙よりは、むしろ栗鼠か小猿と言ふべきであつた。

私はこの跛蛙が元は何處の國から來たものか確な事は知らない。然し、ともかくこの王様の宮廷からはずつと遠方の、誰も未だ聞いた事のない或る未開の國から來た者である。此跛蛙と、それから矢張り彼と同じやうに矮少な少女（然し體は見事に均整が取れてゐて、而も驚嘆すべき踊の上手）と二人は元來到る所に侵略しては捷を奏する強い將軍がその近所の地方から腕づくで奪つて來て、王様に献上したものであつた。

こんな次第であつたから、二人の囚れの身の小さい同志が、とても仲が良かったことは言ふまでもない。二人は直ぐに命を賭しての親友となつた。跛蛙は、藝こそ人一倍出来たけれどその割に可愛がられなかつたので、少女トリベツタに思ふさま心盡しをしてやる事は出来なかつた。が、女の方は、その優雅な際立つた美しさの故に、皆から賞めそやされ、可愛がられて、素晴しく勢力があつたところから、それを利用して、跛蛙の爲に出来るだけの事をしてやつた。

何であつたか忘れたが、何しろ、とても大層なお祝事のあつた時、王様は假裝舞踏會を催さうと心



を決められた。假裝舞踏會とか、それに類した催しのある時はいつも、跛蛙とトリベツタの二人が手腕を表はすことになつてゐた。殊に跛蛙は、ベエヂエントを仕組んだり、假面舞踏に新奇な人物を編み出したり、衣裳の着付をしたりする事にかけては非常に創意的なところがあつた。で、彼の手を借りないでは、この種の催しは、とても出来さうもなかつた。

いよいよ御祝の當夜が来た。壯麗な大廣間がトリベツタの監督の下に裝飾されてこの假裝舞踏に光彩を添へる有らゆる工夫が委しく用ひられた。全宮廷は狂熱的な期待に充ち溢れてゐた。扮装の人物や衣裳には思ひ思ひに工夫を凝らしてゐたのは言ふまでもない。多くの人達は、一週間も一月も前から何んな役割に扮してやらうかそれぞれ心に決めてゐたのである。まだ決まつてゐないなどと言ふ事は何處にもなかつたが——但し王様と七人の大臣達はまだ決つてゐなかつたのである。何故、この人達がぐずぐずしてゐたのか私にはわからないが、事に依ると、これも冗談のつもりだつたかも知れない。いや、それよりも、あまり肥り過ぎてゐる爲に、手早く物を決めるのが困難だつたと考へる方が尤もらしい。ともかくも、さうかうしてゐる中に時間が迫つて来た。で、最後の手段として跛蛙とトリベツタを呼びにやつた。

二人の者が王様の召に應じて伺候した時、王様は七人の大臣達と共に酒を召し上つてをられた。が王様には大變疴が昂つてゐられる御様子であつた。王様は跛蛙が酒を好いてゐないと言ふ事を承知されてゐた。酒を飲むとこの隣れな侏儒は昂奮して狂氣染みて來るのであつた。——で元來狂氣な

どと言ふものは決して心持ちのいいものぢやない。だが王様は例の露出な冗談がお好きであつたから跛蛙に無理強ひに酒を吞ませて（王様の御言葉を借りると）つまり「陽氣に」にさせるのが格別の座興と考へてをられた。

跛蛙とトリベツタが這入つてくると、王様は言はれた。

「こりや、蛙、近ふ寄れ、さうして汝が故郷の友達らの健康を祝うて此盃を飲み乾すがよいぞ。」

（この時、跛蛙はそつと嘆息を吐いた）

「で、そこで、汝の智慧を藉りたいのぢや。つまり假裝の人物ぢやが——その人物の何か目新しい、ぐいと趣向の變つた奴が思ひ付かんか。いつもいつも同じ物ばかりで倦々してゐる。さあ近う寄れ。飲め。酒が汝の智慧をいよいよ燃すであらうぞ。」

跛蛙は、王様から、かうした御言葉を賜つていつものやうに諸請を申上げようと努めて見たが今日はどうしても出来なかつた。此日は恰度跛蛙の誕生日に當つてゐた。「故郷の友達」の爲に飲めと言はれた時、跛蛙の目には不覺にも涙が湧いて來た。彼が此暴君の手から恭々しく受取つた大盃の中に、大粒の、ほろ苦い涙が點々と滴り落ちた。

跛蛙のチビ助が此大盃を逡巡ながらも飲み乾した時、王様は、

「あ、は、は、は、は、あ——」と哄笑をなされて「それ見い、旨酒の一杯はさうも利くものぢや、おぬしの腫は、もうそろそろ輝いて來たやうぢや。」



哀れなビツコ蛙！彼の瞳は輝くと云ふよりむしろ妖しく光つて来たのである。なにしろ彼の感じ易い頭には酒の力の利目は強くもあれば、廻り方も早かつた。彼は手を震はせながら大杯を卓上に置くくと狂ほしいやうな目付きで一座の人々を見渡した。人々は、王様の冗談が観面に利いたのでひどく可笑しがつてゐた。

「で、今度は仕事の事で御座るが。」と、肥満漢の總理大臣が言ひ出した。王様は之に應じて、

「さうぢや、さうぢや。喃、蛙、良い思案はないか。人物ぢや、——吾々一同人物が欲しいのぢや、揃ひも揃つて人物に缺乏しとるのぢや、ははははははは。」王様は冗談を利かせて言つたつもりであつたから、七人の大臣達も調子を合せて笑ひこけた。

「蛙も笑つた。がその調子は弱々しく洞に聞えた。」

「さあ、どうしたのぢや。何も思案が浮ばぬのか。」王様は性急に仰せられた。

「何か趣向の變つたものをもと思案なかばにござります。」と跛蛙はポカンとした調子で答へた。彼の頭はもう酒のためにすっかり惑亂してゐた。

「何、思案中途ぢや？」王様は威丈高い調子で叫ばれた。

「思案中途とは如何言ふ事ぢや。ははあ、讀めた。さては、もつと酒が欲しうて拗とるのぢやな、さあ、これを飲め！」

王様は、更にまた大杯になみなみと酒を注いで跛蛙に差出された。跛蛙は切なげに喘ぎながら

ただ黙つてそれを眺めてゐた。

「こりや、蛙、飲めと言ふたら飲まぬか！飲まぬとあらば、よし……」

暴君は猛り出した。

跛蛙の侏儒は猶も巡つた。王様は怒りのために紫色になられた。宮臣達は顔を歪めて作り笑ひをした。トリベツタは屍のやうに蒼ざめながらも王様の前に進み出て、恭しく跪いて、跛蛙を御ゆるし下さるやうに哀願した。

王様はこの少女の小癪な態度に呆れなされて暫くの間見詰めてをられた。何を言つていいか、何をしたいか——自分の激怒を最も小氣味よく表現する方法は何かと王様は一寸思ひ惑はれた御様子であつた。が到々王様は、一言も仰有らず、いきなり少女を張り飛ばし、その上先刻の大盃になみなみ注がれた御酒を少女の顔を目がけて打ち撒かれた。

少女は、今は嘆息さへ吐く力もなくやつとの事に立上りふらふらと食卓の下手に歸つた。半分間程は死のやうな静寂のみがあつた。一片の木の葉、一筋の羽毛が落ちてそれと別る程であつた。その静けさの中に唯一つ低いけれども荒々しい、長く引張られた、軌むやうな音が聞えて来た。その音はその室の總ゆる隅々から一時に響いて来るやうに思はれた。

「何——何んぢや——何んだつて左様な音を出すのぢや、こりや蛙。」

王様は再び嚇として開き直つてこの侏儒を決付けられた。



跛蛙は、もう大分酔が醒めたやうであつた。彼はこの暴君の顔を心を籠めて、然し温順げにちつと見詰めてゐたが、やがて唯かう叫んだ。

「私が、——あの私が？——私がなんで滅相もない……」  
その時、一人の廷臣が口を挟んだ。

「あの音は外から聞えて參つたやうに御座りまする。愚老の考へますにはあの窓の鸚鵡が籠の金網で嘴を研いて居るのかと心得まするが。」

「實にも左様ぢや。」王様は廷臣のこの言葉で、大分御氣が和んだ御様子であつた。

「余はまた、確か此奴が齒軌をしたとばかり思つたが……」

此處で跛蛙は哄笑ひ出した。(王様は飽くまでも冗談を好まれた方故に誰が笑ふとも、笑ひには苦情を申さぬ質であらせられた)跛蛙はその大きな強さうな、憎々しげな齒竝を剥き出して哄笑つたのみならず、彼は、如何程なりと王様の御望みのまま御酒を喜んで頂戴致しますと言ひ出した。で王様もすつかり御機嫌をお直しなされた。跛蛙は、其處で、再びなみなみと注がれた大盃を悪びれる様子もなく、一氣に呑み乾して、すぐと、熱心に假裝舞踏會の計畫を切り出した。

「どうした聯想からでございますか、とんと別りかねますが。」と、もの靜かに、まるで生れてからこの方お酒などは一滴も口にしないことがないかのやうに喋り出した。

「恰度、陛下があのとリベツタ奴を御擲ちになりお酒を伎女の顔にお掛けになつて後、——恰度陛下

がこれを爲されたすぐ後で鸚鵡めが窓の外で奇妙な音をさせまして御座いますが、あの時、素晴らしい名案が浮んで參つたので御座います、と言ふのは私どもの國で、假裝舞踏會などの際、よく演る戯れの一つで御座りますが當國では洵に目新しいものかと存じます。ところが生憎これには八人の人員が要りますので——」

「それ、それ、此處に」と王様は素早く數の一座を見出して高らかにお笑ひなされた。

「此處に、詠向きにちよつきり八人——それ余とこの七人の大臣と。さあ。その戯れとやらは如何言ふものぢや。」

「國の方では『八匹つなぎの猩々』と申して居ります。旨く演りますとまことに興深い遊戯に御座ります。」

「よし、それを演ることに致さう。」

王様は、大仰に反り返つて目を細くなされた。

跛蛙は更に言葉を繼いで「で、この遊戯の面白さと言ふのは、とりわけ、婦人方が怖がるところに御座ります。」

「素敵ぢや。」王様も大臣達も異口同音に喚きなされた。

「さて、私が皆様を、猩々に御仕立申しませう。」と侏儒は切り出した。

「そつくり私に御任せ下さい。本物裸足に仕上げますから、舞踏會出席の御仁はいづれも眞個の猩々に



と思ひ込むで御座いませう。——さうして何誰も、きつと、臆を潰すに違ひ御座いませぬ。」

「素晴らしい思付きぢや、跛蛙！ 取立てつかはずぞ。」と王様は叫ばれました。

「鎖を用ひますのは、チャラチャラ鳴して騒ぎを一層大きくする爲で御座ります。つまり陛下初め皆様が一緒になつて飼主の手から逃げ出して来た——とかう言ふ風に仕組むので御座ります。舞踏會の真中へ、八匹の鎖で繋いだ狸々が——大抵の方がつきり本物と思ひ込むその狸々が——荒々しい叫声をあげながら、美しく華かに着飾つた紳士淑女の中へ割り込んで来た其時の光景、憚りながら陛下の御想像も及ばぬところかと存じます。その對照は一寸類のない味で御座ります。」

「いかさま、左様ぢやらう。」と王様が申すと居竝ぶ大臣達は（大分時刻も遅くなつて来たので）早速、跛蛙の計畫を演るべく大急ぎで立ち上つた。

一座の者を狸々に仕立てる跛蛙のやり方は全く簡單なものであつた。がその効果に到つては極めて素晴しかつた。で、この問題の動物の事であるが此物語の時代には文明國では何處でも滅多に見られぬ代物であつた。さうして跛蛙の作つた狸々連は、如何にも獸そつくりで、十二分に獷猛さが出てゐて、何處から見ても眞物らしく見えることは間違ひなかつた。

王様と大臣は先づ最初に、ピッタリと體に合つた莫大小のシャツとツボンを着せられた。それから全身にタールをしこたま塗られた。で、これをやつてゐる最中に誰やらが羽毛をくつ付けたら如何だらうと言ひ出したがこの考は跛蛙に依つて直ちに退けられてしまつた。跛蛙は狸々のやうな猛

獸の毛は亞麻を使つた方が遙かに眞物らしく見えると言つて八人の人達を同感させた。そこで、タールを塗つた上に、亞麻が厚くくつ付けられた。それから長い鎖が持出された。先づ王様の腰を一周巻いて結び付けられた。それから今度は大臣の一人を巻き付けて結んだ。かうして次ぎ次ぎと同じやり方で結び付けて行つた。やがて全部鎖の繋ぎが出来上つた。繋がれた一人一人が出来ただけ離れて引張つて見ると恰度鎖は圓い環をなしてゐた。で、一切をいよいよ以て眞個らしく見せる爲に、繋ぎ餘つた鎖を更にその圓の中心で十字に交らせて、恰度、今日、ボルネオあたりで黒狸々やその他の大猿を捕獲する人達がやるやうにした。

假裝舞踏會の開かれる大廣間は圓形の室で、非常に天井が高く、御日様の光りと言つては、眞上の唯一つの窓から這入つて来る許りであつた。夜は（元來此部屋は夜間用に設備されたものであつて）主として巨大なシャンデリヤを用ひた。このシャンデリヤは天井の採光窓から鎖で吊されてゐて、普通見る様にやう平衡錘で上下の加減をするやうに出来てゐたが、この平衡錘は目障にならないやうに、圓天井の外に出して屋根の上を越させてあつた。

廣間の準備は總てトリベツタの監督に一任されてゐた。が、ある特別の箇所は、彼女の親友跛蛙の落着いた判断によつて教へられたところがあるらしかつた。例へば、シャンデリヤを取退ける事にしたのは跛蛙の考から出たことであつた。シャンデリヤから落ちる蠟の滴が（そのうやな暑い氣候では防ぎやうもなかつたから）御客様の晴着を臺無しにするであらうし、御客様と雖も、廣間が



雑踏して居るから、どうでも廣間の中央、即ちシャンデリヤの下に來ないわけにも行くまいと思はれたのでシャンデリヤを取退けやうと言ふのであつた。で代りに燭臺を増して、邪魔にならぬやうな所へ、彼處此處と立てて置く事にした。それから薰香を放つ火把を、壁に沿うて立つてゐる女人像柱の右手に置く事にした——その數凡そ五六十であつた。

八匹の狸々は、跛蛙の勧めに依つて、眞夜中まで（その頃には廣間が會集で一杯になるので）姿を現さず、ちつと堪へて待つてゐた。時計が十二時を打ち終るや否や狸々の一群がどつと躍り込んだ——と言ふよりはむしろ轉げ込んだのであつた。つまり這入るとき鎖が邪魔になつて、足を抄はれたり、蹴躓いたりしたからであつた。

會衆の中に捲き起された驚愕は非常なものであつた。したがつて、王様の御心は嬉しさの爲にときめきなされた。案の状、御客の中には、この怖しい恰好を、たとへ、眞物の狸々とは考へなくとも、何か實際の動物の一種だらうと思込んだ者は少からずあつたのである。婦人たちの多くは、それを見るなり氣を失つて仕舞つた。前以て、用意周到にも王様から一切の武器をこの廣間に入れないやうに命じてあつたから良いやうなもの、さうでも無かつたら、王様達は血塗になつてこの惡戯の價をすることになつたであらう。然しこんな譯で、刃物は全く隠されてあつたから群集は唯、戸口の方へと崩れるやうに逃げ出した。所が其戸口も王様のいひつけで王様達が此廣間に御這入りになると同時に、堅く錠を下してあつた。なほ、跛蛙の言葉に従つて其處の鍵は、彼の手に預けられてあつた。

騒亂がいよいよ極上に達し人々は唯己の安全のみに（全く逆上した群集の押し合ひへし合ひするの）が事實上の危険でもあつたから）注意を取られてゐる間に、いつもシャンデリヤを吊してある鎖が、今夜はシャンデリヤを取り退けて仕舞つたから引上げられてあつたのだが、その鎖が今や非常にソロソロと降りて來て、その鉤になつた末端が床から三呎と離れない所へ來て止つた。

それから間もなく、王様と七人の仲間が、廣間中をよろめき歩いた末、いつの間にか部屋中央に、即ち、天井から下つた鎖に直接觸る所に來てゐた。跛蛙の侏儒はこの狸々の附添役で、先刻から一行の狂態を煽動しながら此處までやつて來たのであるが此處まで來ると彼は、狸々を繋いだ鎖が十字に交叉してゐるところを手に取つた。手に取るが早いか、實に目に止まらぬ早業で、矢庭に、上から下つて來たシャンデリヤ用の鎖の鉤に引掛けた。と忽ち、シャンデリヤの鎖が、目に見えぬ力でキユウツと引上げられ、末端の鉤は最早手の届かぬ所まで上つてゐた。で、必然の結果として狸々共は互の顔と顔とが突き合ふまでに一所へ引寄せられる事になつた。

會衆達も、此時までには、やや恐怖の情から醒めてゐたのでこれは、初めから旨々と仕組んだ狂言

だと考へて、狸々共の困つてゐる様子を見て、今度は一齊に高い笑聲を響かせたのである。「狸々の事は私にお任せ下さい。」と跛蛙は鋭く叫んだ。その甲走つた聲は、あらゆる雑音を貫いて隅々まで容易に聞き取れた。

「私に御任せ下さいまし。どうも見知つた方のやうな氣がします。とくと見さへすれば私には誰だか



すぐ分りますから。」

かう言ひながら、跛蛙は、群集の頭の上を傳つて、うまく壁際まで行き着くと、女人像柱から一本火把を抜き取つて、前のやうにして、室の中央まで戻つて来た。——と見ると、猿のやうに王様の頭の上に跳びあがつた。が忽ち其處からシャンデリヤの鎖を三四呎攀ぢのぼつた——狸々の一團を檢べるやうに火把を下の方に差し延べ「すぐ誰だか見分けます」と猶も叫びながら。

かうして、全會衆（狸々達も含めて）が可笑しさに腹を振らせてゐると、跛蛙は、突然鋭く口笛を吹いた。と忽ち、シャンデリヤの鎖が激しく三十呎も捲上げられた——膽を潰した狸々共が無駄足搔をしながら、見る見る、ずり上げられて明窓と床の間の空中にぶら下げられて仕舞つた。跛蛙は引上げらるゝ鎖に縋つたまゝ、この八人の假裝者たちとは矢張り三四呎の間隔を保つて、（まるで何事もないやうな顔をして）誰であるか見究めようとする者の如く、依然として火把を狸々共の方へ差し延べてゐた。

此處で流石の會衆も思ひ掛けなく鎖がずり上つたので度膽を抜かれ一分間ほどは死のやうな静寂のみが廣間を支配した。すると突然、その静寂の中から、恰度先刻王様がトリベツタの面にお酒を掛けられた後すぐ、王様や居立ぶ顯官達の耳に這入つた、あの低い、けれど荒々しい、軌るやうな物音が響いて来たのである。然し、今度はその音を一體誰がさせたかと言ふやうな事は少しも問題になり得なかつた。それは跛蛙の侏儒、其奴の牙のやうな齒から響いて来るのであつた。侏儒は氣が狂つた

やうな凄じい憤怒の形相をして、口から泡を吹き、思はず上を見上げた王様と七人の大臣達の顔を睨め付ながらきりきりと齒軌をしてゐたのである。

「ははあ。」怒り狂つた此道化師は漸く口を開いた。

「ははあ、どうやら正體が分つて来たぞ。」彼は、かう言ひやうら、一層近く王様を覗き込むがににして、王様を包んでゐる亞麻の被服の上に火把をくつ付けた。それは忽ちめらめらと焰を吐いて一面、火の衣となつた。半分間と経たない中に、八人の狸々共が物凄く燃え上つた。群集は恐怖に壓倒されて、金切聲を立てながらもたゞ此を見上げるばかりで、どうにも手の出しやうがなかつたのである。遂に火勢はどつと燃え盛つて紅蓮の舌がべらべらと延び上つて来たので、侏儒の道化師は火の手を避けるために更に鎖をのぼらねばならなかつた。彼がこの動作をしてゐる中、群集は一寸の間である

が再び、静まり返つた。侏儒はこの機會を捉へて再び口を開いた。

「今こそ正體が分りましたぞ。この狸々達は、偉い王様と七人の樞密顧問官たちとであります——頼りない纖弱い少女を無残に殴り付けた王様と彼の非道を焚き付けた七人の顧問官でありますぞ。それから私はと申しますと、これはまた、たかが道化師跛蛙であります——そして此が私の最後の諧諷で御座んす！」

侏儒の此短い演説が終るか終らない中に亞麻とタールの高度の燃焼性の爲に思ひ切り復讐の仕事は爲し遂げられた。



八個の死骸は、異臭鼻を衝く、眞黒の見別の付かぬ塊となつて中空にぶら下つてゐた。跛蛙は死骸に火把を投げつけてから、悠々と天井に攀のぼつて明窓から姿を消して仕舞つた。想像では、トリベツタが屋根に居て、彼女の友のこの怖ろしい復讐を手傳つてから手をとつて二人共々、己の故郷へ逃げ還つたものらしいと言はれてゐる。その後二人の姿は再び見られなかつた。

— 終 —

## 物言ふ心臓

さうです。——神経過敏——その時私は、實に實に世にも恐しい神経過敏症でした。いや今に到るもその通りです。けれどそれであなたは私を狂人だと仰有いますか。勿論病氣は私の神経を磨き尖らせました。然し、役に立たなくしたのでも痴呆にしたのでもないのです。中にも聴覺の鋭さと言つたら素晴らしいものでした。私は天地萬物に籠るあらゆる音を聞きました。地獄のどよめきも聞きました。それでも私を狂人と云ふんですか、まあ御聞きなさい。私が如何に正確に、どんなに平然と一部始終をお話するか御聞きなさい。

さう言ふ考へが、何時の頃から私の頭に巢喰ふやうになつたかわかりませんが、とにかく一度その考に捉へられると、日となく夜となく付き纏うて離れないのです。別に目的があつた譯でも無く抑へ切れぬ激情があつた譯でもないのです。私はその老人を好いてゐました。彼も私をよくして呉れました。彼は私を一度も辱しめた事はありません。私も嘗つて老人の金を狙ふやうな事は無かつたのです。

思ふにそれは眼です。然うです老人のあの眼です。老人は兀鷹のやうな眼を持つてゐました。——薄い膜のかかつた空色の眼です。その眼が私の上に落ちる度に、私は全身の血が凍りつくやうに思ひ



ました。その中に、次第次第に、忍び足で、一つの決意が湧いて來ました。老人を殺めて、永遠にあの眼から逃れよう——と私は決心するやうになりました。

此處が要點です。貴方は私を狂人だと思ふでせう。狂人は何も知つてはゐないものです。所が貴方は私が、あらゆる事を承知した上で、あらゆる用意周到さと猫冠りとを以て自分の計畫を遂行したことが御分りになつたらよもや私を狂人とは仰有らないでせう。私はその老人を殺害する直前の一週間は嘗つてない程、彼に親切でありました。さうして毎夜十二時になると、私は老人の寢室の鑿を靜に外して、そおうつと、實にそおうつと扉を開け始めるのです。かうして自分の頭を覗かせるだけの幅に開けると、光線が絶対に洩れないやうに緊切閉め切つた眞黒な角燈を先に差入れて、それから頭の中に忍び込ませるのです。その頭を押入れる手際を御覽に入れたら屹度御笑ひになるであらう、私はそれを、まだるつこく、實にゆつくりとやりました。老人の眼を亂さない爲にです。頭一つをそつくり入れて老人の寢臺を覗き込む事が出来るまでには一時間たつぶりかゝりました。皆様、狂人がこんな賢くてもいいものでせうか。頭を充分部屋の中に入れて仕舞ふと、注意に注意して、(蝶番が軌みますからね)角燈を開きました。ほんの少し——薄い、か細い一筋の光があつた。兀鷹そつくりの眼を照らす程度に。

かう言ふ風に私は七夜の間——毎夜十二時頃——繰り返したのでした。けれど常もその眼は閉されたままでした。それで私は自分の計畫を遂行することは出来ませんでした。何故と仰有いますか、私を

惱ますものはその老人その人ではなく彼の持つ悪魔の眼であつたからです。翌朝になると、いつも私は勇敢に彼の部屋に飛び込んで行きました。氣持ちよく彼の肩を叩いて、温い調子でその名を呼びます。さうして「昨夜はよく睡れましたか」と訊いて見るのです。何しろ、毎夜十二時、睡つてゐる間に私が彼の顔を覗込むと言ふ事を知つてゐるやうならそれこそ奥底の知れない老人ですからね。

八日目の晩です。いつもよりも一層氣をつけて扉を開けました。私の手の動き方は時計の分針よりも鈍かつたのです。私はその晩ほど泌々と自分の力、自分の頭の良さを感じたことは無かつたのです。自分の勝利感には抑へ切れないうちに昂まつて來ました。思つても御覽なさい。ソロソロと私は忍び足に近づいて行くのです。老人は私の陰翳な企みも胸の中も知らずに睡りこけてゐるのです。私はこれを考へて思はずクツクツと含笑をして仕舞ひました。と多分彼に聞えたのでせう彼は突然床の上で物に怯えたやうに寢返りを打ちました。此處で、貴方は、私が逃げたとお思ひでせう。違ひます。老人の部屋は鳥羽玉の闇です。(泥坊の用心に窓の鏡戸は全部下りてゐましたから)、で老人には扉の開いたのは分りつこないと私は思ひました。そこで、私はそのまま扉を押して開ける仕事を續けました。——落着いて、靜かに靜かに開けました。

私は頭を差入れて、將に角燈を開かうとしました。その時生憎親指が、錫の金具の上をツルリ滑りました。すると老人はムックリ起上つて「誰だッ！」と怒鳴りました。



私は一言も言はず、凝然と立つておりました。私は一時間もの間、筋一つ動かさず立つておりました。然し彼が再び寝付いたらしい様子はありませんでした。彼は、さうして、毎夜毎夜、恰度私がするやうに、ちつと床の上に起き直つたまま静かに耳を澄ましてゐるのです。——壁の中の死の時計を聞かうとして。

間もなく私は微かな呻聲を聞きました。私はそれが人間の恐怖の呻聲である事を知つておりました。苦痛の呻きでも、悲しみの呻きでもありませんでした。いや決してそんなものではありません。それは畏怖に氣壓されて、靈の一番どん底から洩れて来る、あの押包まれて息詰りさうな呻聲でした。私はその聲をよく知つておりました。幾晩となく、眞夜中になると、私自身の胸底から、定つたやうにその聲が噴き上つて来るのです。さうして物凄く反響を全身に及ぼしながら刻々に恐怖感を深めて私を惑亂させるのでした。さうです、私はそれをよく知つておりました。私は老人が感じてゐる所のものを知つておりました。それですからクツクツクツと心の中では忍笑ひをしてゐても實際老人を哀れにも思つておりました。老人は最初微かな音で床の上に寝返りを打つてから、すうつと目を覺してゐるのだと言ふことも私にはよく分つておりました。彼の恐怖はあの時から次第に募つて来てゐるのです。彼はそれを氣に留めるほどのものでも無いと想ひ込まうと努めてゐるのです。けれどさうは行かないのです。「煙突に風が吹き込んだらしい、それだけの事さ」とか「たかが鼠一匹、床を突切つただけだ」とか「おや、コホロギが鳴いてゐるんだよ。たつた一匹コホロギ鳴いた位で……」とか、いろいろ、考へ直

さうと試みてゐるのです。然し無駄——どんなにしても無駄だと老人は感じました。尤もな事です。何しろ「死」がその眞黒な影と共に忍び足で彼の間近に来てゐたのです。さうして彼の上に覆ひ被さつてゐたのですから無理もないのです。かうした見えざる死の影の不吉な氣配に依つて、老人は聴き

も見もせず自然に私の頭の存在を部屋の中に感じ——正に感じてゐたのです。私は角燈をほ私は長い事辛抱して待つておりました。けれど老人の寝付いた音は聞えないのです。私は角燈をほんの少し、極く細目に開ける氣になりました。どんなに私は用心深く忍びやかに少しづつ少しづつ開けたことでせう、すると、遂にその細い隙間から蜘蛛の絲ほどの微かな光りが一筋流れ出て老人の兀鷹そつくりの眼をありありと照し出したのです。

眼はパッチリと大きく大きく開いて居ました。私はそれを見てゐると腹立しくつて矢も楯も堪らなくなりました。私はまざまざと見た——その眼は朦朧した空色で薄らと不氣味な膜のかゝつてゐるのを。それを見て居ると私は骨の髄まで冷たくなつて来ました。然し老人の顔の他の部分は何處も見えませんでした。私は唯本能的に、その呪はれた一個所のみ光線を集中させてゐたのですから。

狂人と間違はれるのは、神経があまりに鋭過ぎるからだといふ私は申上げませんでした。さうです。かうやつてゐる中に、私の耳許へ、低い鈍い、然し早い——恰度、綿の中に時計を包んで置くやうな——音が聞えて来ました。その音も私はよく知つて居ました。それは老人の心臓の鼓動です。それは私の憤怒をいよいよ募らせました。恰度突撃の喇叭が兵卒共を昂奮させるやうに。



それでも私は我慢をしておつと立つておきました。私は殆んど息もしませんでした。角燈もその儘差伸べたなり動かしませんでした。眼に光の一點をさし付けたまま私は如何に堅忍不拔に堪へてゐたこととせう。その間にも地獄の音の心臓の鼓動がいよいよ強くなつて来るのです。次第々々に、急激に刻々に高くなつて来るのです。老人の恐怖がその絶頂に達したに違ひありません。いよいよ高く刻々に高く。憶えておいでですか。私は神經過敏だと先刻申し上げました。眞夜中、而も古い館のガラんとした沈黙の裡で、かうした奇怪な物音は私を今や收拾の付かない恐怖の中に逐ひ込めました。然し、まだ堪へておきました。あの心臓の鼓動は尙も高く、いよいよ高くなつて来るのです。心臓は破裂するに違ひないと思ひました。やがて新しい不安が私を捉へました。此音がひよつとして近所の人に聞かれでもしたら——ふと、さう思つたのです。

そこで到頭老人の最後が来ました。私は一聲呻くと、角燈をさつと押擴げて、いきなり部屋に跳び込みました。老人はたつた一度悲鳴を上げたきりでした。——たつた一度です。私は、直様彼を床の上に掲り降してその上に重い寢臺を載せました。私はうまうまと遂つて退けたので北叟笑ひました。然しなほ可成長い間、心臓は押包んだやうな音を續けておりました。然し、是には別に氣も掛けませんでした。壁越しには誰にも聞えるやうな音では無かつたからです。聽て其音も消えて仕舞ひました。老人はすっかり息が絶えたのです。私は寢臺を退けて死體を検べました。彼は石——全く石のやうに息が絶えておりました。私は彼の心臓の上に手を置いた儘、暫く、ちつとしておりました。脈搏はすつか

り無くなつておりました。彼は到頭石塊のやうに死んだのです。彼の眼が再び私を惱ます事はなくなり無くなつておりました。彼は到頭石塊のやうに死んだのです。彼の眼が再び私を惱ます事はなくなり無くなつておりました。

貴方が、これでもなほ私を狂人だと仰有るのなら、これから先きを御聞きなさい。私が老人の死骸隠匿に如何に巧妙な方法を撰んだかを御話したら、最早私を狂人扱ひにはなさないでせう。

夜明が近づいて来ました。私は手早く仕事に取りかかりました。勿論絶対に音を立てずです。先づ第一に死體をバラバラに斬り離しました。頭を手を足と言ふ風に斬つて行きました。

その次には、下の床張から三枚の厚板を剝がしてその架臺の間に總てを押し込んで仕舞ひました。それから再び厚板を元通りにして誰の眼が見たつて——いやたとへ彼奴の眼が見たつて——良くないことをした氣振りは決して分りつこのないやうに、手際よく、抜け目なく始末をしました。洗ひ消さねばならぬ忌はしい汚染などは——血の滴りなどは何處を見たつて——一切ありませんでした。その點は充分注意をしてやつた仕事ですから。

この作業を、すつかり片付けて仕舞つたのはかれこれ四時頃でした。——四時と言つても末だ眞夜中のやうに眞暗でした。何處やらの鐘が四時を告げると同時に、街路に向いた戸口を叩するものがありました。私はすぐと氣輕に戸を開けてやりましたよ、——今や何を怖れる必要がありません。う。すると三人の男が這入つて来ました。彼等は頗る慇懃に自分達は警察から來た者だと申しました。深夜に悲鳴が近所の者の耳に這入つたので何事かあつたのであらうと言ふことで早速交番に届け



られた。それに依つて彼等三人の刑事が現場を調べる事を委任されて来たのであります。

私は微笑みました。——一體怖るべき何物がありましたらう。私は此等三人の紳士を心よく招き入れました。「その悲鳴とやらは——」と私は言ひました。「——多分私自身が夢の間に發したものでせう」老人は旅行中で今夜は留守だと言ふ事も説明して置きました。私は此訪問者達を家中残る限なく案内しました。自分から進んで彼等に心行くまで搜索をして呉れるやうに頼みました。最後に私は彼等を老人の部屋に連れて行きました。さうして老人の財寶が手一つ附けられず整然と保管されてあるのを見せました。私は自らの祕密の快感に酔ひながら、遂には椅子をその部屋に持ち込んで来て御疲れでせうから暫く御休み下さいと言つて彼等に勧めました。私自身はと言ひますと變に野生的な落着が出て來まして、大膽不敵にも死骸を隠匿してある眞上の床に自分の椅子を置きました。

刑事達は満足致しました。私の舉動はことごとく彼等を信じさせました。私達一同は座に着くといろいろと内輪の話を始めました。私は一々快活な應答を致しました。然し、さうやつてある中にふと自分が蒼くなつて行くのを感じました。さうして刑事達が早く歸ればいいと思ふやうになりました。頭が痛み出しました。耳鳴りがするやうな氣がしました。しかし紳士達は依然として喋り續けてゐます。耳鳴りは次第に明瞭して來ました。それは止む事なくいよいよ明瞭して來るのです。私は此氣分を紛らす爲に一層自由に話を續けました。——が然し遂にその音は、耳の中で鳴つてゐるのでは無いと言ふことが分つて來ました。

勿論私は一層蒼ざめました。——然し、益々雄辯に饒舌たてました。——高らかな聲で。けれど別の音は愈々膨れて來ます——一體どうすればいいのでせう？ それは低い、鈍い、けれど早い——恰度綿に包んだ時計その儘の響です。私は一息毎に喘ぎました——而も未だ刑事たちにはその音が聞えないのです。私は益々口早やに、益々熱烈に捲し立てました。けれど依然として響は膨れて來ます。私は立ち上りました。さうして疝高い調子と狂暴な身振りとで愚にも付かない問題に就いて論じました。けれど音は愈々膨らむばかりです。刑事達は何故さつさと去つて呉れないのでせう。私はこの紳士達にすつかり腹を立てて仕舞つた者のやうに、のしのいつと大股で床の上を行つたり來たりしました。けれど音はいよいよ膨らむばかりです。あゝ、一體どうなるんだ。私は泡を噴きました。讒言を口走りました。悪口雜言を撒ちりました。私は自分のすわつてゐる椅子をゆす振つて床板の上にゴリゴリと軌ませました。然し、音はいよいよ激しく一刻も止むことなく膨れて來ます。益々高く——

高く——高く。けれど、紳士達は依然として愉快さうに饒舌つてゐます。さうして絶えず微笑を浮かべてゐます。これが彼等に聞えないと言ふそんな事があり得るか、ああ神よ、彼奴等は聞いたのだ。彼奴らは知つてゐるのだ。——先刻御承知なのだ。彼奴らは俺の恐怖を玩弄んでゐるんだ——と私は思ひました。いや今でも思つてゐます。

あゝ、然し如何なる苦しみも、これよりはましである。この嘲弄よりは堪へやすい。私はもうあの



似非微笑には我慢が出来なくなつた。私は大聲で喚かねば死ぬと言ふ氣がしました。音は——御聞きなさい。高く高く高いよいよ高く。

「狸め！」

私は紳士達に向つて金切聲で喚きました。

「狸め！ 呆笑ひはするな、俺は立派に承認するぞ。俺が殺つけたんだ。床を剥いで見ろ、此處だ、此處だ。彼奴の心臓が鳴つてゐるんだ！」

—終—

## アツシヤア館の崩壊

きみが情は懸かれる琴線にして

ひとのこれにふるれば

たちまちにして鳴り出す

ド・ペランヤエ

鬱陶しい雲が空低く蔽ひ懸つて、懶い、陰氣な、寂然とした秋の一日、私は終日ただひとり馬に跨つて、殊の外寂びれ果てた地方を過ぎて来たが、さて遂に黄昏の影の間近く迫つた頃、漸くアツシヤア館の姿を望み見ることが出来た。しかし、どうした理由かその建物を一目見ると、或る堪へ難い憂愁が私の心に浸み込んだ。堪へ難い——それは、凡そどんな荒涼たる、または凄じい、嚴肅な自然の像からも受ける、あの半ば快い詩的な情に依つて少しも和らげられたところがなかつたからである。私は眼の前の景色を眺めた——ほんの家だけと、それにその地所内の單純な風物——青ざめた壁——虚な眼の如き窓々——僅ばかり生え竝んだ菅——そして幾本かの枯木の白い幹のある景色を眺めた——それらは私の心を言ふばかりなく——かの阿片に酔ひ痴れた人の、現實生活に立ち返るべき悲惨な幕切れを除いては、現世の如何なるものに喩へ難い程の憂鬱に滅入り込ませてしまつたのであ



る。胸は凍り、沈み、傷んだ——償ふべからざる心の淋しさは、たとひどんな空想を驅り立てようとも、強ひて目ざましいものなぞに移り更へ得べくもなかつた。どうしたと言ふのであらう——私は行み、考へた——アッシア館をちつと見入つてゐる間に、そんなにも私を覺束なくしてしまつたのは、何であらうか？ それは全く解き能はざる不思議であつたし、またそれをさまざまと思索する中に、浮かんて来る多くの朦朧たる空想をとらへることも出来なかつた。私はそこで、結局かうした甚だ儼然ない結論に落ちてゆかなければならなかつた——そこに疑ひもなく、何か我々の心をかき亂すやうな力をもつた自然物象の極めて簡単な結合が行はれてゐるのであつて、しかもその力の分析は到底我々の智力の及ぶ限りではないのだと、私は、景色のある箇所を、繪畫の細部を、單に異つた模様位置き更へるだけで、その悲しげな印象を充分融和し、また恐らくは全く消しさつてしまふことを思ひ浮べた。私はこの思ひ付きに従つて、屋敷の傍に擾されざる光を湛へて激んでゐる青黝い沼の嶮しい切岸へ馬をすゝめた。そして眼下を——灰色の菅や、悽然たる木の幹や、虚な眼の如き窓々の水面へ反映されたさかさまな像を覗きみたのだが、しかし、私は前よりも更に慄然と身を慄はせたのであつた。

けれども、私は今やこの陰氣な屋敷の中に敢へて數週間滞在しようとしてゐるのである。主人の口デリック・アッシアは私の幼な馴染みだつたのだが、併しもう久しい年月たえて會はずにゐた。ところが、最近私のもとへ遠い田舎から便りが來て——彼からの便りであつた——その文面の頗る容易

ならぬ性質上、どうしても私自身出向いて行かなければならないことになつたのである。手跡は明かに神経過敏症を表はしてゐた。彼は、體のひどく害はれてゐることや——甚だしい氣ぶさきなどを訴へて、——是非とも彼の最も良き、そして事實たつた一人の友である私に會つた上、陽氣な交友に依つて、幾分なりとも病苦を輕めたいと書いてあつた。私はかうした言葉の中の、——私を招び寄せたがる彼の異常な熱心さの中に、少しも躊躇してはゐられない程何か由々しい氣配を感じることも出た。私はそれで即刻、今なほ随分奇妙な招待だと思つてゐるのだが、斯うして出懸けて來た次第である。

子供の頃ならば我々は殊の外親しい間だつたものの、併し私は彼については殆ど知るところがない。彼はいつでも極めて無口で打ち解けなかつた。だが、私は彼の遠い昔の入門が稟性の特異な感受性に依つて聞えてゐることを知つてゐた。それは永い時代を通じて、數多くの優れた藝術上の作品に現はれたが、近代に至つては幾度となく繰り返された慈悲深くしかも謙讓な慈善事業や、または正統な解り易い美術の類よりも寧ろ錯雜した音樂に對する熱情的な献身などにより多く現はれてゐた。私はまた、アッシア家の血統が非常に古いものであるにも拘らず、何時の世にも如何なる分家をもつてくらずに經て來たこと、言ひ更へれば全家族が、極く些細、極く一時的な變化は縱あつたにせよ、全く純粹な一本の血統に連る人々であると言ふことを知つてゐた。私はそこで、屋敷の性質と、世に知られたこの一門の性質とが一致してゐること、並びに幾世紀もの久しい間には其一方が他の一方に與



へ得るであらう影響を思ひ合せながら考へた——このおそらく傍系のないと言ふ缺陷が、そして父から息子へと些しの狂ひもなく家名や世襲財産の傳へられて来たことが、家産の實際の所有權をば、「アツシヤア館」なる奇妙な曖昧な名稱の中へ紛れ込ませた末に到頭二つのものを同一視させてしまつたのではあるまいか——その名稱は、さう呼びなれて百姓たちの考へでは、この屋敷と共に其處に住む人々のことも含まれてゐるらしく見えたのである。

私は自分の多少子供じみた試み——沼の中を覗き込んだ結果が、只管あの訝しな最初の印象を強めたばかりであると言つた。私のさうした迷信——どうしてさう呼ばずにおられよう？——が急速に増長し、あると言ふ意識が、いよいよ以てその増長を拂らしめたことは疑ふべくもなかつた。さうした撞著的な法則が恐怖に根ざした凡ての感情に行はれることを、私は以前から知つてゐたが、矢張りこの理由に依つてであらう、私が池の面の映像から眼を上げて再び本物の家その物の姿を眺めた時、私の心の中には或る得體の知れない妄想が生まれたのである——それは實際甚だ莫迦げた妄想ではあるが、それでもそれがどれ程まざまざと私の心に迫つて来たかを記して置く。私は空想のまゝに、竟にその館や地所全體の上とその附近に一種異様な空気が蔽ひ懸つてゐるものと眞實信じてしまつた——一種の空気が、それは空の大氣とはまるで似もつかぬもので、朽ち果てた樹々や、灰色の壁や圓然たる沼などから吐き出された、或る有毒な、不可解な、懶い、陰鬱な、灰かな、鉛色の蒸發氣である。

夢としか思へない妄想を振り拂ひながら、私は更に詳細に建物の姿を見究めた。先づそれは非常に古い物らしかつた。久しい星霜のために色は褪せ果て、ゑん端から外側にかけて、微細な葺が、まるで見事に絡まつた蜘蛛の巣のやうに、垂れ蔓こつてゐた。併し、これだけならば格別驚く程の荒廢ではない。石造の部分は一箇所も毀れてゐなかつたが、その手入れをした部分と個々の石のごつちやになつてゐるところに、無様な不調和が目立つて見られた。その様子には、何處かの等閑にされた窖の中で、少しも外氣の息吹に侵されることなくして、ただ永い年月のために朽ちながら、なほ完全な美しい見かけを保つてゐる古い木細工の姿を思ひ起させた。併し、この大きな朽廢の徴以上に、建物全體の不安を語るものがあつた。仔細に吟味して見るならば、纔にそれと認め得る罅隙が一寸、正面の屋根から壁を鋸齒狀に走つて、遂に凄然と激んだ沼の中に没し去つてゐることを發見したのであらう。

かうした事物に目をとめながら、私はその館までの短い磔石路を騎り入れて行つた。待ちもうけてゐた召使が私の馬を把り、私は玄關のゴシック風の拱門を潜つた。それから一人の忍び足の從僕に依つて無言の中に導かれるまゝに、澤山の仄暗い入りくんだ廊下を通り抜けて主人の居間へ行つた。途中、圖らずも私の目にふれた数々の事物は、何故か、前に述べた私の漠とした感情を一層亢ぶらせたのである。私を取り圍く様々なもの——天井の彫刻や、壁の上の燻んだ掛毛氈や、床の黒檀の如き黒さや、或はまた私の歩みに伴れて鏗然と鳴る妖怪の如き紋章附きの戦利品など、それらの物は、若



しくけさうした類の物は、子供の頃から見慣れたものばかりだったのに、そして私自身その凡てが全く不思議でも妖しくもないことを認めるのに、些の躊躇もしないのだが——私は尙、さうした普通な事物から斯くも不思議な妄想が湧き起ることを訝しく思った。或る一つの階段のところ、私はこの家附の醫者と出會つた。彼の面には卑屈な狡黠と當惑との入りまじつた色が泛んであるやうに見えた。彼は狼狽しながら私に挨拶をして行き過ぎた。従僕はさて、一つの扉を開けると、私を主人の面前に招き入れた。

その部屋は甚だ廣く宏大だつた。窓は細長く、尖つて、内側からは到底手が届かぬ程、黒い柵の床から高く距つた處にあつた。弱々しい深紅の光が、その格子形に嵌められた窓硝子を透して、四邊の特に目立つた對照物を、はつきりと浮き出させてゐたが、併し、部屋の遠い隅々や或は組子細工の圓天井の凹みなどを見究めようとするには所詮無駄だつた。勦ずんだ掛布が壁の上に懸つてゐた。總じて家具は裕に、侘しく、古風に、そしてぼろぼろの物が多かつた。數々の書籍や樂器などが散ばつてゐたが、それとてもこの場の様子にどんな生氣を添へるものでもなかつた。私は悲しみの空氣を呼吸してゐることを感じた。嶮しい、深い、そして救ひ難い憂鬱が一切の上に覆ひかかり、ゆき互つてゐるのであつた。

恰度アツシヤアは長々と寢椅子に寢そべつてゐたのだが、私が入つて行くと、洵に生々とした情熱、最初こそ私にはそれが無理遣の——世の無聊を持つてあました人の無理遣の努力ではあるまいかと思は

た程、生々とした情熱を以て迎へてくれた。だが、一目彼の顔を見るや、それは全く誠意からであることが信じられた。私たちは腰を下ろしたが、私は彼が語り出さない暇に、私はしばらく彼の顔を、半ば哀れみと、半ば畏れの感で噴めた。ロデリック・アツシヤアの如くに斯くも僅の間に、斯くも恐しく變り果てた人間が會つてあつたであらうか！ 私は自分の前にゐる男が、少年時代の遊び仲間と同一人であるとは容易に信ずることが出来なかつた。それでも、彼の顔の特徴は常に著しかつた。死人の如き顔色。大きな、清澄な、類なき煌きを含んだ眼。いくらか薄い、蒼ざめた、併し優れた美しい曲線を作る唇。繊細な猶太型ではあるが珍らしく均齊のとれた幅の鼻孔をもつた鼻。見事に形ら造れた、突出てゐないために何となく道義的精力の缺乏を語つてゐるやうな顎。蜘蛛の巣より軟く細い毛髪。これらの特徴は顛顛の上の邊の竝々ならぬ廣さと共に、容易に忘れ得ない容貌を構成してゐた。ところが今は、さうした顔立、ならびにその上に泛ぶ表情の主なる特徴が單に一層著しくなつたばかりだが、私はさて誰と向き會つて話をしてゐるか疑ひ度くなる程甚だしく變り果ててゐるのであつた。今や屍の如く蒼白な皮膚の色と、不思議な眼の輝きとは、わけて私をおどろかし、又畏れさせた。絹の如き頭髮もまた蓬々とのびて、まるで粗い紗の織物の如く顔へみだれか、り、と言ふよりもむしろ浮び漂つてゐるのであつたが、私にはどうしてもその幻想風の面貌を常人のものとは考へることが出来なかつた。

私は忽ち友の態度の中のひどく辻褃の合はない點——矛盾に胸をつかれた。そして直ぐに、それが



絶え間ない痙攣——烈しい神経の興奮に打ち勝たうとする弱々しい甲斐ない努力の連続から来るものであることを知った。尤も事實かうもあらうかと私は豫期してゐた。彼の手紙は言ふでまもないが、彼の幼い時分の特異な性質に就いての記憶や、または彼の異常な生理的な構造や稟性などから導かれた結論などに依つて、さう豫期することは可能であつた。彼の動作には陽氣と陰氣とが交互に現はれた。彼の聲は優柔不斷な顫へ聲（活氣が全く消え失せてしまつた時に於ける）から急速に、精力的な齒切れのよい——唐突の、重々しい、洞間聲や——生氣のない、わざとらしい、よく調子のとれた喉聲、たとへば醉漢や、手のつけられぬ阿片溺愛者などが最もひどい興奮状態にある時に發するやうな聲音に變つて行つた。

彼はそんな風な調子で、私を招んだ目的や、私を待ち焦がれてゐたことや、彼が私から期待する處めに就いて話した。そしてまた、彼がその病氣の性質と考へてゐるものに關して可成詳しく語つた。それは生まれながらの、しかも血統的な病であつて、治療法などを見出すことは、絶望であると言つた。併し——單なる神経的の病に過ぎないのだから、いくばくもなくして必ず過ぎ去つてしまふに違ひない、とつけ加へた。その事は自身異常な感覺のかたまりであることをしめしてゐた。かうした彼が仔細に語る言葉の中には私を興がらせ或は戸惑ひさせるものがあつた。おそらく彼の言葉遣や話し振りなどの凡てが妙からずさうさせたものではあらうけれども。彼は感覺の病的な鋭敏さに甚だ惱まされてゐたので、最も無風味な食物しか攝ることが出来なかつたし、衣服も或る定まつた地質のもので

なければ着られなかつた。また凡ゆる花の香が息苦し過ぎ、眼は極めて臆な光にも苛まれた。併し、音は不思議にも、ただ一つ絃樂器の響だけが彼の心に恐怖を吹き込まなかつた。

私は彼が一種の奇怪な恐怖の奴隷になつてゐることを覺つた。「僕は滅びてしまふ」と彼は言つた。「僕はこの憫むべき思かさのために、必ず滅びなければならぬのだ。こんな風に、こんな風に、他のことではあり得ないさ、僕は失はれてしまふのだね。僕はこれから先の出來事がそれ自身ではなく、その結果が恐ろしい。あらゆる、それがこの堪へ難い魂の動搖の上に倒くものであつたなら、假令どんな些細な出來事であらうとも、僕は戦慄する。僕は事實、危険に對しては——その絶對的な結果——恐怖さへ除けば、何の憎惡も抱かないのだ。この弱り果てた——この憐れむべき状態に於いて、おそかれ早かれあの終結がやつて來ることを僕は感ずる。そしてその時こそは、忌はしい「恐怖」の幽霊と闘ひながら、命も理性も悉く抛棄しなければならぬのだ。」

私は更に、折々きれきれに語る曖昧な暗示から彼の病状のもう一つの異常な特質を知つた。彼は自分の住まつてゐる家、そしてそこから多年の間決して立ち出でようとしなかつたその家に關して、それは再び茲に述べるには餘りにも影の如き言葉を以て彼の口から説かれた或る力——彼の古い屋敷の形や實質の中にある特殊な何ものか、長い間の屈從に依つて、と彼は言つた、彼の魂を占領した或る力——灰色の壁や、櫓や、またはそれらのすべてが覗き込んでゐる仄暗い沼などの特異な風貌が、遂に彼の精神状態に齎した或る效果——に關して、一種の迷信的な感念に囚はれてゐた。



彼は併し、斯くも彼を苦しめる特殊な憂愁の大方は、もつと自然な、もつと適かに明白な原因——  
永い歲月の間の彼のたゞ一人の伴侶であり、地上に於ける最後の肉身であることよなく愛ほしい妹の  
——重い長病ひ——事實明かに近寄りつゝある臨終——に根ざすものである事を、躊躇ひながら、認  
めた。「彼女の死は」と彼は、私の決して忘れ得ぬ痛ましさを以て言ふのであつた。「この僕を（望み  
もなく覺束ない僕を）連綿と古く傳はつたアッシャア家の最後の者として取り残してしまふのだ。」と  
ころが、彼がさう語つた折、マドライン嬢（さう彼女は呼ばれてゐた）は、ゆつくりと、此部屋の遠  
い邊を横切つたが、私の姿に目をとめることもなく、消えた。私は、おどろきと恐怖とを以て彼女を  
眺めた——説明し難い感情であつた。私は歩み去る彼女を茫然として噴めてゐた。遂に、扉が彼女の  
背後に閉められた時、私の眼は本能的に彼女の兄の面を熱心に捜し求めた。が、彼は顔を兩手に埋め  
てゐた。そして私はただ、常よりもはるかに青ざめた色が、その瘦せ細つた指に擴がつて、その合ひ  
間から烈しく、涙の滾れ落ちるのを見ただけであつた。

マドライン嬢の病氣はもう長いこと熟練な抱へ醫師を手古摺らせてゐた。慢性の無感覺で、體は次  
第に衰弱して、屢々一時的ながら局部的の硬直症に襲はれるのが、その普通の症状であつた。これま  
で彼女は氣強く病苦に堪へて、到頭床に就かなかつたのだが、私が此家に到着して日が暮れ切つた時  
分に及んで、彼女は（その夜彼女の兄が名狀し難い興奮をあらはして言ふところに依れば）遂に破壊  
者の強暴な力の前に屈服してしまつたのであつた。そして、私が彼女の姿をみとめた一瞥こそ、斯く

して恐らく私には最後のものとなるであらう——酸くとも、令嬢の生きてゐるうちに再び見ることの  
最早難いことを私は知つた。

數日の間、彼女の名を我々は口にしなかつた。私はその間只管友の憂愁を和ぐべく力めてゐた。私  
たちは共に繪を畫いたり、讀書をしたり、或はまた彼の奏でる六絃琴の奔放な即興曲に、夢の如く耳  
を傾けたりした。かうして、私どもが親しくなればなる程、一層隔てなく彼の心の奥底を覗けば覗く  
程、悲しいことにも、まるで生れつきの絶對的なもの、如く、魂の上にも肉體の上にも限なく漲つ  
てゐる闇の中から、彼の心を樂しませようとするこゝろみの全く甲斐ないことを見てとつた。

私は、このやうにしてアッシャア館の主人とたつた二人で、過した嚴肅な時間を、けつして忘れる  
ことはあるまい。だが、彼が私を誘ひ、導いてくれた研究や爲事の正確な觀念をはつきり述べ傳へる  
ことは到底覺束ない。はげしい、物狂ほしい觀念が凡てのもの、上に硫黄の如く煌きを投げかけてあ  
たのである。彼の即興の長い挽歌は永久に私の耳に鳴つてゐることであらう。その他の事のうちでは  
フォン・ウェーベルの最後の圓舞曲の奔放な旋律を誇張した異様な變奏曲を私は傷ましく心にとどめ  
てゐる。彼の精緻なる空想を盛つた繪、一筆毎に一層何故にとも知れない戦慄を禁じ得ない朦朧たる  
ものとなるのだ——これらの繪から（その像は今もなほまざまざと目に浮かぶのだが）單なる文字や言  
葉の領域に屬し得るものを見出すことは至難であつた。驚くべき單純さと、その構圖の露骨さに依  
つて、彼は注意を捉へ威壓してゐた。若しも世に一つの感念を描き得た人間があつたとしたならば、



其人間こそロデリック・アッシャアでなければならぬ。私にとつては、尠くとも——當時私を取り圍く状態にあつては——憂鬱病患者が畫布の上に描き表はした純粹な抽象から烈しい堪へ難い畏怖、フューゼリイ（一七四一——一八二五瑞西の畫家——譯者）のきらきらしてはゐるが餘りに具象的な幻想を見まもつた時ならば、決して其影だに感じられなかつた程の畏怖が湧き起るのであつた。友の幻影的な概念の中の、左程抽象的と言へない或るものは、幽かながら言葉のうちにも影を映し得るかも知れない。一枚の小さな繪は、途方もなく長い、長方形をした窓か隧道かの内部の、滑らかな白い、少しの變化も模様もない低い壁のある圖であつた。構圖の或る補助物は、此地表面からずつと深い處に横つてゐる洞窟の感じを極めてよく傳へてゐた。その廣大全面の如何なる個所にも、たつた一つの出口すら見當らなかつたし、又炬火や其他の人爲的な光源は一つも認められなかつたが、烈しい光線の流れが遍く満ち溢れて、一切を蒼ざめた不似合な光輝を以て浸してゐるのであつた。私は既に、友の傷いた聽神經には、凡ての音樂が堪ふべからざる苦痛なのだが、併し唯一つ絃樂器の彈音だけは例外であることを述べた。多分この限られた範圍が、彼をして六絃琴にのみ耽けらしめて、遂に甚だその演奏の幻想的性質を生み出したものであらう。併し、彼の即興曲の熱情的な巧みさについては殆ど説明することが出来ない。彼の幻想曲の、樂曲はもとより、歌詞も亦、（彼は自ら幾度となく韻律正しい即興詩を以て曲に和したのである）只管、無上の藝術的興奮の特殊な瞬間に於いてのみ認め得ると私が前に述べた、強度の心の平靜と統一との結果に違ひなかつた。これらの狂想曲

の中の一つの歌詞を私は容易に記憶した。それと言ふのも、おそらく彼がこれを作つた時、その中にひそんだ不思議な意味の流れに、私は初めて、アッシャアが己に自分の尊大な理性が玉座の上で崩壊して行きつゝあるのを充分に意識してゐることを認め得た——と思つた事實が一層私の心をうつつたのであらう。「幽靈殿」と題された詩は、全く正確ではないとしても、略次のやうであつた——

I

わが谷間、綠濃き中に  
天使らの住みなれし  
美はしの、巨大なる宮殿——  
輝きの宮殿——  
「思想」なる王の統す國に  
高々と蔓聳えし。  
かの大翼天使の翼すら  
未だ、かくも美はしき宮殿を知らず。

II

黄なる、煌ける、黄金めく



色とりどりの旗、  
夢に流れ、飛び交ひぬ。

(ああ、さあれ、そはすべて

昔むかしの物語、)

その昔、甘美かりし時、  
そよ吹きしかの軟風は  
旗なびく白き砦を越え  
香床しき翼のままに  
早や消えゆきし。

III

幸の谷間さまよふ者は  
輝ける二つの窓邊より  
調整ひし琵琶につれて  
玉座を繞る心の精を見しならん。  
そが玉座には

(ああ紫の御子よ)

榮光に相應る壯麗の容して  
この國の王者の姿拜まれつ。

IV

眞珠紅玉

眩きものは宮殿の扉。

そが扉くぐりて

流れ、流れ、流れて入りしは

永久に煌く木魂の群れぞ

木魂歌ひつ、

甘美し聲にて、

たぐひなき王者の力と智慧を  
讃へてありし。

V

されど、はや禍津神入りぬ、

哀れみの衣まとひて。

王者の高き御位、襲はれ果てぬ。



(ああ哭しめよ。君が上に)

黎明の光また來たることなし。

ああ、うらぶれの君。

紅色に笑み花とひらきし榮光も

昔語ぞ。

埋もれ果てし日のおぼろなる遠き灯ぞ。

VI

今や、谷間行く人々の見るものは

赤き灯影の窓べの中、

調べ壊れし樂の音につれて

おぼろおぼろに揺るる物影。――

數多群れなし早瀬なし

色うつろひし扉くぐりて

どよめき流るる

妖しき物の影のみぞ

ああ、かくて、痴き咲笑ひびくとも

――かの微笑の絶えてなし。

この詩の與へる暗示が、私をある一聯の考へに導き、その考へがアツシヤアの説を明かにしたことを私はよく憶えてゐる。その説の珍奇であることよりも、彼はまことに執拗に固持したことを私は憶えてゐる。それは大體に於いて、凡ての植物が感覺を有してゐることに就いてであつた。併し、彼の放恣な空想に依つて、この感念は一層大膽な性質をとり、そして或る條件の下に、無機物の領域にまでも侵入してゐる。私は彼の信念の全量、また熱心の程度を言ひ表はす言葉を持たない。その確信は、併し、(私が前に鳥渡仄めかしたやうに)彼の先祖傳來の家の灰色の石と係りをもつてゐた。感覺性の條件はこれらの石の配置の仕方の中に――また、その上に襲ひかぶさつた無数の葦や、周圍に立ち竝んだ枯木の中に――とりわけ、久しい間に互つてこの配列の擾されることもなく續いてゐたことの中に、そしてまた沼のものと静かな水に落ちた反映の中に、満ち渡つてゐるものであると彼は想像した。その證據――感覺性の證據は――(私は彼の語るのを聞いて吃驚した)壁や水の上の大氣の漸次的な併し明白な凝結に依つて見ることを得るのであつた。その結果は、幾世紀かの間に彼の一族の運命を形づくり、また彼をして、現在私の前にあるやうな男にしてしまつた、その祕やかな、執拗な恐るべき影響を見ればわかる、と彼は付け加へた。斯うした説は、全く註釋を要さぬであらうと思はれる。



我々の書籍類は——それは久しい間に尠からず病人の精神に影響してゐたのだが——果して甚だ幻  
影的な性質を多分に有してゐるものばかりだつた。我々が讀み耽けたものは次のやうな著作であつ  
た。グレセの「ヴェルヴェルとシャルトルウス」。マキアベルリの「ベルフィゴオ」。スエデンボルグ  
の「天國と地獄」。ホルベルヒの「ニコラス・クリムの地下航海」。ロバート・フラッドや、ジャン・ダ  
ンダジイネや、ド・ラ・シャンブルの「觀堂術」。テイクの「適かなる蒼海への花」。カムベネルラ  
の「太陽の都」等々。またアイメリックの「宗問所の掟」が愛惜の書であつたし、アフリカのサタ神  
とパン神とに關するポムボニウス・メラの一節はアッシヤアを幾時間も夢の中へ誘つた。併し、彼の  
主なる悦びは何と言つても、非常に珍奇なる忘れられたる宗派の覺え書——「メイエンス派の合唱に  
従つて行はれる通夜」の中に見出された。

私はこの本に記された荒まじい儀式が憂鬱病患者の心に與へた多分の影響を考へずにはゐられなかつた。それと言ふのは、或晩唐突に彼はマゼライン嬢が己に世にないことを私に告げ、そしてその遺骸を十四日の間（最後の埋葬をする前に）家の壁の内側にある數多い窖の一つに保存して置くつもりであることを語つたのである。私の理性はこの企てに逆ふことが出来なかつた。彼は妹の病氣の性質や、醫師の追究的な調査や、家族の墓地が遠くへだて、さらされてゐることなどを考へ合せて、この決心に至つたものである（と彼は言つた）。私は到着した日に階段のところに出遇つた男の不吉な顔を思ひ浮かべると、結局無害なまた萬更不自然な用心とも言へなかつたし、反對する氣にもなれなかつた。

かつた。

アッシヤアの請で、私自身もこの假埋葬を手傳つた。死體は柩に納められてあつたが、我々は二人きりでその安置所へ運んだ。それを入れるべき窖は（それはあまりに永い間開けられたことがなかつたため、我々の炬火はその激んだ空氣に窒息しかけて、殆ど何も見究めることが出来なかつた）恰度私の寢室の眞下に當るあたりの底深く、小さく、濕つて、微かな光さへも洩れなかつた。それは正しく遠い封建時代には忌はしい牢獄として用ひられてゐたものが、近代に至つてから火藥或は其他の危険な燃焼物を蓄へて置いたものらしく、床の一部分及び我々が潛つて行つた長い拱門の全面に限なく銅が着せてあつた。頑丈な鐵の扉もまた同じやうに保護されてゐた。それは非常に重く、蝶番の動く度に異様な軋聲を響かせた。

哀しみの重荷を恐怖の房の架臺に載せると、我々は未だ締め釘をさしてない柩の蓋を半ば開いて、中の顔を覗き見た。兄と妹との間の洵におどろくべき容貌の相似が初めて私の注意を惹いたが、それと察したらしくアッシヤアが呟いた言葉に依つて、死者と彼とが雙生で兒あつたこと、また二人の間に常に漠とした交感の存在してゐたことなどを私は知つた。併し我々は直ぐに眼をそ向けた——我々は畏怖なしに彼女を噴めることが出来なかつた。青春の盛りの日にある婦人を葬つてしまつたこの病氣は凡ての劇烈な全身硬直症の通例として、胸や顔に空しくかすかな赤みを残し、唇には死人に於いてはむげに怖ろしい微笑の影を止めてゐた。我々は蓋を置き直して、締め釘をさすと、鐵扉を閉ざ



して、辛つと上の方の殆ど變らぬ位に陰氣な部屋へ戻つて来た。

さて、幾日かの哀傷の日が過ぎる中に、友の病める心の上に見えて變化が生じた。彼の日頃の爲種は失はれた。彼の日課は等閑にされ、若しくは忘れられた。彼は部屋から部屋を、周章しく、唐突に、當もなく歩き廻つた。顔色の蒼白さは、更に凄然と青褪め——眼の輝きは全く消えてしまつた。嘔れてゐた聲は最早聞かれなくなつて、その代りに、恰もおそろしく怯えてゐるかのやうに、絶えず震へ聲で彼は喋つた。事實は私は幾度か、彼の心の不安は、何か堪へ難い大きな祕密をつゝみかねて、それを洩すまいとして苦しんでゐるためではなからうかと考へた。また或る時には、私は一切を他愛もない狂氣の妄想と合點しなければならなかつた。と言ふのは、彼が長いこと、注意深さうにまるで何か幻想の物音に耳を倚てるかのやうな風に、あらぬ方を、凝と目を瞞いて噴めてゐるのを私は見かけるのであつた。彼の恐怖は當然——私にまで染み込んで来た。私は彼自身の妄想的な併し力強い迷信の影響が、徐々と、併し確固とした足どりで、私の身に這ひ上つて来るのを感じた。

マデライン嬢を牢獄の中に移してから七八日経つた頃の夜更けて、寢床に入らうとしてゐた矢先、私はとりわけこの氣持を深く感じた。眠りは却々近寄つて來なかつた——そして時間は徒に消えて行つた。私はこれを只管神経過敏症に片附けようとした。私はその感じが、全部ではないにしても、大部分は部屋の憂鬱な調度の——暴風の息吹で氣紛れに壁の上に揺れ動き寢臺の飾り付けの邊にはためくぼるぼるの掛布等の——奇妙な影響に依るものであると信じようと力めた。併し私の努力は甲斐

もなかつた。抑へ難い戦慄が體中に浸み渡り、竟に私の心臓は全く理由知らぬ夢魔のために壓しつけられてしまつた。私は喘ぎ跳きながら、これを拂ひのけると、半身を枕の上に起して、ぢつと漆黒の部屋の闇の中を窺ひ耳を澄ませた——何故とも知らなかつたのだが、本能的にさうさせられたと言ふより他ない——或低い覺束ない響が、暴風の絶れ間絶れ間に、長いこと何處からともなく聞えて來るのであつた。烈しい、不可解な、しかも耐ふべからざる恐怖の感情に打ち負かされた私は急いで衣服をまとふと、(何故なれば、最早夜中眠れない氣がしたので。)この隣れむべき状態から自分を引き上げ

るべく躍氣となつて、部屋の中をあらゆるこちらとせはしく歩き廻つた。併し、こんな風に幾度も繰り返さない中に、階段を上がつて來る軽い聲音が私の注意を惹いた。私には直ちにそれがアッシャーであることが解つた。そしてすぐ、彼は私の扉を靜かに敲いて、洋燈をかざしながら入つて來た。彼の顔色は例に依つて屍の如く青ざめてゐたが——併し更に、彼の眼は一種の狂ほしい歡喜が輝いて——すべての態度の中に明かに抑へつけられた歇私的里亞が現はれてゐた。彼の様子は私を怯えさせた——併し、ともあれこの忌々しい孤獨よりはましだつたので、私はむしろ救はれた程の氣持で彼を歡迎した。

「で、君は見なかつたのだね？」彼は暫く黙つて私を噴めてゐた後で、唐突にさう言ふのであつた。「それでは、君は見なかつたのだね？」——だが、待ち給へ！——見せてやらう。」彼は斯う言ふと、用心深く洋燈を載ひながら、急いで窓の傍へ歩み寄つて、その扉を暴風の中へ開け放つた。



猛り狂つて吹き込む疾風は、殆ど我々を足もとからすくひ上げんばかりであつた。それは洵に烈しい、併し凄しく美しい夜で、その恐怖と美しさとを織り交へた中に喩ふべくもない異様なものがあつた。まさしく我々の邸の近邊に一つの旋風が勢を集中してゐるらしく、屢々猛烈に風の方向が變り、そしておそろしく厚い雲の密度は（それは邸の櫓を壓して低く垂れ下がつてゐた）それぞれの方角からお互ひに遠く行き違ふことなく飛走して來る雲の生物の如き速力を觀察することを妨げなかつた。

左様、洵に雲の厚さはこれを觀察するのを妨げはしなかつたが——併し我々は月や星をちらりと覗き見ること出来なかつたし——また滔妻の閃きも見られなかつた。けれどもその動きつつある巨大な煙霧の下面は、我々の直ぐ周圍の地上のすべての物象と等しく、邸を包んで蔽ひ懸つてゐる薄い光を放つてはつきり見別ることの出來る瓦斯質の蒸氣の妖しい明るみの中に躍いてゐた。

「いけない——君はこんなものを見てはならん！」と私は身を慄はせながらアッシャーに言ふと、彼を窓から席へやさしく引き摺り戻した。「斯うした状態は、君を吃驚させたらしいが、少しも怪しむに足らない單なる電氣の現象であるか、或は沼の劇しい疫瘴氣がその忌はしい原因であるかも知れない。さあ、窓を閉めようではないか、空氣は冷えてゐるから君の體に毒だ。君の愛讀の物語本が此處にある。僕が讀むから聽きたまへ。さうして一緒にこの恐しい夜を明かさうではないか。」

私取り上げた古めかしい一巻はランスロット・カニング卿の「狂氣の會合」で、アッシャーの愛

讀の書と言つたが、けれども寧ろそれは悲しい冗談からなので、何故と言つて事實は、この如何はしい幻滅的な冗漫極る物語の中に、友の優れた空想的な心を充たしてくる程のものは殆どなかつたのである。それは、併し、手近にあつた唯一の本で、私はこの愚しい骨頂の小説でも、それを讀むことによつて多少なりと彼の興奮が救はれはしまいかとわづかに希つたのであつた。ところが、果して彼が物語の文句に異常に緊張した様子で、耳を傾ける、若しくは耳を傾けるらしいのを見てとつて、私は計畫の圖に當つたことを私かに喜んだわけである。

私は物語中の名高い部分、即ち會合の英雄エセルレッドが、隱者の住居に穩當な方法で入ることに失敗して、武力を以て押し入らうとするあたりに達した。その條は、次のやうに憶えてゐる——

「さる程にエセルレッドは心猛き性にして、更に今はあふりたる酒の勢により、最早やこのまこと頑にも悪意深き隱者との談判を待ち兼ね、しかも肩に雨の落つるを覺えて暴しの起らんことをおそれたれば鎚矛を揮つて忽ち扉の板張りに籠手をはめたる手の入るべき程の穴を穿ちて、力委せに押しまくくり、ばりばりと引き裂けば、微塵と碎ける木の虚なる響は森中に木魂して轟き渡りたり。」

この一節の區切りに於いて私は吃驚してしばらく言葉を送切らせた。と言ふのは偶と私には（私は直に唆かされた空想が自分を欺いたものと納得したが）邸内の何處か非常に遠い邊から、不明瞭に、恰度ランスロット卿が叙述したバリバリと引き裂く物音の反響と全く同じやうな（尤も幾分窒息せられて懶いものではあつたが）響が私の耳に聞えて來るやうに思へたのである。私の注意を捕へたもの



は疑もなくただこの一致のみであつたが、窓枠のカタカタ鳴る音と、なほ吹きまざる暴しの騒音との真中で、この響きはもとより私を興がらせ、若しくは妨げる程のものではなかつた。私は物語を續けた——

「しかるに、勇士エセルレッドは今や扉の中に入るに及びて、悪むべき隠者が合圖のなきことを知るや大いに憤り且つ驚きしが、その代り其の場に、鱗に蔽はれ凄じきさまの龍の炎の舌を吐きつ、横たはるのに護られて、白銀の床を敷きたる黄金づくりの宮殿の壁に、煌めける真鍮の楯をば懸け、その表には斯かる銘の刻まれたるを見たり。

「此處に入る者は勝利者なり。  
龍を屠りたる者は、この楯を得べし。」

「是に於いてエセルレッドは鎚矛を振り上げ龍の頭を強か一撃すれば、脆くも倒れ落ちて、毒氣を吐きつつ恐しき叫びを上げたるに、その聲のあまりに鋭く、刺し貫かんばかりなりければ、エセルレッドも堪へかねて思はず耳を蔽ひたる程なり。」

こゝで私は再び唐突に、此度は無性に驚かされながら、言葉を途切らせた——何故なれば今度こそ私は実際に紛れもなく（何處から洩れて來るのかは言ふことも出來ないのだが）低い確かに遠方らしい、併し鋭い、長びく、且つ極めて奇異な叫び聲、若しくは軋音——私が既にこの物語作者に依つて描寫された龍の奇怪な悲鳴が斯うもあらうかと空想したものとそっくり同じひびきを、はつきり耳

に聞いたのであつた。

この瞬間の最もおどろくべき合致こそ疑ふべからざるものであつたので、私は訝しさと大きな恐怖とが先にたつ數限りもない矛盾し合つた感情に壓し挫しがればしたものの、それでもなほ友の感じ易い鋭い神経の反應を觀察することに依つて、興奮をさけるだけの心の裕を残してゐた。彼の様子には數分の暇に著しく怪しい變化があらはれてゐたが、併し果して疑問の音に氣がついたものか否かはもとより定かではなかつた。彼は私と向き合つた位置に、椅子を次第に廻して、部屋の扉に顔を向けて坐つてゐたので、私には彼の顔の一部分しか眺められなかつたのだが、それでもその唇が何か聞きとれないことを呟いてでもゐるかのやうに慄へてゐるのを見ることが出來た。彼の頭は胸の中へ落ち込んでゐたのだが、併し私は彼の横顔を一瞥してその大きく凝と見開かれた眼を認めることに依つて、彼が眠つてゐるのではないことを知つた。彼の體の動搖もまた眠つてゐるのには相應しくなかつた——彼は左右に靜かに、併し絶えず一定の揺れ方に、身をゆすつてゐるのであつた。私は斯うし

たすべてを素早く見とつてから、再びランスロット卿の物語を取り上げた。  
「斯くて勇士は龍の恐るべき危難を免れたれば、真鍮の楯を思ひ合せ、またその表に記されたる魔法を破らんものをと、途を塞ぐ龍の死體をば片寄せ、勇ましく城の白銀の床を踏み渡りて、壁にかけられたる楯のもとへと近附きたりけるに、それはまことに彼のさし寄るを待つ間もあらで、錚然たる凄じき響と共に床上に轉がり落ちける。」



この一句が私の唇を過ぐるよりも早く——恰も眞實、この瞬間に眞鍮の楯が銀の床の上へ鏘然と鳴つて倒れ落ちたかの如く——私は明瞭に、朗かな、よく轟く金屬性の音が、おし消されたやうな響ではあつたが、反響して鳴り渡るのを聞いた。私は悉く膽を奪はれてとび上がったが、併しアッシヤアの體の規則正しい揺れ方は些もみだされなかつた。私は彼の坐つてゐる椅子へ馳け寄つた。彼の眼はちつと前方を見つめたまゝで、顔全體には石の如き硬直した表情が漲つてゐた。併し私がその肩に手をかけるや、彼の全身は激しい顫動に襲はれ、不吉な微笑が唇に震へ、そして私のあるのにも氣がつかない様子で、低聲で何か早口に斷絶なしに呟いてゐるのを私は見た。びつたりと彼の上に身を屈めながら、私は竟に彼の忌まはしい言葉を聞きとることが出来た。

「聞えない？——さやう、僕には聞えるよ、前から聞えてゐた。永い——永い——永い間——幾分間となく、幾時間となく、幾日となく、僕にはそれが聞えてゐた——だが僕には到底——おお、哀れんでくれたまへ、何と言ふ惨な奴だ！——到底——僕には言ひ出せなかつたのだ！——すると、どうだ——今夜——エセルレッドが——は！——は！——は！——隱者の扉を破るのと、龍の死の叫びと、楯の鳴りひびく音ではないか！——さうさ、彼女の棺が剝がれるのと、その牢獄の鐵の蝶番が軋る音と、それから窓の銅を張つた拱道の中で彼女が蹴く音さ。何處へ僕は逃げられやう？——彼女は直ぐに姿を現はすのではあるまいか？——彼女は僕の氣早やを責めようとして忙はしくやつて來るのであるまいか？——彼女が階段を上がる蹙音ではなかつたらうか？——彼女の心臓が強く恐しく動悸して

あるのが聞えるのではなからうか？——氣ちがひ奴！——そこで彼は狂暴に飛び上がると、死物ぐるひの聲で斯う叫び立てた。——「氣ちがひ奴！——彼女は扉外に立つてゐるではないか！」

恰も彼の言葉の超人間的な氣力の中に呪文の力でもひそんでゐたかの如く——彼が指した大きな古代風な鏡板は、その途端に、重々しい黒檀の額を徐に開け放つた。それは烈しい突風の仕業であつたが——併し、この時扉の外側にマデライン・アッシヤ嬢の丈高い壽衣を纏つた姿が亘んでゐたのであつた。白い長衣は血に塗れ、また彼女の瘦せ細つた體のいたるところにひどい苦闘の痕をとめてゐた。しばらく、彼女は身を慄はせながら闘の上によろめいてゐたが——低い哀しげな呻き聲とともに、ドサリと彼女の兄の體の上に落ちかゝると、荒々しい斷末魔の苦悶の中に、彼が恐れながら豫期してゐた結末の如く彼をば屍として床の上に押し伏せた。

その部屋から、その屋敷から、私は夢中で逃れ出た。古い盤石道を私が横切つて走る時に暴風は未だ荒れ狂つてゐた。突然小路に沿つて、ギラギラした光の流れが迸つた。私は何處からそんな不思議な閃光が洩れたものであらうかと振り返つた、何故と言つて私の背後にはただ宏大なる屋敷とその影とがあるばかりだつたから。その輝きは、今しも沈みかけた血紅色をした満月のそれで、前に私が述べたこの建物の屋根から土臺にかけて鋸齒狀に延びるあの見分け難かつた罅隙を通して鋭く照り煌いてゐるのであつた。と、見る見る、この罅隙は急速に擴がつて、さつと凄じい旋風の息吹と共に、月の全輪が現はれた。そして私は烈しい眩暈に襲はれたかと思ふ間もなく、巨大な壁は微塵に碎け散



り、千百の水の聲の如き騒がしい叫音が永いことひびいて、さて私の足許の深く暗い沼は、不機嫌に黙々と、「アッシュア館」の破片を呑み盡してしまつた。

——終——

# キリアム・キルスン

それが何だと言ふのだ？  
齒をむき出して笑ふ「良心」  
我が行途を遮る妖怪が何だと云ふのだ？

——キエンバアレエンのフェロニダ——

今のところ、假りに私の名をキリアム・キルスンと呼ばしておいて貰ひたい。敢へて私の本名を明かして、この清浄な紙面を汚すのはあまりにも本意ない。既に私の名は私の家門をこの上もなく侮蔑させ、嫌悪させるに充分だつた。私の恥さらしの汚名は、地球の果てにまで吹き傳へられてしまつたではないか。ああ、破落戸の中の破落戸よ！——お前はもうこの地球上から永久に亡びてしまつたのだ！私の名譽も、榮華も、燦たる理想も、永劫に死んでしまつた。——どす黒い、陰鬱な、はてしもない妖雲が、お前の希望と天國との間にたちこめてゐるではないか？  
私は最近数年間の、私の言語に絶した不幸と、許すべからざる罪惡との記録を書きしるすことが、假令出来たにしたらところで、今此處ではそんな事をしようとは思はない。此の時期——最近の数年間に——私は急速に、途方もない悖道徳へ深く踏込んで了つたのであるが、どうして私がそんなに墮落



するに至つたかといふ原因だけを記さうと茲に思ふのだ。人間といふものは大むね年と共に徐々に墮落して行くものである。ところが私の場合は、すべての善徳といふものが一瞬間に、まるでマントをでも脱ぎすてるやうに、すつぱりと私から離れて行つてしまつたのである。私は、ほんの取るにも足らぬ罪過から、一足飛びにエラア・ガバルズも及ばぬ大罪を犯すやうになつてしまつた。どんな機会に——どんな出来事が、そんな風にさせたかと、今私の述べるところにしばらく堪へて耳を藉して欲しい。私には死が目前に近づいてゐて、それを前觸れする陰が、私の心を殊の外やはらげてくれる。私は今、薄暗い隕府の谷間を通り過ぎながら、世の人々の同情を——いやむしろ憐憫ともいふべきであらう——を切望してゐる。私はある點までは人力ではどうする事も出来ない、周囲の事情の奴隸となつてゐたのだといふ事を、それ等の人々に信じて貰ひたい。私がこれから述べようとする詳しい物語のうち、過失の荒野の中から、私の力では如何とも避けがたい宿命の小さなオアシスを見つけて出して貰ひたいのである。これまでも、假令、かくも甚しい大きな誘惑が存在したにしても、少くとも、かくまでに誘惑された者はかつてなかつたといふ事、——かくまでも深くそれに陥つた者はなかつたといふ事を私は認めて貰ひたい——全くこれは誰でも認めないわけにゆかないだらう。そしてこれは、嘗つて私ほどひどい苦しみをなめた者がなかつたからではあるまいか？ 私は實際夢の中に生きてゐたのではなからうか？ 私はいま、現し世のあらゆる幻影の中でも、最も怪奇極る、不思議な、恐しい幻影の犠牲となつて死んでゆくのではあるまいか？

私は古くから空想的な、且つ容易に興奮し易い氣質で知られてゐる一門の裔であつたが、私自身も、ほんの幼い頃に於いてすでに、先祖の遺傳を十分に承けついでゐる證據を明かに現はしてゐた。しかも成長するに従つて、この特徴はやうやく顯著になつて来て、遂には種々な理由から友達にはひどい心配をかけ、私自身にも甚しい損失を招く原因となつた。私は片意地になり、氣紛れな怪しい妄想に耽るやうになり、全く制御しがたい感情の虜となつてしまつた。私と同じやうに病身で、意志の弱い私の両親は、私の悪い性癖を矯正してくれる事などは到底出来得べくもなかつた。薄弱な間違つた彼等の努力が、悉く失敗に歸して、私の言葉は家法となり、まだ大抵の子供ならやつとよちよち歩ける位の時分から、私は、誰の干渉も受けずに、自分の意のままに振舞ふ事が出来たのである。私の學校生活についての最も古い思ひ出は、英吉利斯の、霧深いある村の中に建てられた、大きな、不恰好なエリザベス朝時代の家である。この村には、節くれ立つた大木が澤山あつて、家といふ家は皆おそろしく古風な造りであつた。實際この村は、夢のやうな、心しづかな、古めかしい町であつた。今でも私は葉かげ深い竝樹道の爽やかな涼しさや、香ぐはしい灌木の林の香氣を思ひ出すことが出来る。そして、ゴシック風の組子細工の尖塔が、樂々と眠つてゐる、ひつそりとした薄暗い空をわたつて、一時間毎に、氣むづかしげな音色を響かせる、教會堂の鐘の虚な階調を聞いて、言ひ知れぬ、ぞつとするやうなうれしさに打たれるやうな氣がするのである。この學校と、これに關係のあることについて、こまごまとした思ひ出に耽るのは、どんな楽しみよ



りも、恐らく一番快いことのやうに思はれる。私はいまいふばかりない悲惨——あゝ！あまりに現實過る悲惨——の中に陥つてゐるのだから、とりとめもなく覺束ない追憶の中に、せめてほんの僅かなその場限りの慰めを求める位は見免して貰へるだらうと思ふ。のみならず、それ自身では、全く取るにも足りない、寧ろ莫迦けても見えるこれ等の事物が、やがて私の身に蔽ひかゝるやうになつた恐しい運命の、最初の漠然とした警告を私が認めた、時と場所とに關係があるものだから、私には偶然にも、それがまことに重大な意味をもつてゐるやうな気がされるのである。

その家は今も言つたやうに、古ぼけた不恰好なものであつた。屋敷は廣くて、その周圍を高い頂にガラスの破片を塗喰で植ゑた頑丈な煉瓦塀が取り巻いてゐた。この牢獄のやうな城壁の内側が、私たちの領界なのであつた。そして私たちは、一週に三度しか、その外へは出られなかつたのである。——一度は毎土曜日の午後、二人の助教員につれられ、附近の野原を一團となつて散歩する事を許された。——それからあとの二度は、日曜日、朝と晩とに、きまつて、村のある教會の祈禱式に列をつくつて出かけるのであつた。我々の校長がこの教會の牧師であつた。この牧師が、靜々と、おごそかな足どりで説教臺へ上つて行くのを、私は、遠くはなれた座席から、どんなに深いあやしみと、不審な思ひとで、眺めたことだらう！ 敬虔な、慈愛に満ちた顔付をして、ゆるやかに、僧衣の裾をゆらめかし、念入りに髪粉をつけた、物々しい、大きな假髪をかぶつたこの老人が、果してつい先頃まで、苦蟲を噛みつぶしたやうな顔をしなから、躡き煙草で汚れた着物を着て、手には鞭をもつて、

學校の嚴しい規則を取りしまつてゐた人間と同じであつたのだらうか？ あゝ、あまりにも奇怪な解決し難いパラドックスではないか！

いかめしい塀の隅に、一層いかめしい門が氣むづかしい顔をしてゐた。厚い板扉には鐵の大きな飾鎖が打ちつけてあり、鐵の尖條が鋸の齒のやうに植ゑつけてあつた。それは何と深い畏怖を私たちの胸に刻み込んだであらう！ この門は前にも言つたとほり、一週に三度の出入りの時の外は、たえて開かれた事がなかつた。この門扉の大きな蝶番が、ぎいと軋るたびに、私たちは數限りない不思議、——物珍らしい、おごそかな冥想をそゝるやうな世界を見出すのであつた。

煉瓦塀の内側は、不規則な形状をしてゐて、澤山の廣い空地が方々にあつた。そのうちの三つ四つの殊に大きい空地が運動場になつてゐた。それは平坦な地面で、きれいな細い砂利が敷いてあつた。そこには樹も、腰掛けも、さうしたものは何もなかつた事を、私はよく憶えてゐた。勿論それは、この家の傍にあつたのである。正面には、黄楊や、その他の灌木を植ゑた小さい花壇があつた。併し、私たちがこの聖神な區域を通ることは滅多になかつた。入學のときとか、卒業のときとか、父兄や友人が訊ねて来たときとか、私達が夏休みやクリスマスに家へ歸るときとかに限られてゐた。

だがその家！何と奇妙な古ぼけた建物であつたらう！ 私にとつてはそれこそ魔法の魅力を持つた宮殿だつた！廻廊は果しなく曲りくねり、屋内の間どりがどんな風になつてゐるのか相像さへつかなくなかつた。突然今あるところは一階か二階かと訊かれたところで、返事に迷ふ程であつた。どの部



屋からもちよつと次の部屋へ行くのに、三四段の階段を上るか下りるかしなければならなかつた。それから側室が無数に——測り難い位——あつて、この家の全體の正確な觀念は、まるで宇宙の無限に對するものと、大して變りがない程だつた。私は五年間もその室に起伏してゐながら、私と他の十八人か二十人ばかりの學生にあてがはれてゐた小さな寢室が、此家のどの邊にあるのかをはつきり知ることがどうしてもできなかった。

教室は家中で一番広い部屋——世界中で一番大きな部屋だと考へざるを得ないほど廣かつた。それは極めて細長い部屋で、うす暗い天井が低く、上の尖つたゴシック風の窓があり、天井は柵でつくつてあつた。この教室の何となく氣味の悪い一隅に、八呎か十呎位の正方形の空所があつて、校長フランスビイ神學士の間には、そこが祈禱所になるのであつた。それは頑丈につくられてゐる、厚い屏がついて居り、先生のゐない時にその屏を開けることは、好んで私たちが嚴重な刑罰に身を亡ぼす覺悟のない限りかなはぬことであつた。他の二つの隅にも、これに似よつた二つの席があつた。この二つは校長の祈禱所ほどには尊敬されてゐなかつたけれど、恐しさに於いては變りがなかつた。一つは「古典」の助教師の教壇であり、いま一つは「英語と數學」との助教師の教壇であつた。室内には、無数の腰掛や机が、それぞれの方角へ向いて、矢たらに亂雑に並んでゐた。机は黒く古ぼけて、いたんで居り、手垢に塗みれた書物が亂暴に積み重ねてあり、頭文字だの名前だの妙な形の繪だの、その仲様々な落書がナイフで殆んど原形を止めぬまでほりつけてあつた。水を入れた桶が室の一端に

置いてあり、他の一端には素晴らしく大きな柱時計がかゝつてゐた。

この尊嚴なる學校の、大きな壁の中に閉ぢこめられながら、私は格別退屈を感ずることもなく、又、厭氣もさゝずに、十歳から十五歳までを過したのである。子供のゆたかな頭腦は強ひて外界の出來事を必要としなくとも、いろ／＼なことを考へ出して楽しむものだ。それで、洵に憂鬱で、單調に見えるこの學校生活も、私にとつては、青年時代の豪華や、後年犯罪によつて、刺戟を求めたりしたのに比べれば、はるかに刺戟に満ちてゐたと云へるのである。それでも私は自分の初期の精神の發展が、少なからず異常を呈してゐたこと——殊の外常規を逸してゐたことさへ信じないわけにはゆかない。通常の人々にあつては、極く幼い出來事で、大人になつてからまでもはつきりした印象を留めてあるものは滅多にない。凡てが灰色の影——極めて覺束ない、とりとめのない記憶となり——かすかな、臆げな樂しさと苦痛の寄せ集めに過ぎない。ところが私の場合は違ふのだ。私は今尙、カルタゴの勳章に刻まれた文字のやうに、まぎ／＼と深く、永遠におぼえてゐる事どもを、きつと子供の時分に大人と同じ感受力で感じたに相違ない。

併し、實際は——世間一般の眼から見れば——今になつて思ひ出すことなどは、殆んど何の甲斐にもなりはしないのだ。朝の眼ざめ。夜は就褥の合圖で床にはひる。讀書や語誦。毎週きまつた半日の休みがある。散歩、運動場、運動場の喧嘩や遊戯や惡戯——こんな事柄がもう長いこと忘れられてしまつた心理的妖術によつて子供の時分には數々の生氣ある事件に満ちた世界、最も情熱的な、感動的



な刺戟に溢れた世界を現出せしめたのである。「お、悦びに充てる無理の時代よ！」

實際に於いて、熱情的な、しかも一途な、我儘な私の氣質は、やがて私を、學生仲間で有名な人間にしてしまった。そして殆ど知らぬ間に、私は、私よりあまり年長でない級友間——唯一人の例外を除いて——で最も勢力ある位置に立つた。その例外の學生は、私と何の關係もなかつたのだけども、苗字も名前も全く私と同じだった。併し別に珍らしい事ではない。私は貴族の出身ではあるが、名前は極く普通の名であつた。凡そかうした名前は長い間に自然と擴まつて、衆愚の共有物と化してしまつたものらしい。それで私はこの物語では、私の名をキリアム・キルスン——本名と甚だ似通つてゐる假名——と命名する事にしたのである。仲間の生徒たちは、私たち二人を、「我等の一對」と呼んでゐたが、この私と同姓同名の男だけが敢へて、學課の勉強に於いても、運動場での競技や喧嘩口論に於いても、あらゆる事に私と競争し、私の主張に反抗し、私の意志に従ふことを拒み、私の横暴な命令には事毎に嘴を容れた。若し地上に、絶對最高の專制といふものがあるとするれば、それこそ正に我儘な子供が己より力の弱い仲間を従へようとするときの專制に他ならない。

キルスンの反抗は私にとつてこの上ない邪魔であつた。わけて私は人々の前でこそ彼などは取るにも足らぬもの、如く、振舞つてみたもの、心ひそかに、私は彼を恐れてゐることを意識してゐたので、いよく彼の反抗がいま／＼しくてならなかつたのである。それにまた彼が易々と、私と對等の態度を保持してゐるのは、實際は私よりも彼の方が一枚役者が上である證據だと考へざるを得なかつ

た。そのために、彼に負けまいとして絶えず私は努力せねばならなかつた。ところが彼の方が役者が上であるといふことはもとより、彼が私と對等の力をもつてゐるといふことすらも、私自身の他には誰一人氣がついてゐなかつたのである。仲間の者は、どういふわけか、そんな疑ひさへもかけてゐなかつた。實際、彼の競争、反抗、特に私の主張に對する彼の執拗にして無遠慮な干渉は、二人だけの場合に最も烈しかつたのである。彼は野心ももたなければ、また心底から我を通す程の氣ももつてゐなかつたので、その爲に私は表面彼より立ちまさつてゐるやうに見えるに過ぎないしなかつた。彼はたゞ單に、私の邪魔をし、私を驚かせ、私の意氣を沮喪させてやらうといふ氣まぐれな慾望だけから私に敵對してゐるもの、やうであつた。尤も時偶ではあるが、彼は私を傷け、侮辱し、私に反抗する行爲の中に、ある説明し難い不氣味な、胸糞の悪い情愛らしいものを混へたことを、私は謎と、屈辱と、憤慨との混つた感情をもつて、氣づいたこともあつた。この奇怪な行爲は、優れた者が劣つてゐるものにわざとやさしくする、完全な自負心から出たものとしか私には考へられなかつた。

多分、キルスンの狎々しい態度と、私たちが同姓同名であること！ それにまた、私たちが同じ日にこの學校へ入學したといふ單なる偶然とが結びついてか、上級生の間には私たち二人が兄弟だといふやうな噂がたつたのだらうと思ふ。彼等は、下級生のことなどに、あまり氣をとめたがらないものなのだ。私は前に言つたと思ふし、また言はなければならぬことだが、キルスンと私の一門との間には、如何なる遠い親戚關係すらもないのである。若し私たちが兄弟であつたとしたなら、きつと雙



生兒だつたに相違ない。それといふのは、フランスピイ博士の學校を出たのち偶然の機會から私は私の同名者が一八一三年の一月十九日生れたといふことを知つた——これは可なり珍らしい暗合である。何故と言つて、私の生れた日もまた正しくその日だつたのである。

訝しなことかも知れないが、キルスンが事毎に私に逆つて私を惱ますために、私はたえて息まるひまさへなかつたのにもかゝらず、私は彼を悉く憎む氣にはなれなかつた。もちろん私たちは、殆ど毎日のやうに喧嘩をして、とにかく表向きは私が勝つたのであるが、どういふものか本當の勝利者は自分であるといふことを私に感じさせようと工んでゐることは疑ひもなかつた。併し、私は私で誇りの氣持をもつてゐるし、彼はまた彼の本當の威嚴をもつてゐたので、私たちの間柄は先づ、「話位はする」と言つた程度の仲であつた。それでゐて、二人の氣質の中には甚だ相似た點が澤山あつたので、私は二人が打ちとけられぬのも、たゞ互ひに競争者の位置にたつてゐるせらうと感じてゐたのである。彼に對する氣持を明確に言ひ表はすこと、否たゞそれを書きしるすことですらかなり困難である。種々雑多な感情の入り交つたものであつた。——氣短かな憤りの感じでもあるが、併し憎悪といふ程でもなく尊敬に近い氣兼ねいくらか混つてをり、恐怖の感じも多分に混へた不安な好奇心であつた。キルスンと私とが切つても切れない一對だつたといふことは今更ら道德家に向つてつけ加へる必要もあるまい。

キルスンに對する私の攻撃（しかもそれは露はな場合もあれば、ひそかな場合も屢々あつた）が開

き直つて敵對するといふやうな態度よりも、むしろ（冗戲のやうに見せかけて相手に苦痛を與へる）冷かし若しくは悪戯になつたのは、きつと私たちの間柄の異常な關係の故にであらう。だがこの點に關しては、私の攻撃は必ずしも成功といふわけにはゆかぬばかりでなく、常に私が最も都合よくくらんだ場合でも不成功に終ることが多かつた。私の同名者の性格には、極めて自然な、いかにも落ちついた嚴格さが具つてゐたので、自分では辛辣な冗戲を言ひながら、そのくせ自分の尻つぼを出さないで、どうしてもはたから遣りこめるわけにはいかなかつたのである。事實、私はたつた一つ彼の弱點を見つけ出すことが出来たばかりである。それは、多分生れつきの疾患から生じたらしい一つの癖だつたので、大抵の者なら見逃してやつてゐたらうと思ふ——つまり彼の咽喉の器官に缺陷があつたので、そのためにいかなる時でも、極く低い嘔き聲しか發することが出来なかつたのである。私は抜からずこのあまり取らへ榮えもしない缺點を捕へると、あらゆる機會で下らぬ難癖をつけるのに失敗らなかつた。

キルスンの私に對する仕返しの種類は澤山あつたが、その中でもとりわけ、私をいたく閉口させることが一つあつた。これしきの他愛もないことで私がそれに閉口することに、彼が最初どうして氣づいたものか私には洵に不思議でならない。だが、一度それを發見するや、彼は始終その手で私を惱ました。私は日頃から私の先祖から傳へられた卑俗な性と、下賤とまで言ひ得ないとしても有りふれた名とに憎悪を感じてゐた。私は自分の姓名を聞く時には、まるで耳の中へ毒を注ぎこまれる程の氣持が



した。それで、私が到着した日に、圖らずも第二のキリアム・キルスンが同じ學校へ入學して、彼の名前が私と同じである事を知つた時には私は無性に腹立たしくならなかつた。しかも、赤の他人でありながら同性同名であるために、私の名は二倍だけ餘計に呼ばれなければならないし、その男は始終私と顔をつき合はせるのであらうし、又その男のことはこの忌はしい暗合のために何かにつけて、私自身のことと混同されるであらうから、私はいよいよこの名前が厭になつた。

かうしたことに起因する苦痛の感情は、私と私の敵手との精神的及び肉體的の相似が事毎に明かに示されるにつれて、ますます強められた。當時は私は未だ我々二人が同年同月同日に生まれたと言ふ途方もない事實を發見するに到らなかつたが二人が同じ身の丈であることや、全身の恰好から顔の輪郭まで不思議に似通つてゐることには氣がついてゐた。そればかりでなく私は上級生の間に漸く擴まつてゐた二人の血族關係に關する風説にも、尠らず弱らせられた。一口に言へば、私たち二人が、精神、性格、境遇等に於いて一致點があると言ふ噂は何にもまして私を惱ました。(私は上へには出来るだけその惱みを表はさぬやうに力めたのだが)。併し、眞實のところ、(二人の血族關係に關する噂と、キルスン自身の立場とを除けば)斯うした相似が學友間に何等の議論を惹起したり、または注目されてゐると云ふことを信すべき理由は更になかつた。キルスンも亦私と同様に、様々な事情からはつきりとそれを知つてゐると云ふことは明白であつた。だが、そんな状態にあつて尙幾多の私を苦しめる種を持つてゐることは、前にも述べた通り、只々彼の並外れた眼力に基くものであらう。

私の言葉と行爲とを完全に眞似ることのみ彼は腐心した。そして鮮かにこれを爲しおほせた。私の衣服の模倣などは彼にとつて最も容易いことであつた。歩き方や、全體の身振りを眞似ることも、困難ではなかつた。勿論私の大聲を眞似ることは出来ない相談だつたらうが、それでも音調はそつくりそのまゝであつた。彼の奇妙な喘きは、とりも直さず私の聲の反響となつた。

この最も精緻を極めた私の肖像畫は如何に私を苦しめたことであらう。(單なる風刺畫などではないのだ)併し唯一つの氣息めは、つまり彼のその模倣に氣付いてゐる者は私一人だけであると言ふ事實で、私は唯自分の同名者一個の妙な皮肉ぶつた晒ひを堪へてゐれば濟むわけであつた。彼は私の心に豫想通りの效き目を與へたのに満足して、こつそり自分の手際にせゝら笑ひを洩らして堪能してゐるばかりで、自分の機智縱横なる細工の成功に依つて容易に仲間たちの賞讃を拍し得たにも拘らず、そんなことは全く眼中に置いてゐないらしい様子であつた。そして學校内の者たちが彼の計畫を知らず、またその計畫の成功を認めて彼と共に私を嘲笑しなかつたことは、久しい憂き月日の間、私にとつては解き難い大きな謎であつた。おそらく彼が漸層的に彼の模倣に取りかゝつたか、つたか、或は寧ろ、説明(どんな愚鈍な人間にでも解るような説明)などは省いて、彼の獨創的な全精神を傾中して、たゞ一人私だけに解らせて、私だけを惱ませようとして、仕組んだ彼の水際立つた技倆の故に、辛うじて私は人々の嘲笑から免れたのかも知れない。

既に私は一度ならず、彼が私の面倒を見るやうな小癢な態度を取つたり、事毎に私の主張に差出口



をしたりすることを述べたが、この干渉が時としては無禮なる忠告、しかも大びらではなく當てつげがましい忠告のやうな性質を帯びることがあつた。私がこの忠告を憎悪する念は月日が経つに従つて、益々激しくなるばかりであつた。併し、その當時から可なり久しい歳月を経た今日では、私の敵が私に與へたその諷刺が決して若氣の至りの未熟な者のおぞましい考へ違ひからではなかつたことだけは充分に承認しなければならぬと考へるのだ。彼の一般的才能や、世間的知識は兎に角、黽くと道德的觀念は、私自身のそれよりは遙に鋭敏であつた。それに、若し當時私が眞底から徹頭徹尾疎じ憎悪した彼の意味あり氣な嘯きに含まれた忠告を、もう少し容れてゐたならば、今日の私はもつと善良な倅せな人間になつてゐたかも知れないのだ。

ところが、さう都合よくはゆかないもので、私は到頭、彼の不法な干渉が我慢出来なくなつて、日毎に彼の容し難い高慢としか思へない彼の振舞ひを愈々露き出しに憎悪した。既に述べた如く、二人が學友の交りを結んだ當初なら、私の彼に對する感情は容易に眞の友情に立ち歸つたかも知れなかつたのである。が、次第に後に及んで、彼の異常なおせつかいは假令或る程度まで確かに減じたとは言へ、殆どそれと正比例して、私は漸く積極的に彼を憎み出した。或る時彼はこれに氣がついたと見え、それ以後は力めて私を避け、黽くも避けるやうな容子をするに到つた。

私の記憶に誤なくば、恰度その頃のことであつた。私もは烈しい争論をした。彼は何時になく守勢的な態度を捨てて敢然と私に迫つた。私は彼の語調や、態度や、全體の容子の中に何か知ら私の

胸を打つものを感じた。それは遠い幼年時代のおぼろげな夢——記憶と言ふべきものも未だ生まれぬ頃の放恣な混亂した記憶を私の心の中に甦へらせたのである。ずつと昔、——古い古い無限に久しい昔に於いて、私は今日の前立つてゐる男と一度知己であつたのではあるまいかと考へをどうしても振り拂ふことが出来なかつた。と、唯さう言ふより他に適當な言ひやうもないのである。併し、この幻想は突如として現はれ、突如として消え去つた。私が茲にそのことを述べるわけは、私がアカデミーでこの奇怪なる同名者と言葉を交したのが最後であつたからである。

數限りなく區切りのしてある、この大きな古い家には、大部分の生徒の寢室に充てるために、互に相通じてゐる五つ六つの大きな部屋があつた。併し（かうした不細工な設計の建物には有りがちなことだが）この家にも半端なせせこましい隅だの、出張りだの、凹みなどが幾つとなくあつて、經濟に抜け目のないフランスビイ博士の考案で、さうした箇處は悉く寢室に利用されてゐた。ほんの物置位のところにも、一人位はどうやら眠ることが出来たのである。この小さな部屋の一つにキルスは眠つてゐた。

學校生活の五年目が終りかけた或る晩、今言つた烈しい口論をしたその晩のことである。皆ぐつすり寢込んだのを見済して、私はひそかに床から起き上ると、ランプを片手に、自分の寢室から覗け出して、敵手の寢室へ忍び寄つて行つた。これまでは悉く失敗を重ねて來たが、今度こそはと、前々から企んでゐた計畫である。彼の物置めいた寢室の前まで來ると、私は先づランプに覆ひを被せて部



屋の前に置いて、音もたてずにこつそりと部屋の中へ這入り込んだ。一足踏み入れたところで、ちつと耳を澄まして、彼の深い寢息を確かめてから、さて引返してランプを手に取り、再び寢室の方へ近寄つた。寢臺の周囲にはカーテンが掛つてゐたが、私は豫め手順通りにそれをそつと引きあげた。するとランプの明るみは彼の寢顔の上に落ち私の兩の眼もまたその上にちつと注がれた。ところが、忽ち痺れるやうな凍りつくやうな疎然たる感じが全身に泌み渡るのであつた。胸は烈しく動悸うち、膝はよろめき、名状し難い、しかも堪へ難い恐怖が私の全精神をひき攔んでしまつた。私は胸を喘がせながら、ランプを下へさげて、彼の寢顔をもう一度あらためた。果して、これが——これが、キリアム・キルスの顔であつたらうか？ なる程さうだ。さうに違ひない。だが、それにも拘らず、却々さう信じられぬ氣がして、私はまるで虐の發作にでもとらはれたやうに戦き慄へた。何が故に私はそんな氣がしたのであらうか？ 私は尙も凝視した——辻褃のあはない様々な考へが群がり起きて来る。彼の容貌はこんな風ではなかつた——起きてちやんとしてゐる時の顔付は確にかうは見えなかつた。同じ名前！ 同じ體の輪郭！ アカデミーへ入學したのが同日であつたこと！ しかも、私の歩き方や聲や習慣や態度などの強情な意味もない模倣！ だが、單にかうした皮肉な模倣をしてゐたと言ふだけの結果として、今眼前に見るやうな出來事が起り得るものであらうか？ 恐怖に打ちのめされ、慄然たる惡寒に身を震はせながら、私は無言のまゝ、その部屋を出て、その場から直ぐ學校の門を抜け、再びこの建物の中には歸つて來なかつた。

それから數ヶ月と言ふもの自分の家でのらくら遊び暮した後に、私はあらためてイートンの學生になつた。しばらく時日が経つと、ブランドスビー博士の學校での出來事の記憶は全く薄らいで、今では少くとも、自分の記憶してゐた感じの性質は實質的に變化してしまつた。この芝居の眞實味、悲劇的な味はずつかり失はれてしまつた。やがては自分がその當時果して正氣であつたか如何かをさへ疑ひ出した程である。そしてその時のことを思ひ返す場合には、大概、あんな途方もない出來事がどうして人間に信じ得るものかと訝しがつたり、私の心に遺傳的に備はつてゐる凄じい想像力に、つい微笑したりした。が、かうした懷疑はイートンで送つた生活様式のために全然變へらることもなかつたのである。イートンへ入學すると直ぐ向う見ずにも飛び込んで行つた淺果な放蕩生活の渦巻は、過ぎ去つた月日の浮萍を悉く洗ひ去り、眞面目な實直な印象もすべてその渦巻の中へまき込まれ、残るはたゞ前生涯のほんの軽い事柄のみであつた。

併し私はこゝで自分のイートンに於ける慘めな亂業——世の掟を蔑にし法網をくゞり抜けた亂行——の逐一を述べるつもりではない。三年間の徒らに放蕩無頼なる生活は私のすべての惡徳の習慣を愈々増長させ、それと同時に私の脊丈を竝外れて高くさせただけで、何の得るところもなく過ぎた。その頃、私は一週間ばかり卑しい淫樂に耽つた擧句、少數の粒擇りの放蕩學生を自分の部屋に集めて秘密の宴會を開いた。我々は半分夜が更けて集まつた、と言ふのもこの放埒な宴會を朝まで續けるつもりだつたからである。そして酒は豊かに充ち溢れ、又おそらく酒よりも一層危險な誘惑物にも事缺



かさなかつたので東の空がしらじらと明けそめた頃に及んで、私たちの莫迦げた酒宴は漸く酣であつた。骨牌と酒とで狂じみた程上機嫌になつた私が、更に並外れた悪遊びのために人々の乾盃を求めた時であつた。唐突に、細目に開けられた扉の外から、はげしく私の名を呼び立てる小使の聲に気がついた。彼は、何者か玄關へ来て、至急私に會つて話をしたいと言つてゐると告げた。へべれけに酔つぱらつてゐた私は、この思ひがけない邪魔者に驚くと云ふよりは寧ろ喜んで、直ぐ千鳥足で五六歩よろめきながら玄關へ出てみた。其處の狭い低い室にはランプも灯されず、半圓形の小窓から射し込む仄かな曉の薄明りが漂つてゐるだけであつた。私は闕へ踏み出した時、恰度私と同じ位の脊恰好で、私自身が着てゐるのと同じ流行仕立ての白カシミヤのモーニング・フロックを着た男の姿を認めた。それだけは、微かな薄明りでわかつたが、併し彼の容貌までは見わけることが出来なかつた。私が部屋へ入つて來たのを見て、いきなりその男はせかせかせしながら、私の耳もとで「キリアム・キルスーン」と囁いたのである。

私は一時に酔ひがさめてしまつた。

その見知らぬ男の態度や、薄明りの中にかざした指のわなわなと震へてゐる様子を見た時、私は言ひやうもない驚きを感じたが、併し私を何よりも吃驚させたのはそのことではなかつた。それは、奇妙な低い囁れ聲で、私の耳に囁いた「嚴な、意味ありげな警告であつた。殊に短いながら、聞き覚えのある、その囁くやうな語調は、とりとめもなく群がる過去の記憶を呼びさまし、私の魂を、まる

でガルバニ：電池にでも觸れたかのやうに激しく打ちのめした。そして漸く正氣に復つた時には、彼はもうその場にゐなかつた。

この事件が、私の常規を逸した想像力に目ざましい効果を與へたことは事實だが、併しそれもやがて消えて行つてしまつた。數週間と言ふもの私は熱心に研究したり、また病的な穿鑿の迷雲に圍まれて惱んだりした。斯うして何時までも執拗に私のやることの邪魔をし、皮肉な忠告で私を苦しめる不思議な人物が誰であるかは解つてゐた。併しキルスーンとはそもそも何者であらうか？——何處から來たのであらうか？——そして何が目的なのであらうか？これらの何れの點に就いても私には納得することが出来なかつたが、たゞ確かめ得たところは、私がフランスピイ博士の學校から逃げ出した日の午後、キルスーンもまた何か家庭の都合で其學校を俄かに退いたと言ふことであつた。併し、幾許もなくこんな問題は等閑にされた。私は豫てから心がけてゐたオックスフォードへ移ることで頭が一つばいだったからである。やがて私は其處へ行つた。私はこの頃既に贅澤三昧に耽つてゐたのだが、兩親の途方もない虚榮心に乘じて、無駄金を費ふことにかけては英吉利第一の金持貴族の相續息子とも張り合へる程の仕送りをして貰ふことが出来た。

こんな工合に悪徳が翼を伸ばすのは甚だ申し分のない状態にあつたのだから、愈々私の生來の氣質は煽り立てられて、僅かな日常の羨みさへも蹂躪つて、ありとあらゆる亂行に身を持ち崩した。併しさうした始終を仔細に述べ立てる必要もなからう。たゞ幾多の道樂者の中でヘロデ王すらも及び難い



程の背徳者であつたこと、及び歐羅巴隨一の放蕩學校の長い悪行の記録に、更に私は新奇な悪行の數を創始して、あまり短くない増補を加へたことを言つて置くだけで満足してほしい。

だが、それにしても、名門の一族である私がそんな悪行の果てに、職業賭博者の陋劣な手巧を覺えてその立派な立人になつて、氣の弱い學生共から少からぬ金を絞りとつてゐたなどと言つたところで、恐く人は信じないであらう。ところが、それは事實だつたのである。この事實が他人に見咎められなかつた唯一の理由とも言ふべきものは、それが餘りに男らしくない、滅法な、全く良心を持ち合せぬ人間でもない限り爲し能はぬ悪事であつたからだとか考へられる。實際、快活で、率直で、しかも寛容なキリアム・キルスン——オックスフォードの自費生の中で最も貴族的な最も氣前のいゝキリアム・キルスン——その亂行は若い者に有りがちな放恣な氣紛れであり（と私の悪友たちは言ふのであつた）の背徳をさへ不注意な向う見ずの馬鹿遊びの故であるとされてゐるキリアム・キルスン——が、斯くも卑劣極る罪惡を造つてのけるだらうかと疑ふ前に、如何に行狀を持ち崩した輩だつて、先づ己の正氣を疑ひたくなつたに違ひない。私はそれから二年間と云ふもの、ひたすらこの手ばかりを用ひて、毎時も上首尾であつた。恰度その頃になつて、グレンディングと云ふ若い金持ちの貴族がこの大學へ入つて來た——噂に聞けば、この男はヘローデス・アッテイカスのやうな成金で——しかも、彼の富もまた同じやうに易々と儲けたものであるとのことであつた。私は間もなく彼が薄のろであることを知つて、この男を餌食にしてやらうと企てた事は云ふまでもなかつた。私は幾度となく彼

と賭博をやつた。そしてばくち打ちの慣用手段として、初めはわざとたんまり儲けさせて置いてから、徐々に私の係蹄へ誘き込むやうにした。到頭潮時が來たと見てとると（私はこれが最後の決定的な會合だと思ひながら）一日同じ仲間の自費生（ブレストン君）の部屋で彼と落合つた。ブレストンは我々二人の親しい友人で、私の企みなどは夢にも氣付いてゐなかつたことを彼の名譽のために辯じて置く。私は尙この會合の體裁を繕ふため八九人の仲間をかり集め、更に充分用心を重ねて、如何にも偶然らしく、グレンディング自身から骨牌をやらうと言ひ出すやうに仕向けた。兎に角、私は斯うした場合には必ずやる卑劣なごまかしを悉く用ひた。それは私が何時でも仕組む十八番の係蹄で、まだこんな奸計にみすみす引つかゝる馬鹿があるのかと不思議に思はれる位であつた。

勝負は夜更けても決せず、遂に私はグレンディング一人を相手にするところまで漕ぎつけた。勝負は私のお手のもの、「エカルテ」だつた。他の連中は我々のこの手合せに興味を惹かれて、自分達のカルタを抛り出したまゝ、二人を取り巻いた。宵の口からそれとなく手を廻してグレンディングを強か酔つばらはせてをいたのだが、彼が今は恐しく焦立つて骨牌を切つたり、配はつたり、ひいたりするのを見ると、必ずしも酒の酔ひに依る神經過敏許りではなさゝうな氣がした。瞬間に、彼は私から大分借りをこしらへた。そこで、彼はポルト酒を一氣にグイとあふりながら、まんまと私が冷かに期待してゐたところの係蹄へはまつた——彼は既に莫大な額に達してゐる賭金をは倍額にしようと思し込んだのである。私は表面は不賛成らしく伴つて、幾度も拒絶して彼を憤らせてから、それでも